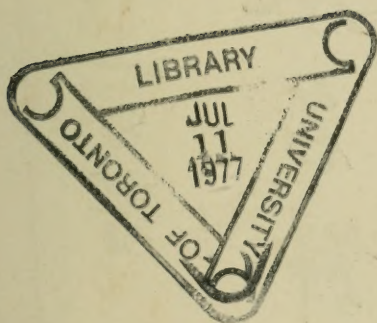
德富猪一郎著

日本名婦傳

東京駿河臺
主婦之友社發行

序

何時の頃にや、主婦之友社々長石川武美君、來りて予に諮りて曰く、試みに日本女性の中にて、御身の尤も意に適したる十二人を選擇し、それに就て語られなば、幾十萬の『主婦之友』の讀者各位にも、必ずや多少の裨益を與ふるであらうと。予直ちに快諾し、かくの如くして豫定の通り、毎月一人宛、一個年繼續し、こゝに十二個の、日本女性の傳記は出で來つた。傳記と云ふも、月並のものではない。云はゞ一種の評傳

である。

固より日本に於ける理想的の女性は、これに限りたるものではない。若し精細に吟味したらんには、均しく十二人とするも、倘ほ出入を要すべきものが無しとも限らない。但だ予は其の折々予の胸中に往來したる女性を抽き來りて、これを主題としたるのみ。

予は世間の所謂る女性禮讃者ではない。然も亦た決して或者の如く、女性憎惡者、若しくは女性卑下者ではない。予は予の信ずる流儀もて、女性を歎美し、尊崇し、且つ禮讃し得る。

苟も本書を讀む方々は、女性各個に對するのみならず、日本の女性全體に就て、如何に予が考へてゐるかゞ分明するであらう。

日本の女性には、自ら一種の通有性がある。而して其の最も圓滿具足せる典型は、恐れながら我が昭憲皇太后に於て、之を拜し奉る。されば予が番外として、特に昭憲皇太后に就て語つたのは、要するに本書に冠すべき提綱として然るもの。但だ其の語りて詳かなる能はざる所以も、亦た唯だ提綱たるが爲である。

日本名婦傳の名は、石川社長の命名したるもの。而して本書は首より尾に至る迄、悉く予の口授を、八重樫君子女史によりて筆記せられ、それを更に予が校定したるものである。

昭和三年二月初四

蘇峰陳人

目次

目次

目次

目次

目　次

——目次(終)——

日本名婦傳

蘇峯　德富猪一郎

名婦傳講述の由來

大正十三年一月から十二月まで、私は主婦之友社長石川君の望にまかせ、日本婦人の新教養につき、十二回の講述をいたしました。それが皆樣に如何なる效果を與へたか、知りませぬが、大正十五年の八月には纏めて、一册の書物とし、『婦人の新教養』と題して主婦之友社から刊行されました。そしてそれが、今日（大正十五年十月三十日）では、既に三版となつてゐることを見ますれば、多少世間に歡迎せられたことが、證據立てられます。

私が一年の間、『主婦之友』のために盡したことが、全く無用でなかつたことを思へば、衷心欣喜に堪へませぬ。然るに、過般石川社長から、重ねて、日本の歷史的婦人につき、

第一　細川忠興夫人

明智光秀と細川家との關係

細川忠興夫人明智氏は、明智光秀の娘であります。これまでの歴史では、明智光秀といへば、その主君信長を弑した、逆賊といふことになつて、まるで惡黨の標本となつてをりますが、それはあまり殘酷の評であります。凡そ人を論ずるには、時代を知らなければなりませぬ。或る時代には或る時代の精神があります。足利の末には下剋上とて、下から上を犯すことが最も流行でありました。例へて申しますれば、足利將軍の權を細川氏が奪ひ、細川氏の權を三好氏が奪ひ、三好氏の權を松永彈正久秀が奪つたといふが如きものであります。

元龜、天正に至りまして、その風は聊か下火になつたやうでありまするが、尙ほ到るところに盛んでありました。そこで家來が主人をやりつけるなどゝいふことは、その時代に

は何も珍らしいことではなかつたのであります。たゞ光秀は、第一の相手が、天下に武を布いたる大立者信長であり、しかもその第二の相手が秀吉であります。秀吉は日本に於ける宣傳術の大博士でありましたから、遂に光秀一人が、大悪人になつた次第であります。何も私は、光秀から頼まれて、彼を辯護するわけではないが、彼はなか〳〵の遣手であつたのであります。卽ち一種の人物であります。

そこで彼は、一個の浮浪人から、幾年もなく一躍大々名となり、丹波や近江の國守及城主となつたので、鬼柴田と云はれた、織田家譜代の柴田勝家からまで、やいやいもちをやかれたほどの者であります。彼は、武勇一點張りの時代に、政治の才もあつたらしうございます。また一通りの學問があつたことは、言ふまでもありません。

細川家は足利將軍の時代に於ける、最も門閥の家で、細川幽齋は文武の達人で、殊に和歌に於ては、古今集の皆傳を受けた人であります。しかし風流のことばかりでなく、政治にも才幹があり、太閤の時には、石田三成と共に、薩摩の檢地にも與つた人であります。その子が卽ち忠興で、後に三齋と申しました。

これはたゞ傳說でありますが、明智光秀は、もと細川幽齋の家來となつて、幾何かの知行にありついてゐたが、先の見込がないとて、そこを立退き、漸くにして信長に仕へて、愈〻立身の目的を達したといふことであります。それが嘘か眞か、ともかくといたして、明智光秀が丹波の國守となつた時には、信長は幽齋、忠興親子を、光秀の與力としてつけたのであります。

元龜天正時代の婦人の特色

乃ち細川親子は信長の幕下にありつゝ、光秀の指揮の下に働くことになつたのであります。その關係で光秀の女は、信長の媒介にて、細川忠興の妻となりました。細川忠興は、また當時に於て、特色ある大名でありました。彼は十一歲にして槇の島の合戰に高名し、天正五年十五歲の時には、河內國片岡城の攻擊に先登し、信長から感狀を賜りました。茶道については、利休の高弟であり、文武の諸藝に精通せざるはなかつたのみならず、またなか〳〵の智者であり、策士でもありました。しかも隨分意地惡でもあり、癇癪持でもあ

り、その家來なども、大分手打にされてゐます。忠興と夫人明智氏は、年齡は同じでありました。近頃流行の言葉で言へば、才子淑女一對の好夫婦でありますが、才子必ずしも溫良ならず、淑女必ずしも靜淑ならず、仲が良い中にも、隨分むづかしい夫婦關係でありました。

日本の婦人が、徹底的に柔順であり、一から十まで亭主の無理を通すのが、女の道であるといふのは、德川時代の女大學の敎育から來たものでありました。元龜、天正から、慶長元和の頃までは、なか〳〵左樣ではありませんでした。男も甚だ手剛かつたが、女もまたその通りでありました。足利氏の時代には、後妻打ちなどゝ申して、若し男子が婦人を離別して、後妻を迎へる時には、前妻は、その仲間の婦人を伴ひ、一同各得物を携へ、鉢卷をするやら、襷をかけるやら、棒を振るやら、石を飛ばすやら、後妻の家を襲つて、散々の亂暴をしたものであります。

斯る時代でありますれば、明智氏夫人とても、獨自一己の人格を具へてゐて、絕對的服從といふことは彼女にはありませんでした。秀吉の夫人北政所なども、よく秀吉と諍ひ

をされたのであります。されば明智氏夫人が前申した通りであることも、何の不思議もありません。當時の女性は、いざとなれば戰場にも立つ決心をしてゐました。現に前田利家の大將奥村永福の妻の如きは、末森城の籠城には一かどの働きをしたのであります。

さて光秀が、本能寺に信長を打取つたとき、彼は幽齋父子に斯く申し送りました。『畢竟今度の思ひ立ちも、忠興などの前途を慮つたゝめである。ついては、さしあたり攝津一國を宛てておくゆゑ、早速この方にまゐれ。』といふことでありました。攝津と申しますれば、日本全國の中では、上國であります。然るに幽齋父子は、これを斥けて、信長の死を弔ふため、髻を切つて、法體となり、而して逆賊の女なればとて、明智氏を離別いたしました。そこで明智氏は、仕方なく、その家來と共に、三戸野の山奥に、佗住居をいたしました。

夫人の基督教に改宗の動機

然るに山崎の合戰にて、光秀は敢なく死し、天下は愈ゝ秀吉のものとなりましたが、秀

吉は忠興夫婦のことに甚だ同情し、再び彼の媒妁にて、覆水を盆に還しました。これは秀吉にとつては、誠に賢明な仕方でありました。しかし明智氏にとつては、父が敢ない最期を遂げたのは、多大の打撃であつたのであります。彼女がキリスト教に改宗した動機も、恐らくその煩悶を解くためであつたかも知れません。

彼女は才色兼備の譽高く、從つて忠興の心配も一通りではありませんでした。秀吉は男女關係については、極めて放埒であり、屢ゝ大名の奥方などを城中に招き、これを留めおいたことがあります。然るに明智氏は固く辭して、これに赴かず、强ひて招かるゝ時は、短刀持參の上にて罷り出づべしとのことに、流石の秀吉も思ひ止まつたといふ話もあります。かつて忠興が朝鮮出征の先から、彼女に贈つたといふ歌に、

靡くなよ我袖垣の女郎花
　男山より風は吹くとも

とありますが、この一首によつても、如何に彼女の良人が心配してゐたかゞ判ります。
彼女はいつ頃、如何にしてキリスト教に歸依したかと申しますと、その夫の忠興の茶道

の親友高山右近が、前からその信者でありまして、高山はしきりに忠興に道を説いたが、忠興は自ら信ぜず、それを夫人に語り、却て夫人がそれに感發したのであります。恰も忠興が秀吉に從つて九州征伐に赴いた留守中、彼女は侍女數名を從へ、大阪の玉造の邸の裏門から出て、敎會堂に赴きました。こゝで、彼女は師父に就いて、キリスト敎の敎義を聽き、もはや再び敎會に來る機會がないからとて、受洗を請ひましたが、師父は多分秀吉の奧向きの姬妾かと推して、これを辭しました。

留守の者は夫人の不在に驚き、輿を携へて寺院などを探した揚句、やつと敎會堂でこれを見出し、日暮に歸邸せしめたのであります。これからは彼女の出入にも、留守居の者が氣をつけて、全く不自由になりました。そこで彼女は、最も信用する侍女を、敎會に遣はして、敎義を質問し、間接にこれを聽きました。而して侍女十七名は、すべて受洗し、夫人一人これを受ける機會を持ちませんでした。そこで彼女も是非受洗したいと、夜中棺の中に入つて、邸を出ようとしましたが、師父はこれを諫め、彼女が最も信用する侍女に、洗禮の法式を授け、夫人は侍女の手から、愈〻洗禮を受けました。そしてその敎名をガラ

シヤと稱しました。世間で謂ゆる伽羅紗姫とは、卽ち夫人のことであります。

熱心なる夫人の信仰生活

夫人は、その二人の子供をも、併せて受洗させました。彼女は如何にも聰明でありまして、やがてホルトガル語や、ラテン語なども覺えました。そしてその身は、宛も修道院的生活をして祈禱し、『キリストの模範』その他、信仰に關するあらゆる書物を讀みました。然るに九州から凱旋した忠興は、彼女にその信仰を擲たんことを迫りました。而して、若し諾かずば殺すとて、短刀を夫人の咽喉に擬しましたが、彼女は、固より覺悟の前とて、毫も驚きませんでした。そして靜かに、『御身は我が生命を絕ち得べし。しかも我が信仰の心を易へしむる能はず。』と言つたといふことであります。而してあまり迫害が甚くなつたので、師父に書を送つて、脫走せんことを計りました。しかし『如何なる苦痛をも忍受するは、信徒の本務なり。』と諭されて、それを思ひ止まりました。

當時の社會に於ては、貞操觀念は、さほど堅くありませんでした。しかし彼女はその點

について、何等の疑ひもなき、清淨潔白の一人でした。そして彼女は當時に於て、珍らしき、新しき婦人でありました。その當時宣教師側の文書に彼女を評して、『容貌の美麗比倫なく、精神活潑にして穎敏果決、心情高尙にして、才智卓越す。』とあります。

さてこれから彼女の殉節についてお話しませう。時代は慶長五年、關ヶ原の役の際であります。彼女の夫忠興は、家康に從つて上杉征伐のため、東國に向ひました。思慮深い忠興は、留守中上方には、きつと騷動の起るのを豫期し、大阪の邸を出立する時に、夫人と種々打合せ、留守の者にも訓令しておきました。

ところが案の如く、石田三成はその同志を語らひ、秀賴公の御爲を名目とし、毛利、宇喜多を味方として、愈〻旗擧げいたしました。そこで問題は、人質として明智氏を大阪城にとり入れることでありました。その時の顚末は、明智氏に從うた侍女の一人、霜と申す女が、その詳細を筆記したものが、今尙ほ細川侯の家に、當人自筆のまゝ殘つてをりまして、それでよく判るのであります。

從容として迫らざりし夫人の死

かねて忠興と石田三成とは仲悪く、されば案の如く、細川夫人に、人質となつて大阪城に入れと申して來たのであります。しかし初めから覺悟の前の夫人は、なかなか聽き容れません。元來宇喜多秀家は前田家の聟で、また忠興の長子忠隆も、前田家の聟でありました。そこで細川と宇喜多とは親類關係でした。されば宇喜多の家まで夫人が出掛ければ、親類を訪問するわけで、人質になるわけではないといつて說得しても、夫人は斷然聽きません。彼女はその娘、即ち忠隆夫人前田氏にも堅く申附け、決して人質に出てはならぬ、いざとなれば共々に死なうといふことを、約束しました。實に夫人の決心は山の如くでありました。

而して邸は小笠原少齋、河北岩見、及び稻富伊賀の三人にて守ることになりました。稻富伊賀といふのは、當時日本一の砲術の名人で、表門を守つてゐましたが、いつの間にか心變りして、敵と一緒になりました。

もはや敵も間近に踏み込まうとしたので、小笠原少齋は、薙刀を持つて夫人の御座所にまゐり、『只今が御最期に候』と申しました。夫人は、死なば諸共といふので、その娘前田氏を呼びにやりましたが、彼女は最早影も形も見えませんでした。それで彼女は一人にて節に殉ずることになりました。而してその模様は、誠に從容たるものでした。

『扨は心に懸ることなし少齋介錯いたし候へと仰せらる。畏まりて候とて、長刀を提げ、老女を先に立て參り候處、御髪をお手づから上へ、きり〳〵と巻上げさせ給へば、少齋左樣にては御座無くと申上げ候。心得たりと御胸のところをくわつと御押開きなされ候。少齋敷居を隔て候ひしが、御座の間に入り候こと、憚多く候へば、今少し此方へ御出なし下され候へと、申上げゝれば、敷居近きところに御居直りなされ候。長刀にて、御胸元をつき通し奉り候。少齋も此處にて御供仕るべく候へ共、憚り多く候とて、表に立出で候。』云々。

これは、細川家の記錄に掲げられたものであります。このことは宣教師側の書いたものと、大體相違ありません。また宣教師側の書いたものには、彼女の人物を評して、『夫人

は容顔美麗のため、他より戀慕せられ、また良人より嫉妬を受けた。しかしその行ひは謹嚴で、斷食もし苦錬も勵行した。或は捨子を邸内に養ひ、或は領内に敎へを擴ぐべき、師徒を寄食せしめた。また宣敎師と共に敎義を語ることを好み、ラテン語若しくはホルトガル語などの、外國語も語ることが出來た。』とあります。

當時に於ける最も特色ある婦人

忠興も彼女の感化を受けたのでせう、彼の印は黑田如水と同樣に、ローマ字でたゞおき、(Tadaoqui) と書いてあります。伊藤公は嘗て『明智氏の自殺は誠に結構だが、二人の子供まで刺殺して、死んだといふことはあまり殘酷ではないか。』と言はれましたが、これは全く事實が違つてをります。

第一、自殺ではありません。彼女は決して死を恐れぬが、キリスト敎徒として、自ら殺すことはしません。小笠原をして介錯せしめたのは、霜女が書いた通りであります。

第二に、その子供、與一郎(忠隆)、與五郎(興秋)の二人は、東國に赴いてをります。內

記(忠利)は江戸に人質となつてをります。されば如何に刺殺さんとしても、一人の子もをりませんでした。たゞ與一郎の媳がゐましたが、それは前にも申した通り、いつの間にか邸を立去つたのであります。

彼女は必ずしも、何等の缺點なき女性と申すことはできません。隨分自我も強く、夫からしても、なかなか手剛き妻でありました。しかし、當時に於て、特色ある、凛々しい、しかも聰明なる婦人でありました。私は實に彼女を以て、我が大和民族の誇りとなすものであります。

第二　江馬細香女史

儒教の普及と女性に對する感化

德川氏二百六十餘年の間には、種々樣々の特色ある女性が出て來ました。しかし槪して言へば、これ等の女性には一つの通有性があります。それは一言にして申しますれば、先づ儒教主義の感化、とでも言ふべきものでありませう。德川幕府の初めから、だん〳〵儒教が行はれ、家庭の上にも、社會の上にも、または各個人の上にも、孔孟の敎へが、その根本精神となつて來たのであります。

しかしながら、その儒教主義の感化を受けた中にも、自らその方面の異つたものがあります。例へば德川氏の初期に屬する土佐の野中兼山の娘、婉女の如き、父は土佐藩の家老であり、當時に稀なる大政治家であり、改革の政をなし、そのために罪を得て、切腹するに至りましたが、從つてその女、婉女もまた罪を受け、而してその反抗的精神は、

彼女の一生に宿つたものでありませう。彼女は學問に秀で、また醫者として、その一家を支へましたが、その風采、振舞等は、餘程世間とかけ離れてをりました。彼女は、お婆さんになつてからまでも、娘時代の振袖を着、また外に出るには一刀を横へてゐたといふほどでありまして、なか〳〵磊落、不羈の振舞をしてをりました。これ等は毛色の變つた女性でありまして、彼女は一生處女で通したのであります。

また徳川氏の中期に於ける、井上通女の如きは、當時に於ける女博士ともいふべき、女性でありました。彼女は漢學にも勝れ、和學にも長け、詩も作り、和歌も詠み、漢文も綴り、經書も讀み、一般の女性は愚か、當時の有名な學者でさへも、頗る感心してゐたのであります。彼女は、讃岐丸龜の藩士の女でありましたが、その主家である、江戸に在る京極家の奥に仕へ、その仕へたる京極侯の老夫人の死亡後、また家に歸り、斯くて中年過ぎて三田氏に嫁し、こゝに於て彼女は賢妻良母となり、七十九歳にして逝きました。その辭世の詩、若しくは歌を見れば、實に彼女の修養が尋常でないことが判ります。その詩には斯うあります。

『一氣終る時萬事休す。天を樂しみ命を委ぬ、また何をか憂へん。子孫孝ありて、若し我を思はゞ。勤めて書を聖賢の中に向つて求めよ。』

歌には、

我もまた正しきを得て斃れなば
　これのみなりと思ふばかりぞ

とありますが、これは、孔子の門人曾子が死ぬ時の言葉であります。彼女は死ぬまさかの際にも、それをよく覺えてゐたものと思はれます。

また、伊勢の荒木田麗女の如きは、『池の藻屑』などいふ著述もあつて、歴史上の知識、見識も、決して並々ではありませんでした。その他、一藝一能に秀でた女性は、澤山あります。

細香女史の父江馬蘭齋の風格

しかしその中で、私が最も理想的の一人と思ふのは、江馬細香女史であります。彼女

は寧ろ徳川氏の末期に近き時代の、代表的女性でありますが、別に著述として多くのものを殘してをりません。たゞ『湘夢遺稿』といふ二卷の詩集があります。その他、彼女の描きました繪――多くは墨竹でありますが――が若干殘つてをります。若し彼女が世の中に何事をなしたかと言はゞ、これと申すほどのものはありますまい。しかし彼女は當時の社會に於ける、最も教養ある女性の、標本と申しても差支ないものであると思ひます。

　彼女の父は江馬蘭齋と申しまして、美濃大垣の醫者でありましたが、只の醫者でなく、當時新知識の源ともいふべき、蘭學者の一人であり、醫學上に於ける著述、飜譯もあります。彼が八十四歳の時に自分で書いたものがありますが、それに斯うあります。

『我生涯、喜怒、苦樂、貧富なし。專ら儉約を守り、吝嗇をなさず。酒菓、煙草を嗜まず、花街戲場に遊ばず、行樂、山水、花月を娯まず、もとより殺生の類を憎む。金錢を以て人と交易せず、これを以て金錢の役するところとならず。家族和合、かつて喜慍の色を見ず。幸に八旬を逾ゆといへども、未だ老耄せず。』これは當人が自ら言つたところであります。また細香女史が、その父の八十の賀の詩には、斯く書いてあります。

『年はじめて六十、即ち仕を致す。素願書を著して梓に上さんと欲す。七十不幸繼嗣を失ひ。再び刀圭をとつて、憤然として起つ。八十兩孫業を承くるに足る。内外巨細一に彼に委す。舊によつて復、蟹行の文を讀む。老いて益〻精研燈晷に繼ぐ。』

これで見ますれば、彼女の父は六十で隱居し、それから著述にとりかゝつたのでありますが、七十の時に、その相續者松齋を失ひ、そこで再び自ら一切の俗務に當り、八十になつて兩人の孫共が成人したから、一切を引き渡し、八十からまた外國の書物を讀み、愈〻勉強にとりかゝつたといふことであります。これで見ますと、如何に精力旺盛の人であつたかゞ判ります。

淸秀溫雅なる女史の容貌と性質

而して細香女史は、その第二子でありました。彼女は、繼母に養はれましたが、しかも彼女と、その繼母との間が極めて圓滿だつたことは、彼女が、繼母の死んだ時に作つた詩が、よくこれを語つてをります。彼女は幼き頃より讀書が好きで、また繪を描くことが

好きでありました。彼女を掌中の珠と可愛がつた父は、彼女の欲するところにまかせ、力めてその志を遂げさせました。彼女は非常に美人といふほどではありませんが、何れかといへば、女學者に往々あるところの、不器量ではなかつたのであります。

彼女の風采については、當時の學者が種々に書いてゐますが、何れも氣高き風采であつたことが判ります。例へば田能村竹田が秋の蝶を詠じたる詩に、

『慘々の心情、淡々の粧。風露に沾ひて、秋芳を趁ふに慵し。如今願はくば滕王を倩ひて寫し。濃州馬細香に郵寄せん。』とありますが、これは秋蝶を詠じたのか、それを假りて細香女史を詠じたのか、何れにしても竹田ほどの人が、斯く申すのを見れば、女史の風采が思ひやられます。また藤井竹外の詩にも、『一瓶の秋水、芙蓉を挿む』とあり、梁川星巖は、これを評し、『七字女史の丰神を寫す』といつてゐます。

また大垣の人にて、少年の折、彼女を見たといふ某氏が、私に書を與へて『肉は肥にあらず、瘦にあらず、長は高からず、低からず、少々高き方に候。顏は丸にも長きにもあらず、腰は海老に相成り居られず、容貌は美人の方に候。察するに二八の頃には、嘸

美人にてありしと、想像致され候。』とありました。

容貌ばかりでなく、その性質もまた謂ゆる學問的の婦人には珍らしき、温雅の人らしくあつたやうに見えます。大槻磐溪が若い頃に、京都で女史に面會した時に、斯く書いてをります。

『江馬氏、名は多保、大垣の人、父蘭齋翁の長女なり。幼くして文詩を好み、兼ねて墨竹を善くす。大抵閨秀、文墨ある者、往々輕俊憎むべし。獨り細香は然らず。これと對晤す、柔順和易。而してその著すところを顧れば清秀奇拔、殆ど丈夫をして、走り、且つ僵れしむ。奇女子なり。』

さればその容貌が上品であり、氣高くあつたばかりでなく、その風采、態度なども、極めて申分なき、謂ゆる學者臭くなく、高慢臭くなく、極めて落附きたる、而して男子らしき婦人でなく、婦人らしき婦人であつたらうと思はれます。

相見て相合うた山陽と細香女史

私が細香女史に對して尊敬を拂ふのは、單にこればかりではありません。彼女が儒教主義の道德を、心からよく行つたその克己の精神であります。露骨に申せば、當世言葉で彼女は失戀者でありました。しかしその失戀なるものは、一方ばかりでなく、雙方からのことでありました。

その相手は誰あらう、當時天下の文壇の文柄を握つてゐた、彼女の師、賴山陽その人でありました。彼女と山陽との交渉は、實に面白いといへば面白く、氣の毒といへば氣の毒、或はこれが一種の悲劇ではないかと思はれないこともありません。極めて單簡に申せば、山陽は三十二歲の時に、京都に飛出しました。而して三十四歲の十一月、美濃大垣に於て蘭齋と細香に面會しました。當時細香は二十七歲でありました。何故にそれまで彼女が結婚しなかつたかといへば、恐らくはその父が、彼女を愛するの餘り、その傍より離すのを欲しなかつたゝめか、或はまた彼女の健康狀態が如何であつたかもしれません。

素より當時に於て、すでに有名な才女であり、家は大垣に於ける結構な家柄なれば、相手は何處にもあつたに相違ありません。申込は多かつたが、諺に謂ゆる長し短しで、或

はたゞ彼女が欲する相手がなかつたと、いふのかも知れませぬ。然るに山陽と細香とは、互に相見て、憎からず感じたのでありませう。その後山陽が彼女に與へた手紙を見ると、如何にも尋常ならざるものが、看取されます。それから翌年、山陽が三十五歳、細香が二十八歳の時、その二月に、恐らく前年約束したものと見えて、女史は京都に上り、山陽及び武景文などゝ嵐山に同行してゐます。

これから以來兩人の關係は、日々に親密になつてゆきました。幸ひに山陽が細香に與へた手紙は、悉くではないが、殆ど保存され、私もその中の多くを讀んでをりますが、不幸にして細香から山陽に宛てた手紙は、殆ど見當りません。しかし愼ましやかなる細香なれば、恐らく山陽ほどには、その思ふ通りを打明けはしなかつたらうと思はれ、それを見ないからといつて、別段失望しませんが、手紙よりも寧ろ、その詩を讀みますれば、何となく思ひが溢れて、掩ひがたいものがあります。

然るに、當時山陽も獨身、細香も獨身であります。それで何故、彼等は表向きに、結婚しなかつたか、それは全くの疑問であります。疑問は疑問だが、山陽は勿論、細香の方で

も、決してそれを嫌つたのでも、厭うたものでもなく、その心中では、非常に熱烈に想ひ合つてゐましたが、たうとう實行することができませんでした。それには種々想像說があります。

謎遂に解けずして終る

ともかく人事意の如くならずで、それが實行できなかつたのでありませう。現に文化十二年、山陽三十六歲、細香二十九歲の時には、山陽から細香に、何やら結婚を促す、謎らしき手紙を與へてをりますが、その謎は、遂に細香の方で解かれず、その年に山陽は、りゑ女史を娶り、遂にこゝに於て、兩人の結婚すべき關係は、終天極地、全く斷絕となりました。

しかしながら、彼等兩人が、精神的に相契合してゐたことは、兩人の間に於ける書翰、詩、その他によつて、十二分にこれを察することができます。爾來細香は、その極めて變化少き生涯に於て、美濃から京都に出掛け、山陽に從遊することを唯一の愉快とし、山陽

もまたそれを愉快としてゐたに相違ありません。而して相見ざる間は、常に詩や書翰を往復して、互に遣瀬ない思ひを遣つたのであります。

文政二年、山陽四十歳、細香三十三歳の十一月に、山陽は斯く手紙を寄せてゐます。

『扨、今冬は暖氣、梅花など大分開き申し候。花下に至る毎に、未だ嘗て清丰を思はずんばあらず。何卒年のよらぬ中に御上京の計、御決しなされ度候。』

しかしこれも彼女の兄松齋の病死したゝめに、水泡に歸したのであります。爾來彼女と山陽との關係は、山陽の死に抵るまで、否寧ろ、山陽死して後三十年、彼女の死に抵るまで、思慕の情が絕えませんでした。世間では、この二人の關係について、種々と不都合なることを言ひふらす者がありますが、私の見るところによれば、如何にも聖き關係であつて、互にその矩を踰えなかつたのであります。矩を踰えなかつたといふところが、儒教的道德の一大眼目で、それを彼等兩人はよく實行しました。

そして何れかと言へば、山陽はその方にかけては、寧ろ弱點の多かつた人でありますから、矩を踰えなかつた信用は、主として細香女史その人に與へねばなりませぬ。

世の中には、我々が欲するところを、欲するまゝに恣にするのが、人間の本分だと言ふ人がありますが、私共の考へでは、それでは人も畜生も變らないと思ひます。人間の人間たる價値は、その欲するところを恣ににせず、謂ゆる情に發して禮に止まる、といふことが、最も必要と思ひます。幸ひにして敎養ある女史は、よくそれを辨へて、それを行ひました。これが卽ち、私が彼女を尊敬する主なる理由の一であります。

敎養ある當代婦人の花

ついでに、山陽と彼女との最後の別れについて申しませう。それは天保元年、山陽五十一歲、女史四十四歲でありました。その時も彼女は、山陽に伴つて嵐山に遊び、或は山陽の鴨川端の家に於て、山陽の平家琵琶を聽きました。その歸るさに、山陽はわざ〳〵彼女を送つて、琵琶湖畔唐崎までまゐりました。その時の彼女の詩に、『二十年中、七度別る。未だあらず、この別尤も說き難きを。』とあります。山陽は岸に立ち、彼女は舟の中にあり、岸と舟とがだん〳〵離れてゆく時、互に相見て、相別れたことが、詩に詠じてありま

す。また山陽は、『此を去つて濃州遠き道に非ず　老來轉思ふ、數逢ひ難きを。』と詠つてゐます。

斯くて彼等は、蟲の知らせだつたのでせう。これが遂に一生の別れとなりました。彼女は、その翌年は繼母が病死したゝめ、京都に赴くことができませんでした。その翌年も父の病氣のため行けませんでした。

而して、その九月二十三日に、山陽は遂に逝いたのであります。しかしながら爾來彼女は、未だ曾て山陽を忘れず、自分が七十歲で血を吐いた時も、『只憐れむ、病狀先師に似たるを。』と詠んで、山陽が血を吐いたことを思つてをります。斯くて彼女は文久元年九月、七十五歲で逝きました。

彼女については、いろ〳〵當時の人が書いてをります。彼女は何れも、その交友から愛せられ、尊敬せられてゐました。野村藤陰は、『世の閨秀と稱する者は、或は詩をよくし、或は書畫をよくす。而して貞操に缺くるもの多し。今我が細香女史は、この數者に於ても缺くるところなし。更に慷慨國を憂へて、鬚眉男子をして愧ぢしむる色あり。』と申してゐ

ます。また山陽の高弟後藤松陰は、『女史人と爲り篤實溫雅なり。卓識有り。父に仕へて孝。筆硯自ら娛む。而して又慨然憂國の氣あり。』と申してをります。彼女は婦人として頗る愛國者であり、晩年國事について心配したといふことが、當時の大垣藩の太夫小原鐵心の書いたものにもあります。

何れにしても、誠に珍らしき、殊勝の婦人と思はれます。單に文士として見ても、彼女の詩は、流石に山陽の門人だけあつて、なか〳〵月並的でなく、面白くあります。

しかしこれほどの詩を作るのは、細香女史の他にもあります。たゞ彼女の如く學問、見識ある婦人で、而して人間の最も苦しき立場に立つて、何等行くべき道を踏み外さず、眞直ぐに通り拔けたといふことが、最も感ずべき點だと思ひます。彼女は實に德川時代、日本の中流階級の敎養ある婦人の花と云うても宜しいかと信じます。

第三　豐太閤夫人北政所

その素性と結婚の當時

世の中では淀君に對しては、種々の意味によつて、興味を持つてゐる人もあり、同情を寄せてゐる人もあり、また非難する人もあり、何れにしても、問題の女性として、取扱はれてゐるが、却て北政所については、とかくこれを知る人は多くないやうであります。しかしながら、彼女は、その夫たる秀吉の正室として、毫も見劣りのすることのない、日本婦人として、傑出したる女性であります。

私は淀君についても、或は世間の人以上に興味を持つが、北政所については、更に多大の尊敬と同情とを持つことを、禁じあたはぬのであります。北政所は、その素性、決して卑しい人ではありませんでした。申さば秀吉よりも、上流でありませう。彼女は當時幾多の英雄豪傑を出したる、尾張の國の產にて、その父は杉原助左衞門定利でありまし

た。彼は後に木下肥後守と名乘り、隱居して道松と稱しました。後には吉子と改め、寧子とも云ひました。しかし一般におねいとして通つてゐます。彼女はその叔母なる、朝日局の緣づきたる、尾張津島の淺野又右門尉長勝の家に、その妹おやゝと共に養はれてゐました。おやゝの婿が、淺野彈正長政であります。

斯くて秀吉と緣組したのは、永祿四年八月三日でありました。當時秀吉は二十六歲、彼女は天文十七年の生れといへば、數へ年にて漸く十四歲でありました。しかし年よりは餘程ませた方であつたでありませう。彼等夫婦は、その出世の後にも、毫もその當時の模樣を包みかくさず、寧ろ、屢〻その極めて質素なる有樣を物語つて、笑話としたほどでありました。

要するに、兩人の結婚は、必ずしも戀愛唯一の結婚とも見えず、さりとて政略的結婚であるべき理由も見出しませぬが、何れにしても、この結婚は、兩人にとつて、極めて幸福なる結婚でありました。とにかくその場所は、淺野家の長屋であつて、その長屋は、茅葺

であつて、簀搔藁を敷き、その上に薄緣を敷いて、祝言したといふことであります。

秀吉を助けて天下を經營す

北政所は、果して非常の美人であつたか否かは知り難いが、しかも、決して十人並の容貌ではありませんでした。固より、より以上であつたことは、信長の彼女に與へたといふ、手紙の文句によつても判ります。しかしそれよりも、より大なるものを彼女は持つてゐました。それは彼女が、極めて賢明であつたことであります。或る意味に於て、秀吉を助けて、共に天下を取つたといふべきほどの賢明さでありました。それは漢の高祖に於ける呂后、源頼朝に於ける平政子とは、聊かその趣を異にしてゐましたが、しかもその內容は同一でありました。

彼女は、決して德川時代に行はれたる、女大學風の良妻ではありませんでした。彼女は政治の上にも、屢〻意見を挾んで、時としては、秀吉と人前もかまはず、喧嘩したほどでありました。『慶長中外傳』といふ本に、斯ることが書いてあります。

『此北政所は奇代の才氣、尋常の諸侯の及ぶべき所にあらず。初め太閤、天下の事を受けて、乍ち御取捌ありし事、多くは政所の助力によるが故、かるが故に遊宴の席、音曲亂舞の內といへども、天下の大名の用捨、國都の興廢を論じ給ふ。英才活氣なるが故に、その言葉互に輕々敷くて、夫婦いさかひの如し。皆是大氣秀才に發する、誠に驚くに堪たり。或日亂舞の中に又、例の如く、言葉爭ひありて、髮を摑み合ひたまふ迄に、あらそひ給ふ。秀吉物をかくさゞる大將なれば、其座に猿樂の役者有合しに、何ぞ言へと仰せありしかば、太鼓打ち取敢ず、「女夫喧嘩太鼓の撥があたりましよ」と言ひしに、やがて笛吹き、私次をいたさんとて、「どなたが理やら非やら、ひうやら」と申したりしかば、太閤御夫婦ともに、御笑ひなされしといふ事を、世本に記し置けり。此故に其後も、下の訴人に御夫婦ともに御聞止の事を、甚六づかしとしたまはず、是心理明朗なるが故也。』と。

しかしながら、斯く諍をなしても、畢竟すれば、北政所は、たゞその夫のためを思つての上のことなれば、秀吉もまた常にその心を、彼女に傾けて、特別の情愛と尊敬とを拂つてをりました。

家康に比して溫味ある秀吉の家庭

秀吉の家庭は、決して理想的といふべきものでもなく、また、秀吉の女性に對する行狀は、寧ろ放埒といふべきものに近かつたのであります。しかし概して言へば、秀吉の家庭は、家康の家庭に比べると、頗る溫味がありました。正しき意味に於て、家康には家庭がありませんでした。彼は多くの妾を持つてゐました。今日までも知られてゐる中に、彼の妻と名づくべきもの二人、妾といふべきものが十人ありました。而して秀吉には、妻は北政所一人で、妾といふべきものが四人ありました。

一人は松の丸殿と云ひ、京極高吉の女でありました。第二は三條殿と云ひ、蒲生氏郷の妹、第三は淀殿と云ひ、淺井長政と信長の妹小谷の方との間に出來た女でありました。第四は加賀局と云ひ、前田利家の女でありました。家康の妾に比べて、何れも門地ある、歷々の女性でありました。しかも秀吉は、これ等の人々を、それぞれ別所に於いて、決して同居しませんでした。同居したのは、始めから終りまで、たゞ北政所一人で

ありました。而してその待遇も、北政所に對しては特別であり、例へば淀君を小田原の陣に呼び寄せる時にも、わざ〳〵北政所の手を經て、しかするほどでした。

而して彼等の交情は、始めから終りまで少しも變りませんでした。私は家庭の文學として、秀吉と北政所の間に往復した書翰ほど、面白いものは少いと考へます。秀吉が北政所に與へ、若しくは答へた手紙は、幸に、世間に散亂しつゝも、各所に存在してゐます。それを年代的に綴り合せてみると、その時々に於ける、生ける秀吉を、自らの言葉で、描き出してゐる趣があります。たゞ不幸にして、北政所から秀吉に與へ、若しくは答へた手紙の存在しないのは何故でせう。これだけが遺憾でありますが、しかしそれが如何なるものかは、秀吉の手紙で察することができます。

彼等は、もはや年をとつて、普通の色氣の脫け去つた後に於てさへも、極めて情緒纏綿たるものがありました。私は多くの點に於て、秀吉には感心しないが、彼がその夫人たる北政所を、大切に取扱つた仕打ち、及びその心掛については、頗る感心せざるを得ないと考へます。この點は信長にも、家康にもありませんでした。

夫と共に漸次その位置の上進

さて彼等が結婚當時に於て、如何なる生活をなしたかは、別にこれを知り得る機會がありませんが、しかしながら天正元年、秀吉が近江國小谷の城主となつてから、彼女は岐阜よりそこに移り、また長濱城に夫と共に移りました。當時信長から北政所に與へたと稱せられる手紙を見れば、それで當時の事情がよく判ります。それには斯ういふ文句があります。

『就中、それの、みめふり、かたちまで、いつそや見まひらせ候折ふしよりは、十の物廿ほども見あけ候。藤吉郎れん〳〵ふそくの旨申すのよし、こんこ、たうたん、くせ事に候か、何方を相たつね候とも、又二たひかのはけねつみ、あひもとめかたきあいた、これよりいごは、みもちようくわひになし、いかにも、かみさまなりに、おもおもしく、りんきなとに、たち入りては、しかるへからす。たゝし、おんなのやくにて候間、申すものゝ申さぬなりにもてなし可然、なをふんていにはちいり、はいけん、こひねかふ

ものなり、又かしこ。』

これにて彼女が美人であつたことが解ります。最も、信長も人心を收攬するのに、拔目がなかつたから、うまく書いたに相違ありません。しかしこれは事實でありませう。また秀吉が今更斯る立派な婦人に、不足を言ふのは言語同斷である。しかし秀吉ほどの人は、再び求め得られぬから、どこまでも貞淑にして、やきもちなどをやくべきものでないと書いてゐます。如何にも信長も、この夫婦の前途に、望みをおいたのでありませう。この手紙は、確證はありませぬが、私は間違ひないものと信じてゐます。

斯る次第で、秀吉は、自分が位置の進む每に、その夫人の位置も進めてやりました。中には、秀吉が內大臣になつた時、彼女は、從三位に叙せられました。彼は如何なる場合にも、その夫人を大切にするのを、忘れませんでした。

情緒纒綿たる秀吉の書翰

天正十五年九州征伐をなし、その凱旋のみぎり、肥後の八代から與へたる消息などを見

れば、如何にも彼の心意氣がよく解ります。この手紙は、北政所が五月十日上方から出した文を、秀吉はその二十八日に、肥後の佐敷で讀み、その本文だけを書き、翌二十九日八代に着いてから、その返し書きを書いたのであります。その中の文句にも、この一節があります。

『からこくまでてにいれ、我等一このうちに申つく可候。さけすみをいたし候へば、一だんほねをれ申候。こんどのぢんにとしより、はやはやしらが、ほゝくでき申候て、ぬき申事もいり不申候。御めにかゝり候はん事、はづかし。そもじへばかりはくるしからずと存候へどもめいわくに候。』

即ち一生の中に朝鮮はおろか、支那までも打從へようとのことで、今度の九州陣には、いろ〳〵の心配で骨折れ、白髪が多くできた。今更この白髪をもつて、お前さまにお目にかゝるのは恥かしいが、しかしお前さまだけには白髪でも、差支ないが、それでもやはり迷惑であると申してをります。

斯くて天正十五年九月には、北政所は大阪城から上洛して、聚樂第に行きました。そ

の時の行列は、なか〱盛んなものでありました。而してその翌年四月には、從一位に叙せられました。その後秀吉は小田原征伐、または奥州にと赴き、それからやがて朝鮮征伐となり、九州の名護屋に赴いたが、到る處から、それ〴〵手紙を書いてゐます。

而して慶長三年三月十五日には、醍醐三寶院で、夫婦相携へて花見をしましたが、それが歡樂の終ひで、その年八月十八日に、秀吉は逝いたのでありました。秀吉逝いた後の彼女の振舞は、更に一段見上げたものでありました。

寂しきその餘生と賢明なる態度

世の中がだん〱遷り變り、秀吉恩顧の大名共も各〻自分々々の利害を考へ、家康方となつてゐる際に、北政所は大阪城を立退き、京都に閑居し、髮を剃つて高臺院と稱し、三本木の邸に住んで、靜に世の變遷を眺めてゐました。而して彼女は何等、政治上にも干渉せず、たゞ一心に秀吉の菩提を弔つてゐました。

彼女は一生を通じて、才智たくましき女性であり、且つその素行について、何等世間か

ら非難を受けるやうなことはありませんでした。淀君などは、年齢も若くありましたが、素行については、隨分評判がよくありませんでした。その惡評には、自らそれ〴〵の理由があります。

斯くて、慶長十年には、家康と相談して、北政所は、東山に高臺寺を建て、そこに秀吉の冥福を祈ることにしました。かくて慶長の末、元和の初め、大阪冬夏の二陣あつて、豐臣氏の天下も全く滅び、一時莊嚴の美を極めた、豐臣廟さへ、荒廢に一任して、顧みる者もなくなつた時に際し、彼女は靜かに世相の遷り變りを見、寛永元年九月六日、七十六歳で逝きました。

彼女の一身から觀れば、尾張の鄕士の女から、北政所と呼ばれ、從一位にまで叙せられ、天下に並びなき女性となり、而してまた、夫には死別れ、家は潰され、世の中は打變り、一人寂しき生涯を、京都の庵寺の中に送つたのは、その生涯そのものが、すでに一篇の小說と申すも差支ありますまい。

しかし始めから終りまで、その心を動かすことなく、順境にも調子に乘らず、逆境にも

落膽せず、いつも恒ある平かなる心をもつて、身に過ちなく一生を終始したのは、如何にも奇特なる婦人と言はねばなりますまい。今日では、彼女は豐國神社に、攝社として祀られ、長く愛する夫の側に侍つてゐることができるのは、誠に彼女の〻志〻が、三百歳の後に於て、伸びたものと申してもよからうと思はれるのであります。

私は十四五歳の時に、屢〻高臺寺に遊びました。高臺寺は靈山の麓にありて、萩の名所であります。私は、寺内にある秀吉、及び彼女の肖像を見て、少年ながらも、この夫婦を羨ましく覺えました。そして、大正十四年の晩秋には、豐國神社に詣し、併せて、その攝社たる彼女の祠にも參拜しました。彼女は良に仕合せの女性であります。しかも、彼女を仕合せ者としたのは、決して運命のみではありませぬ。彼女の賢明と、自制とによります。

第四　紫　式　部

彼女の生存したる時代

若し我國の女性にして、世界的名譽ある人を擧げれば、その一人は、正しく紫式部でありませう。紫式部の源氏物語は、その文章と、趣向と、二つながら秀でゝをります。外國の人には素より、その文章の味が解りませんが、しかし、その趣向の概略だけは、呑みこまれるものと見えまして、おひ〳〵飜譯も出來てをります。されば、日本には平安朝の昔、斯くの如き才學、文藻共に勝れたる女性のゐたことが、世界に認められてをります。この意味から申せば、紫式部は、明治の世の中に於ける、政治家としての伊藤公や、軍人としての東郷元帥と同じく、日本の、世界的名譽の代表者の一人と申して、差支ありますまい。私共は、この理由によつて、何よりも先づ紫式部に感謝せねばなりませぬ。

紫式部の生れた時代は平安朝で、しかもその後半期に屬します。平安朝の時代と申せ

ば、先づ延曆元年桓武天皇御卽位から壽永年間安德天皇の時代まで〻あつて、これを基督紀元に算しますれば、紀元後七百八十二年から千百八十二年まで約四百年であります。

この間は日本の歷史に於いて、文化煥發の時代と申しても差支ありませんが、それと同時に、我が日本民族の上流社會といふものが、最も腐敗墮落の極に達してゐた時代と申しても差支ありませぬ。要するに、藤原鎌足が天智天皇をお輔け申して、國政上の大改革を成して以來、藤原氏の勢力は、皇室とその盛んなることを、競ふと申しませぬまでも、殆ど並ぶるほどになりました。その間に或は藤原氏でないものが、適〻勢力を得ても——例へば菅原道眞の如く——忽ち覆へされ、また皇族方が臣下にお降りになり、源姓などを賜はりましても、その當座はともかくも、幾代の後かには、忽ち沈淪して藤原氏の下風に就かねばならぬことになりました。

斯る次第なれば、藤原氏は他に競爭者なく、遂にその一門の間に、內輪喧嘩を起しました。時としては親子、時としては兄弟、或は叔父と姪、或は從兄弟同志、何れも互に敵味方の思ひをなして、排擠を事としました。彼等の目的は、その女を時の天皇に納れ、その

皇子が皇位に卽かせ給ひますれば、自らは天皇の舅となり、祖父となり、斯くて攝政となり、關白、太政大臣となり、天下の榮耀富貴を、一門にといふより、寧ろ一身に收めんとするものであつて、その著明なる例は、卽ち御堂關白道長が、それであります。

平安朝後半期の女性と紫式部

斯る時代であれば、當時の支配階級が、何れも藤原氏の門下に依り、或は甲の門客となり、或は乙の門客となり、その御機嫌をとつて、彼等相應の立身出世を計つたことは、已むを得ない次第であります。從つて世の中には、理想もなく活氣もなく、たゞその日〳〵を肉慾の滿足にて送つたのも、また已むを得ぬ次第でありませう。

乃ち我が紫式部は、この時代、詳しくいへば、道長の最も勢力を振つた時代の女性であります。凡そ如何なる時代にも、物は類をもつて出て來るものであります。世の中には、偶ゝ礫び石といふが如く、類のないものもありますが、概して申せば、筍でも、茸でも、必ず類をもつて出てまゐります。人間もその通りで、紫式部の時代には、さまざ

まの、文學的と申してよろしきか、若しくは藝術的と申してよろしきか、とにかくその類の婦人が、少からず出て來ました。卽ち清少納言とか、赤染衞門とか、和泉式部とか申すのが、その例であります。

その中でも、紫式部は源氏物語を、淸少納言は枕草子を、赤染衞門は榮華物語を、何れも我々に殘してゐます。中に就いて源氏物語が殊に秀れ、いろ〳〵の意味に於て、名著述であり、併せて大著述なることは、何人も異存なきところであります。

彼れほど有名でありながら、紫式部は、その生死の年月日さへも判りませぬ。しかしながら彼女が何人であつたかといふことだけは、よく判ります。彼女の父は爲時と申しまして、その家は、閑院左大臣冬嗣公の第六子、良門から續いてをります。卽ちその時代に榮えたる藤原氏の末葉であります。

藤原氏でも、末葉なれば致方がありませぬ。彼は、漸く正四位下越後守に任官し、先づ地方官の一人でありました。けれども彼は、當時の儒宗ともいふべき、菅原文時の弟子で、高名の學者であり、また歌をよく詠みました。式部の兄は惟規と申しまして、彼も當

時に於て、相當の歌人でありました。前にも申しましたやうに、紫式部は、その生れた時日は、正確に解りませぬが、如何にも、生れながらにして、尋常ならざる才女でありました。

若くして寡婦となり上東門院に仕ふ

彼女は幼き時、その兄惟規と共に、史記を父に學びましたが、その覺えることは、兄よりも速かでありました。されば彼女の父も、男子にてありたらばと、常に嘆息いたしました。そのことは、彼女の日記に斯く書いてあります。

『この式部丞といふ人の、わらはにて史記といふふみよみ侍りし時、きゝならひつゝ、彼の人は、おそうよみとり、わするゝところをも、あやしきまでぞさとく侍りしかば、書に心入れたる親は、口惜しう、をのこゞにてもちたらぬこそ幸なかりけれとぞ、常に嘆かれ侍りし。』とあれば、如何に彼女が勝れたる頭の持主であつたかゞ、これで判ります。

彼女は、史記ばかりでなく、その學者の父より、さま〴〵の學問をいたしました。彼女

の日記を見ますれば、それがよく判ります。彼女が讀んだ書物は、日本紀、史記、白氏文集、その他三史五經、佛家の經疏、諸家の日記、和歌の集、古き物語等は勿論、管絃、詠曲、合せ香、繪畫、裁縫など、あらゆる諸藝に通じてゐましたことは、彼女の日記、若しくは源氏物語等にて、よくそれが判るのであります。

斯くまで才藝の秀れてゐた彼女は、長じて後に藤原宣孝に嫁しました。彼は右衞門權佐で、式部と遠祖を同じくし、良門五世の孫であります。二人の間に女子が二人生れました。姉は、狹衣物語の著者で、大貳三位と申し、百人一首の中に、その歌が出てをります。卽ち、

有馬山いなの笹原風吹けば
　いでそよ人を忘れやはする

といふのが、それであります。

その妹は辨局と申しまして、冷泉天皇の御乳母になりました。

而して宣孝は、長保三年四月二十五日に死にまして、紫式部は、まだうら若き中に寡

婦となつたのであります。

斯くて彼女は、中宮、卽ち御堂關白道長の女、上東門院に宮仕へいたしました。當時上東門院に宮仕へした者の中には、あらゆる才女が群がつてゐたやうでありますが、その中で紫式部は、一入挺んでゝゐたものらしく、彼女の日記に、寛弘四年中宮に、白氏文集の樂府を授けてゐたことが見えてゐる通り、彼女は中宮のお附きでもあり、また御師匠でもあり、或は時に、祕書役をも勤めたものでありませう。而して、この間に彼女の大著作、源氏物語が出來たのでありませう。

源氏物語著作についての諸説

彼女と同時代に、淸少納言といふ女性がありまして、この人が如何に才氣走つてゐたかは、時の皇后が、『香爐峰の雪は如何』と宣ひ給ひたれば、淸少納言は直ちに御簾を撥げたといふことであります。これは、白樂天の詩に『香爐峰の雪は簾を撥げて見る』とあるのを、そのまゝ應用したもので、當機卽妙、今日までも名高き逸話であります。また彼女が貧

乏して、老後破屋に住んでゐたのを、若殿原がその前を嘲笑して通るのを呼び止め、『千金の馬骨を買はずや』と申したなど、如何にも才女に相違ありませんが、しかし彼女は、その才を外へ〳〵と出し、紫式部は、その才を內へ〳〵と蓄へたものらしくあります。この點から言へば、寧ろ當時の時代には、紫式部は善すぎるやうでもあります。

彼女の日記に、斯ういふのがあります。それは彼女の著作源氏物語が、直に當時の評判となり、斯る著作は、日本紀をよく讀みたる人でなければ出來ぬといふ、時の帝一條天皇の仰せから、遂に殿上人等が彼女を日本紀の局と綽名してゐるのを、彼女は却て不本意とし、『自分は學問はおろか、一といふ字さへも知らないやうな心掛けをしてゐるのに……』と書いてあります。

されば彼女は、その夫の生存の間は、その學問をも包みかくして、たゞ尋常一樣の良妻賢母で過したのでありませう。ところが宮仕へしてから、源氏物語などの著作も出來、またそれが評判となつたのであります。私はこのついでに源氏物語について、お話をしたいと思ひますが、それはとてもできませぬ。たゞこれは、如何なる目的をもつて出來たの

か、如何なる場合に出來たのか、いろ／＼の說があります。或は上東門院のお望みによるか、または彼女が後家暮しの間に、感ずるところがあつて出來たのか、半ば出來上りつゝある時に宮仕へして、後に出來上つたのか、說は區々であります。また、この著述については、いろ／＼の議論がありまして、或は天台六十卷になぞらへて、五十四帖を作つたものであると言ひ、或は莊子とか、春秋とか、史記とかになぞらへたと言ひ、或はこれをもつて、勸善懲惡のためと言ひ、いろ／＼議論があります。幕府時代に於て有名なる熊澤了介の如きは、紫式部が最もこの書を敎訓的に著述したものだと言つてをります。しかし私は、別に深い目的あつての著述とは思ひませぬ。

古今集と共に平安朝の二大產物

たゞ彼女が當時に於て目擊し、また當時に於て遭遇し、また當時に於て傳聞したる、人物、出來事、評判、噂などを、彼女の緻密にして光ある頭の中に、面白く組織を立て、これを源氏物語としたものでありませう。そしてこの書が、事實の寫眞と申すならばそれでな

く、さりとて全く想像と申さばそれでもなく、言はゞ事實と想像とをチャンポンにし、實際の材料で空中樓閣を組立てたものでありませう。それを讀んで、たゞ面白い物語であるといふことも、またそれを讀んで、大なる教訓を得ることも、皆な讀者次第で、當人の彼女は、恐らくは、何れとも勝手次第といふのでありませう。或は彼女が接觸したる、多くの女性を描き出すために、著作の全部を、謂ゆる女性の展覽會としたものだらうといふ近頃の說もあるが、それも實は、穿ち過ぎたもので、別にそれほど深い意味があつたものとも思へませぬ。

當時、日記を附けるとか、著述をするなどは、彼女一人に限らぬから、全くその感興をやるためのものとして、差支へありますまい。深き目的があると言ふ、熊澤先生などの說は、最眞の引倒しかも知れませぬ。

しかし、源氏物語は、古今集と共に、平安朝の二大產物であつて、その註釋やら、その口傳やら、なかなかやかましいものになりました。彼の德川幕府の始祖德川家康さへも、死する少し以前に、源氏物語の奧義皆傳を受けたほどなれば、如何にこの書が珍重された

かゞ判ります。

さればこの書は、彼女のためと言はず、あらゆる我日本の女性のために、大なる光を添へ、大なる氣焔を吐いたものと申さねばなりませぬ。

當時男女間に於ける風俗は、殆ど破れて、如何なることをしても差支ないほどであり、和泉式部の如きは、ゆきあたりばつたりの生活をなし、當時亂脈の世の中でさへも、そのことで評判をとつたほどでありました。しかし紫式部は、若後家でありながら、神妙の人であり、安藤年山などは、彼女を貞女の標準であるかの如く、賞め讃へてをります。安藤年山は、彼女を才德兼備の女と申しますが、私はそれほどでないにしても、それに近かつたものと思ひます。

御堂關白道長の誘惑を斥く

彼女が道長に誘はれて、それを拒絶したことは有名な話であります。道長が源氏物語を讀み、その好色の書であるのを見て、梅の枝に敷かれたる紙に、

すきものと名にしたてれば見る人の
折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ

と詠んで與へたのに答へて、

人にまだをられぬものをたれかこの
好きものぞとは口ならしけむ

と返歌し、またその日記に、

『渡殿にねたる夜、戸を叩く人ありと聞けど、おそろしさに音もせであかしたる、つとめて、

よもすがら水鷄よりけになく〳〵ぞ
まきの戸口に叩きわびつる

かへし

たゞならじとばかり叩く水鷄ゆゑ
あけては如何に口惜しからまし』

と書いてゐます。これなどは、如何に彼女が、節操などいふことを問題にせぬ世の中に、

節操を尊んだかゞ判ります。しかし、果して彼女は、謂ゆる貞節の觀念から、斯く有力者の、戀と云はんか、若しくは一時の戯れと云はんかを拒絶したのでありませうか。或は彼女が、聰明なる理智の光に照して、斯る脱線的のことを避けたのでありませうか。

彼女の寡婦的生涯には、必ずしも一人の親しき男子もなかつたとは思はれませぬ。それは彼女の歌に、

『淺からず頼めたる男の、心ならず、肥後の國にあかりて侍りてけるが、便につけて文をおこせける返事に、

相見んと思ふ心は松浦なる

かゞみの神やかけて知るらむ』

とあるのを見ますれば、これは尋常一様の交りではなかつたやうにも思はれます。

何れにしても、當時の時代に於ては、如何に行儀のよき女性であつたかゞ判ります。彼女は、時代の精神である、佛教に最も心を寄せ、物の哀などいふことを知り、また因果應報の理を心得、同情心は、寧ろ濃かに過ぐるほどであつたやうですが、しかし決して

好々女子でなく、その同情心の裏には、刺すが如き批評眼もありました。

日本婦人の傳統的特性を具有す

その證據に、同時代の婦人和泉式部や清少納言について、それ〲批評があります。今こゝに實例を揭げて見ませう。

和泉式部のことは、『和泉式部といふ人こそ面白うかきかはしけれ。されど、和泉はけしからぬ方こそあれ。うちとけて文走りかきたるに、そのかたのざえある人、はかない言葉のにほひも見え侍るめり。歌はいとをかしきこと、ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌よみざまにこそ侍らざめれ。口にまかせたることゞもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまるよみそへ侍り。それだに人のよみたらん歌、難じことわりゐたらんは、いでやさまで心は得じ。口にいとうたのよまるゝなめりとぞ、見えたるすぢに侍るかし。はづかしげのうたよみやとは覺え侍らず。』

清少納言のことは、『清少納言こそ、したり顏にいみじう侍りける人。さばかり賢しだち、

まなかきちらして侍るほども、よくみれば、またいと堪へぬことおほかり。かく人にことならんと思ひ好める人は、かならず見おとりし、行く末うたてのみ侍れば、えむになりぬる人は、いとすごう、すゞろなるをりも、ものゝあはれにすゝみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじく、あだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよく侍らん。』と申してをります。

なか〳〵油斷のできぬ批評眼をもつてゐたことが、これで判ります。とにかく何れの方面から言つても、彼女は當時に於て、最も教養のあつた婦人でありました。また、すべての婦人が、才に驕り、能を誇り、外へ〳〵と、無きものを有るかの如くまでして、孔雀の羽を擴げつゝある際に、彼女は内に〳〵と藏めて、その一個の面目を保つてゐたことは、如何にも奥床しき、傳統的日本婦人の特性を具へたるものと、申してもよろしからうと思ひます。

第五　野村望東尼

明治大帝より正五位を贈らる

維新改革の大業は、男子の働に成りたることは、言ふまでもありませんが、しかし決して男子のみの事業ではありません。その隱れたる半面には、婦人の力が少からず加はつてをります。皇族方としては、和宮の如き御方もあります。また一般の有志家の、母であり、妻であり、姉妹であり、娘である人々の、各〻の中に於ける働きは、何等記錄の上には掲げてありませんけれども、我等は決して見免すことができないのであります。

その中で歷史にその名が現れた婦人もあります。例へば近衞家の老女村岡、梁川星巖先生の夫人紅蘭女史の如き、或は蓮月尼の如き、その類は少くありません。その中でも、野村望東尼の如きは、また傑出の女性と謂はねばなりませぬ。

野村望東尼は、維新の大業に功勞があつたといふわけで、明治天皇から正五位を贈られ

ました。また昭憲皇太后から、その墓を改修すべく金錢を賜りました。また彼女の自筆の詠歌『向陵集』は、昭憲皇太后の御覽に供したところ、深く御感賞遊ばされたといふことであります。彼女は女性として、誠に珍しき花を死後に咲かせました。

野村望東尼は、文化三年九月六日、筑前福岡の城下に生れました。基督紀元で千八百六年、ウォターローの戰爭前、約九年であります。父は浦野重右衛門と申し、母はみち子と云ひ、望東はその三女でありました。浦野家は、黒田家の士として、立派なる家柄でありました。その祖先若狹守といふのは、淺井長政の使番二十騎の一人であつて、後に黒田家の先祖如水、及びその子長政に仕へて、到るところで勳功を樹てました。彼女は、實に理想的とも言ふべき、日本武士の家に生れ、家に成長し、その最も善美なる教育を受けました。

生家の爲に勞し又た夫家に盡す

然るに彼女の姉は早く緣づき、兄弟姉妹は共に家にあり、彼女は、殆どその一身に家庭

の務を背負つて、いそしんだのでありました。彼女の結婚が、當時の慣例に比して、比較的後れてゐたのは、彼女が父母のために、獻身的に家庭の勞苦に服したからでした。

その中にも彼女は、凡そ裁縫、刺繍、機織の如き、何れも勝れた技を持ち、また割烹、料理の如きは、最も得意としたところで、本職さへ驚いたといふことであります。殊に押繪に至つては、自ら野村流といふ、一流を創めたほどであつて、實に驚くべき巧妙なるものでありました。

斯くて彼女は二十四歳の春に、野村新三郎なる者の後妻として、嫁しました。野村家もまた筑前藩士の中で、立派な家柄でありました。その先祖佐々木肥後守は、江州野村に於て、一萬六千石を領した大名でありました。それから黑田家の三代忠之に仕へ、新三郎の時に至つて四百十三石を領してゐました。當時に於て四百石の士と言へば、先づ上士に加ふべきものでありませう。

家には先妻の遺兒が三人ありました。彼女ほどの腕前を持ち、彼女ほどの家柄に育ち、彼女ほどの容貌氣品を備へながら、後妻として嫁いだのは、何故であつたでせうか。それ

は恐らくは、すべて面倒な缺點はあつたとしても、その夫たるべき新三郎が、立派なる武士の魂と、教育とを持つてゐる士であるから、それを見込んで嫁したものであると思はれます。

彼女は一家の主婦として、三人の繼子を育てるには、頗る骨折りました。何れも手に負へない子供でありましたが、彼女は己の所生の如く、これを教へ、慈しみ、寛嚴その宜しきを得ました。その長男貞則は、後には筑前藩の目附役に擢んでられ、また貞則の子、即ち彼女にとつて義理の孫助作は、國事に骨折り、後に正五位を贈られ、靖國神社に祀られてをります。

多藝多能、殊に和歌に長ず

彼女は、家庭に於ける、あらゆる雜務に追はれつゝも、豫て嗜みの和歌、繪畫、筆道、挿花、點茶、刺繡、押繪等、何れもその蘊奥を極め、殊に和歌と書とは最も傑出し、和歌の如きは、これを平安朝の諸の才媛の歌に比べても、多く劣らないといふほどに達しま

した。彼女は二十七歳にして、その夫新三郎と共に、大隈言道の門に入り、和歌を學びました。

大隈言道は、德川末期に於ける最も毛色の異つた歌人の一人で、今日でも專門家は、彼について讃美の言葉を惜まぬほどの、大なる歌人ですが、彼女がその門に入りて、如何ばかり指導を受け、感化を受けたか、それは今更、想像にも餘りあるほどであります。

而してその師言道もまた、彼女に如何に許してゐたかは、文久三年、彼女の歌集『向陵集』に序して、『若かりしより、その歌どもを、今の老に至るまで見つるに、なべての人の心およばぬあはれをいひ出で、女のわざとは見え難し。』と言ひ、また『おのれ教子あまたなれど、また類あることなし。』と申してをれば、この上推稱の言葉を添へる必要はありますまい。

弘化二年十月、西暦千八百四十五年、夫新三郎は、家を長子に讓り、望東と共に、福岡城南平尾村の山莊に隱居しました。この山莊は、後に樹木茂れる平尾の山を負ひ、前には展開せる田圃の彼方、遙かに若杉、竈の諸山を望み、隱居所として、申分なきところであつ

て、そこには山から來た清水を湛へて池とし、庭には吉野の櫻や、龍田、栂尾の楓などを移し植ゑ、如何にも幽居の趣があり、彼女の歌に、

音もなき筧の水のしたゝりも

たりあまりたる谷の一つ家

とある通りでありました。斯くてこのまゝ果てぬれば、彼女はたゞ立派なる、敎養ある武士階級の、模範的婦人たるにとゞまりましたが、事はこれから發展して來ました。

夫の死後境遇の一變と活動

元來彼女の夫新三郎は、たゞ文藻ある風流なる詩人であるばかりでなく、本來の勤王家でありました。然るに彼は、安政六年七月二十七日、西暦千八百五十九年、六十六歳で逝きました。これから、寡婦である彼女は、如何に活動したのでせう。

ともかくも、豫て上京の志がありましたので、彼女は文久元年十一月二十四日に上方への旅路に上りました。その時のことは、彼女の上京日記なるものがあつて、詳しく書

いてあります。彼女の目的は、一つには、皇居を拜し、一つには、その師大隈言道に見えんとするにありました。當時の旅行は、今日の旅行と同一に考へられませぬ。まして婦人の一人旅は、尙ほ更難儀であります。彼女は兵庫の湊川なる楠公の墓に詣で、、

かしこしとぬかづくうちも我袖の
　みなと川水せきぞかねける

と詠じました。
彼女は、大阪に於て、その舊師大隈言道に會ひ、如何にその心を動かしたるかは、その日記に、『急ぎ大隈言道大人の許に行く。嬉しさいふばかりなし。たゞかたみに涙さへこぼる。』とあるを見ても知られます。
また皇居を拜して、如何に感激したかは、

白栲のみのしろ衣みるばかり
　今日九重に降れる初雪

と詠んでゐるのを見ても判ります。

彼女はこの旅行の收穫として、一人の友人を得ました。それは馬場文英であります。文英は上方に於ける彼女の友人として、爾來書信の往復をいたしました。上國の形勢は悉く文英の通信で解りました。彼女は文英の盡力で、近衞公に拜謁しようとしましたが、公は幕府の忌諱に觸れて、蟄居謹愼の際なれば、それは行はれませんでした。

且つまた近衞家の老女村岡も、嵯峨野の大覺寺に蟄居してゐたので、それを訪ねましたが、村岡は左の歌を詠じて、面會を斷りました。

　はる〴〵と訪ねし君が惠をも
　　しづ心なくあはで苦しき

これは面會したならば、その主君たる近衞家を煩はすだらうことを、憚つたゝめでありませう。彼女はこれに答へて、

　雲井にも君が名高く聞えけり
　　慕ひ來る身をあはれとも見よ

といふ歌を與へました。

勤王志士の間を斡旋す

斯くて彼女は上方に滯在してをりましたが、故鄕の家族や友達は、心配の餘り、これを國に迎へました。この旅行は彼女に一轉機を與へ、これからして彼女の平尾山莊は、宛も志士の集會所ともいふべきものになりました。

當時筑前藩は、佐幕、勤王の二派あり、勤王派の首領にして、家老なる加藤司書を初め中村圓太、平野次郞、その他の者共、何れもこの山莊に往復しました。殊に平野次郞國臣は、和歌の嗜があつたので、屢〻彼女と和歌のやり取りをいたしました。彼が、愈〻死を決して、生野で旗擧する時に、三田尻から、彼女に左の歌を贈りました。

大君にさゝげあまりし我が命
　いまこそ捨つるときは來にけれ

云ひやらん言の葉草はしげゝれど
　筆にはえこそつくさゞりけれ

然るに筑前に於ては、勤王派の勢力、殆ど佐幕派のために一掃されんとし、斯くて彼女の教子である中村圓太なども獄に投ぜられ、その間に於ける彼女の心配は、容易ではありませんでした。また吉田松陰の第一門人ともいふべき、長州の高杉晋作の如きも、中村圓太の周旋で、一時その山莊に潛伏したことがありました。それは元治元年十一月頃でありました。その時分西鄕隆盛も福岡に來てゐましたが、福岡の有志家共が、これを平尾山莊に招き、高杉と會見せしめんとしましたが、强情なる高杉は、これを拒むの色がありました。そこで望東は傍から筆をとつて、左の歌を書き示しました。

紅の大和心はいろ〳〵の
　　絲まじへねば綾はおられず

武士の大和心をよりあはせ
　　すゝ一すぢの大繩とせよ

そこで高杉も悟るところあり、遂に西鄕と會見いたしました。しかし西鄕と高杉が山莊で會見したことについては、隨分異論もあつて、何とも斷言できませんが、この歌だけは

間違ないと信じます。如何に彼女が、薩長の偉大なる志士を調和したかは、言外に想像ができませう。

玄海灘の一孤島姫島に流さる

何れにしても、勤王黨の有志が、各々私見を捨てゝ大義に合せねば、目的を達し得られぬといふのが、彼女の考であつたと思ひます。高杉が愈々國に歸つて、義兵を擧げ、俗論を打破らんとする決心を定めるや、望東は旅衣一具を調へ、これを餞別として、左の歌を添へました。

まごゝろをつくしのきぬは國のため
　立ちかへるべきころもでにせよ

如何に高杉が感激したかは、當時左の詩を詠んで、彼女に殘したことでよく判ります。

自愧知君容ニ我狂一。　山莊留レ我更多情。
浮沈十年杞憂志。　不レ若閑雲野鶴情。

斯くの如く彼女と高杉との交りは、これから追ひ〳〵深くなりました。高杉は單に長州出の有志家たるのみならず、日本に於ける有數の人傑でありました。彼は二十九歳で逝きましたが、しかも彼の仕事は、實に大なるものでありました。

さて彼女も遂に反對黨のために、玄海灘の一孤島、姫島に流されることになりました。彼女がこの島に於ける生活は、姫島日記によく語られてあります。彼女はこの孤島に流されたる際、指頭を刺して血を搾り、般若波羅密多心經を血書して、刑に處せられたる遺族に送りました。そしてその心經の奥に、

おくれゐてかくも甲斐なし法の文
　　よみがへりこむつてならなくに

と書きつけました。

今もこの血書が殘つてをりますが、實に立派なものであります。然るに彼女の友人高杉は、遂に謀を以て、彼女を島から奪ひ出しました。而して、彼女を馬關に迎へて、これを優遇しました。

第五　野村望東尼

斷食を以て討幕軍の武運を禱る

高杉は慶應二年の末から、追々病氣が甚しくなりました。そして彼女は常にその看護を怠りませんでした。病中の高杉は、或る時筆を執つて、

面白きこともなき世におもしろく

と書いて、彼女に示しました。彼女は直に筆を執つて、

すみなすものは心なりけり

との句をつけました。然るに高杉の病は、益々重くなり、三年四月十四日二十九歳で馬關に逝いたのでありました。

それからやがて、彼女は山口に引取られ、小田村素太郎の家に寓しました。小田村は吉田松陰先生の友人で、且つ先生の妹聟でありまして、他日の楫取男爵であります。

斯くて、薩長の聯合が出來、愈々勤王討幕の聯合軍は、上方指して上ることになりました。彼女はその出陣を見送るために、三田尻へ赴き、その翌日から一週間、宮市の天滿宮

に參籠し、斷食をして勤王軍の幸運を祈願いたしました。それが病の因となり、十一月六日三田尻の客舍で逝いたのであります。享年六十二歲。その辭世の歌は、

花浦の松の葉白くおく霜の
消ゆるもあはれ一さかりかな

とあります。彼女は實に己を捨てゝ人に盡し、國に盡したる、我日本の女性の特色を、最もよく發揮したる一人でありました。

たが身にもありとは知らで纏ふめり
神の形見の大和魂

彼女は實に、大和魂を、神の形見として信仰したる信者でもあり、且つ實行家でもありました。

第六　尼將軍平政子

鎌倉幕府建設と北條家の功勞

若し歴史上に於ける、如何なる場合たりとも、頼朝夫人平政子を、見逃すことができませぬ。政子は、支那に於ては呂后とか、則天武后とか、また英國に於ては、エリザベス女皇とか、ヴィクトリア女皇とか、露國に於ては、カテリナ女帝とか、また我國に於ては、恐れながら神功皇后とか申す女性と、同一の階級に連る一人でありませう。

彼女は決して中性でもなく、變成男子でもなく、どこまでも女性の特質特性を備へてをりましたが、たゞ普通の女性よりも、すべての點が豐富であり、また高度でありました。世間では政子が、巧みに頼朝を操り、その兄弟を殺さしめ、その一族の葉を枯らし、根を絕やし、而して源氏の天下を、我が里方なる北條氏の天下となしたものであると申します

が、それは、政子にとつては、眞に迷惑なる濡衣であります。元來源氏の天下は、初めから、頼朝一人の力で出來たものではありませぬ。素より關八州に於ける源氏累代の潛勢力は盛んでありましたが、しかし北條家の力も決して侮るべきものではありませぬ。

北條時政は平貞盛の裔でありまして、清盛入道と、その元を一にする名家の末であります。また伊豆に於ては、伊東、北條と申して、この二氏が最も有力者であり、しかも北條は、その一族を擧げて、頼朝に盡したものであつて、鎌倉の天下は、平たく申しますれば、頼朝と北條との合名會社ともいふべきもので、たゞその割合が、頼朝七分、北條三分、乃至頼朝六分五厘、北條三分五厘といふところでありました。

されば頼朝が死に、頼朝の子供が死んだ後には、天下が自然北條の手に落ちて來たのも決して不思議はありませぬ。素より政子も女であり、女はとかく嫁入りしても、我が里方の利益を考ふる者なれば、勿論北條家のことを等閑にしたのではありませんが、しかし何れにしても、決して政子が頼朝を瞞して、天下を我が里方に奪ひ取らせたといふやうなことはありませぬ。

賴朝との情事に關するロマンス

政子は今日から申しますれば、頗る新しい女でありました。彼女は如何なる場合であつても、己といふことを忘れず、またその夫に對しても、決して濫りに己を枉ぐることがありませんでした。而して彼等の結婚は、小說といふよりも、より以上にロマンスがありました。それは、皆樣もとくに御承知と思ひますが、その事は曾我物語に最も詳しく書いてあります。

かいつまんで申しますと、賴朝は十三歲の時に、伊豆の蛭ケ島に流されました。島と申しますけれども、海の中の島ではありませぬ。伊豆は、昔から流刑に處せられる人の行くところであります。賴朝も旣に殺されるべきところであつたのを、淸盛の繼母、二位の尼の憐みで、漸く一命を助けられ、蛭ケ島に落着きましたが、その監督者は、伊東と北條とでありました。

賴朝は、まづ伊東に寄りて、その女に通じ、一子を生ましめましたが、そのことを知つ

た祐親入道は大いに怒り、平家の嫌疑を恐れて、その生める子を殺し、併せて、頼朝をも殺さうとしましたが、祐親の子祐清の情により、頼朝は一命を免れて、北條家に寄りました。ロマンスは、これからであります。

北條家には三人の女がありました。姉は先妻の子で二十一歳、妹は十九歳と十七歳でありました。先妻の子は美人の聞えあり、且つ父も、その母亡きを不憫に思ひ、妹二人にまして彼女を愛しました。これが即ち政子であります。

然るに或る時、十九歳の女が不思議な夢を見ました。それは高き峰に登り、月日を左右の袂にをさめ、橘の三つなりたる枝をかざすといふのであります。彼女は、これを不思議に思ひ、翌朝それを二十一歳の姉に語りました。姉は詳しく聴いて、これは誠に吉夢である。これを買ひ取らばやと思ひまして、妹に申しまするには、『この夢は恐ろしき夢である、「善き夢を見ては三年語らず、悪しき夢を見ては七日の中に語れば、大いなる祟があるといふことだ。』と申しておどしました。妹は途方に暮れて、『何かよき思案はなきか。』と訴へたので、姉は得たりと、『然らばこれを妾に賣りて、禍を免れ給へ。』と言ひなが

ら、北條の家に傳はる唐の鏡と、唐綾の小袖一重を渡しました。この鏡は、父時政が特に政子に與へたものでありました。ところがやがて政子はまた、不思議な夢を見ました。

夢は直ちに眞となりて頼朝と通ず

白い鳩が一羽飛んで來て、口から黄金の箱に文を入れて、吹き出し、それを政子の膝の上におき、虚空に飛び去りました。開いて見ると、それは頼朝の文でありました。急いで箱にをさめたと思ふと、それが夢でありました。然るに夢は直ちに眞となり、頼朝の文は安達藤九郎盛長の手によつて、政子の手に達しました。

頼朝は、實は伊東の女に懲りて、先妻の女よりも、後妻の女の方が頼り多いだらうと思ひ、それを選んだのですが、藤九郎は二人の妹は、何れも容貌よろしからず、とてもこれでは頼朝との情事も長く續くまいと考へ、それで、藤九郎自ら心に決し、わざと書き代へて、姉の方に持ち行いたのでした。尤もこの事は、北條時政が都に勤番の留守中でありました。

時政は伊豆の目代山木判官兼隆といふ者と同道して下り、途中にてその女を彼に娶さんと約束しましたが、歸つて來て様子を聞くと、既に頼朝との關係が出來てゐました。しかし彼はそれを知らぬ振りして、政子を兼隆に娶せましたが、政子はその夜の中に、兼隆の館を逃げ出し、女房一人を召し供して、深山の中に隱れ去りました。斯る次第で時政は、今は何ともすべきやうなく、平家の手前も心配ではあるが、また頼朝が他日如何なる大業を成すやも圖られずと、深く頼むところもあり、見て見ぬ振りをしてをりました。時政は、祐親よりも老獪とでも申すべきでせう。斯くて時が來て、愈々手初めに山木判官を打取り、次に天下を一統することになつたのであります。

吾妻鏡による頼朝の好色談

世間では判官贔屓と申して、とかく義經に贔屓多く、それだけにまた、頼朝を誤解する者が多くあります。義經に贔屓が多いのは私も苦情がありませぬ。私もすべての點とは申しませぬが、多くの點に於て、義經の同情者であります。義經が兵法に長けてゐたこ

とは、一ノ谷から屋島、檀の浦の戰を見れば判りますが、それよりも彼が到るところで、人望を得たのが不思議であります。

彼は男からも女からも愛されました。彼の家來は最後まで一人も叛く者がありませんでした。彼の妾であつた靜御前の如きも、死に抵るまで彼を慕つてをりました。彼は不幸の生涯を送りましたが、一方から觀ますれば、また非常なる幸福者でありました。

然るに賴朝は、血もなく涙もなく、冷刻慘忍、大なる主我的動物であるかの如く思はれてゐますが、當時の最も信用すべき記錄である、吾妻鏡などを見れば、全くこれに反して、實に彼には、一方に於て、大なる意思、大なる統制力があつたと共に、人間味がまた、多量にあつたことが證據立てられます。

而して、女にかけてはまた、尋常ならざる腕前を、もつてゐたかと思はれます。そのために、吾妻鏡などを見れば、政子との間に、屢〻やきもち問題が起つたことを揭げてあります。政子は前に申した通り、結婚の時から既に、その妹の夢を、貴重なる傳家の唐の鏡及び唐綾の小袖で、買ひ取つたほどの政策家でありますから、彼女は、内に於ては源氏

と北條氏との連鎖となり、外にしては頼朝を扶けて諸將士の心を收攬し、いはゞ共稼の姿で天下を取つたのであります。そこで彼女は、決して柔順なる猫の如き妻ではありませんでした。而してまた、北政所の豐太閤に於けるのとは、よほど趣が違つてをりました。兩女共に、主婦の資格の一點一畫たりとも傷けなかつたが、政子の方が、よほど手嚴しくありました。

北政所とて女であれば、固より嫉妬心もあつたでせうが、遂に秀吉の生前に、目に見えるほどの、やきもち喧嘩はしませんでした。然るに政子は、苟も頼朝が手を出す女さへあれば、片端から、これを退治してゆきました。そして頼朝は、それにも懲りず、屢〻手を出しましたが、出す度每に、直接、間接、政子より大いなる折檻を受けました。今少しく吾妻鏡によつて、そのことを話しませう。

壽永元年六月一日の項には、頼朝がその寵妾龜の前といふ女を、小中太光家の小窪の宅に招き寄せたといふことが書いてあります。またその八日の項には、小中太の家に通つたと書いてあります。これは何れも政子を憚つて隱しておいたことで、外聞の憚もあるに

より、遠境に圍はるといふことが、書いてあるので判ります。

また壽永元年八月十四日の項に、斯ういふことが書いてあります。新田義重が賴朝から勘氣を蒙つた。それは、その女、賴朝の亡兄惡源太の後室であつた者に、賴朝は伏見冠者廣綱なる者を以て、艷書を送りましたが、更にこれを許容する氣色がありません。そこで賴朝は、その父義重に申込みましたが、義重は、政子の耳に入つて、問題を惹起さんことを怖れ、俄に他人に娶したからであると書いてあります。

强盛なる政子の嫉妬と賴朝の困惑

賴朝が政子を怖れるばかりでなく、他の人々もまた、政子を怖れてゐました。壽永元年十一月十日の項に、前に書いた龜の前を、伏見冠者廣綱の飯島なる家に住はせたことが露れ、政子は殊に怒りました。これは、時政の後室牧の御方が、內々政子に告げ知らせたからであります。そこで政子は、牧三郎宗親に申しつけて、廣綱の邸を破却し、頗る恥辱に及んだといふことが書いてあります。

そこで廣綱は、亀の前を伴つて、方々に逃げ、大多和五郎義久の鐙摺の宅に至るとあります。問題が、随分大きくなつたわけであります。鐙摺と申すと、逗子と葉山の間の、日蔭の茶屋附近であります。ところが懲り性のない頼朝は、十二日には、また出掛けてゐることが書いてあります。彼は遊興にことよせて、義久の家に至り、その寵妾を訪ねてゐます。而してそこに宗親を呼び寄せて、鬱憤のあまり、手づから宗親の髻を切るとあります。而して彼の言ふことが面白いのであります。

『御臺所の言を重んじ奉り、最も神妙、かの御命に從ふといへども、斯の如きことは、内々告げ申さゞるや。忽ち以て恥辱を與ふる條、所存の企、甚だ以て奇恠なる。』云々。

『宗親泣いて逃亡す。武衛(頼朝のことであります)今夜止宿し給ふ。』云々とあります。

頼朝も、政子の言ふことを聽いたのが惡いとは言はぬ。聽くのはよいが、前以て何故余に告げぬか。また恥辱を與へたのは、怪しからんといふ意味であります。また壽永元年十二月十日の項には、『小中太光家、小坪の宅に移り住す。しきりに御臺所の御氣色を怖るるといへども、御寵愛日を追つて興盛の間、慭以て順ず。』云々とあります。これで見ますと

すと、鐙摺から、また小坪の宅に移したのであります。

卽ち逗子、鎌倉の間を諸所方々に圍つたものであります。而して十六日の項には『伏見冠者遠江の國に配せらる。これ御臺所の御怒りによつてなり。』とあります。これは外に何等の罪なく、賴朝の寵妾を宿せしめたゞけのことで、政子の怒に觸れたのであります。

この話はこのくらゐにしておきませう。

靜御前に對する人情味

政子は實にやきもちにかけては、日本の歷史のみならず、世界の歷史にも、無類とは申しませぬが、先づ珍しきやきもち家であります。しかし彼女は單にやきもちのみで生存したのでもなく、生活したのでもありませぬ。彼女の見識も尋常でなく、彼女の人情味も賞すべきものがあります。それ等は吾妻鏡によく書き記されてあります。今それに就て一言二言申しませう。

義經の妾靜御前は、義經を尋ねて吉野山大峰の一ノ鳥居の邊まで至りましたが、その中

は女人禁制のことゝて、引返す中に、遂に捕へられ、文治二年の三月には、鎌倉にその母磯の禪司と共に召し寄せられました。而して同年四月八日に、鶴ヶ岡八幡宮の廻廊で、舞を舞はせられたのであります。元來吾妻鏡の文は一種の文體があつて、そのまゝではとても讀めませぬ。今その意味を申しませう。

八日頼朝卿は、御臺所と共に鶴ヶ岡に詣られ、靜女を廻廊に召し出されました。これは舞曲を施さしめんとしてゞあります。このことは、前から屢ゝ申されましたが、靜は病氣であり――と申しますのは、義經の子を姙んでゐました――また不肖ながら自分は義經の妾で、斯るところに顏をさらすは、恥辱であると申し、出澁つてをりました。しかし彼女ほどの天下の名人を、このまゝ藝を見ずに、都に歸すことは殘り惜しいと、政子からしきりに頼朝に勸めました。そして遂に、こゝに召し出したのであります。しかし靜は出ては來ましたが、尚ほこの席に於て、今更別れし人のことを思ひ、とても舞ふ氣はないと、固く辭しましたが、再三のことで、遂に舞ふことになりました。

その時、工藤祐經が鼓を打ち、畠山重忠が銅拍子を打ちました。靜の吟じた歌は、皆

樣御承知の通りで、吾妻鏡にも出てをります。

吉野山峰の白雪ふみわけて
　　入りにし人の跡ぞ戀しき

賤やしづしづのをだまきくり返し
　　昔を今になすよしもがな

賴朝の不興を執りなして靜を釋す

『誠にこれ社壇の壯觀、梁塵殆ど動くべし。上下皆興感を催す。』とあれば、非常なる感動を與へたものでありませう。ところが、賴朝は頗る不興でありました。その文句を申しますと、

『二品仰せらるゝに、八幡宮の寶前に於て、藝を施す時には、尤も關東萬歲を祝ふべきところ、聞し召すところをも憚らず、反逆の義經を慕ひ、別曲を歌ふは奇恠なり。』云々とあります。それも賴朝にとつては、當然でありましたらう。しかし政子はこれに答へて、

かう言つたと記されてあります。

『御臺所報い申されて曰く、君が流人となりて豆州に坐し給ふの時、吾に於て芳契ありといへども、北條殿時宜を怖れて、ひそかにこれを引き籠めらる。而して尙ほ君に和順して、迷暗の夜、風雨を凌ぎ君の所に至る。また石橋戰場に出で給ふの時、獨り伊豆山に殘りて君の存亡を知らず、日夜消魂その愁をいたむもの、今の靜の心の如し。豫州(義經のこと)多年のよしみを忘れ、戀慕せざる者は、貞女の姿に非ず。形外の風情を寄せ、動中の露膽を謝す。もつとも幽玄といふべし。まげて賞翫を與ふべし。』云々。『時に御憤り休み。』云々。『御衣卯の花重ねを、簾外に押出し、これを纒頭せらる。』云々とあります。

これを見れば、流石に政子もまた、女らしき女といはねばなりませぬ。また富士の卷狩の時に、長子賴家が鹿を射ました。それは、建久四年五月十六日のことであります。『十六日富士の御狩のとき、將軍家督の若君はじめて鹿を射せしめ給ふ。』とあり、二十二日の項には、『若君鹿を射せしめ給ふこと、將軍家御自愛のあまり、梶原左衞門尉景高を鎌倉に差し向けられ、御臺所に賀し申せしめ給ふ。景高馳せ參じ、女房もつて申し入るゝところ、

敢て御感に及ばず、御使遂に面目を失ふ。』云々。

『武將の子が、原野の鹿獸を射たからとて、わざ〳〵使を出すほどのことがあらうか？頗る煩はしいことではある。』云々と政子に言はれ、『景高富士野に歸參し、今日この趣を申す。』云々とあります。賴朝は嬉しくてたまらず、早速使を鎌倉までやつたのに、右の返事で流石の賴朝も、政子に一本參つたのでありませう。

後鳥羽上皇に拜謁を辭退す

斯くの如く政子は、實にしつかり者でありました。されば賴朝が死し、その長子賴家は修善寺で殺され、その次男實朝は、鶴ケ岡八幡宮社前の大公孫樹附近で、賴家の子公曉に殺され、公曉もまた、これがために、北條の手の者に殺され、殆どその夫なり、子なり、孫なりが、皆な死に絕えつゝも、彼女は、尼將軍として政を聽き、遂に承久の大事件にまで參與して、嘉祿元年七月十一日丑の刻に、六十九歲で逝きました。そのことは吾妻鏡に斯く書いてあります。

『前漢の呂后に同じく、天下を執り行はしめ給ふ。また、神功皇后の再生の如く、我國の皇基を守らせ給ふか。』云々と。流石に吾妻鏡の作者は、歴史眼があつたと申さねばなりませぬ。

政子は必ずしも教養多き女とは申されませぬが、決して無學ではありませんでした。彼女は菅原爲長に貞觀政要を假名文に飜譯せしめ、これを讀んだといふことであります。彼女を尼將軍といふのは、眞に當つてをります。

彼女は、かつて賴朝と相携へて上洛いたしました。それは建久六年二月、三月の候で、東大寺供養のためでありました。その後彼女は、建保六年二月に、熊野に參詣のために上京いたしました。その時に、後鳥羽上皇は、謁見を仰せつけられましたが、お斷りしました。その言葉が、なか〳〵振つてをります。吾妻鏡に『十五日(建保六年四月)仙洞より御對面あるべき由、仰せ出さるゝといへども、邊鄙の老尼、龍顏に咫尺し奉るも益なし。然るべからざるの旨申させ、諸寺の禮佛の志を擲つて、卽時下向し給ふ。』云々とあります。恐らくは、種々面倒なることに、かゝり合ふことなからんとして、鎌倉に歸つたの

でありませう。

彼女は、なか〱始めから終りまで政治家的に、よく出來てゐたのでありませう。彼女は頼朝に對して、やきもちをやいたやうに、自身の行狀としては、何等申分なかつたやうでありますっこの點については、則天武后は固より、呂后に比しても、彼女は、幾くも優れてゐたと申して差支ありませぬ。彼女ほど品行方正の女性は、彼女の如き位置に立ち、彼女の如き性格の女性としては、恐らくその比類が少からうと思ひますっされば、それに免じて、やきもちなどは、先づ勘辨しておくべきものと思ひます。

彼等夫婦は、死ぬまで仲よき夫婦であり、春の花、秋の月、共に携へて遊び興じたことが書いてあります。頼朝も、外の女性に追ひ〱手を出したことがありますが、彼女に對するの愛情、若しくは尊敬の點は、終始渝らず、この意味で彼等は、殊によく似合つたる夫婦と申して、よろしからうと思ひます。

第七　大田垣蓮月

由緒ある人の子に生れて

私が子供の時でありました。私の家に母が殊更に大切にしてゐる、變な茶道具がありました。それは急須から、湯冷しから、茶碗まで、悉く蓮の葉の形をし、それに一面假名文字をふりつけてあります。『これは何物であるか。』と訊きましたら、『それは蓮月といふ、奇特な尼さんが拵へたものだ。』と承りました。私が蓮月尼を知りましたのは、それからであります。その後同志社にまゐりまして、五條坂邊を散歩の際に、蓮月の陶器を賣る店を見出して、そゞろにそのことを想ひ出したのであります。蓮月尼は確かに、維新前後に亙る女性の一人として、記憶すべき婦人であります。

蓮月尼は寛政三年正月八日の生れであります。寛政三年といへば、紀元千七百九十年で、ワシントンが合衆國の大統領になつた翌年であります。彼女の父は智恩院の寺侍で、大

田垣光古と申しましたが、しかしその實、彼女は伊勢藤堂家の分家某の庶女であり、生後十餘日目に、その碁相手であつた、光古が貰ひ受けることになつたといふことであります。彼女は、三本木に生れたと申しますれば、當時三本木は煙花の巷で、公卿とか、大名の留守居とか、その他上流階級の人々の遊び場所のことゝて、その母の何人であつたかは、詮索するまでもありませぬ。一言にして申しますれば、彼女はともかくも、立派なる人の落胤とでも申すべきでありませう。彼女の名は誠と申しました。

彼女は女性として最大の特權ともいふべき、美貌、麗質をもつて生れ出で、六七歳の頃から、歌詠み、文書くわざなどを覺え、傍ら劍道、柔道、その他の武藝をも習つたといふことであります。彼女は、十三歳で大田垣家の母を失ひました。その母は、素より生の母ではありませんが、至孝なる彼女には、大なる打撃でありました。そして、母の死より七十餘日前に、大田垣家の一人息子、彼女の兄なる仙之助を失ひました。斯くて、彼女は幼くして、人生の悲哀を覺えたのでありませう。

とにかく彼女は、ゆくりなく御殿奉公をいたしたやうでありますが、或は因州鳥取とい

ひ、或は丹波龜岡といひ、いろ〳〵の說がありますが、寧ろ後者を採るべきでありませう。而してそれは、八九歲より十七八歲までのことであります。彼女と懇意だつた和田智滿和尙の話によれば、薙刀、鎖鎌、劍術、舞、歌、裁縫など、人に敎ふるに足る藝が七つあつたと申すことなれば、その間に如何に彼女が修養を積んでゐたかは、以て知るべきでありませう。彼女は、老婆になつても、三尺ほどの棒があれば、一間くらゐの塀は、飛び越すと申されたくらゐなれば、その嗜のほども知るべきであります。

不運なりし彼女の良人緣

父は鳥取の士で、それが京都に出て智恩院の寺侍となり、やがて門跡の譜代を仰せ附けられたる人にて、圍碁に長じてをりました。彼女も父の相手をして、初段を打つたさうであります。大田垣家では、その一人息子仙之助が死んだ上は、今はその相續者として、彼女に聟をとるの他なく、彼女は御殿から暇をとり、十七歲の春、愈〻聟を迎へることになりました。聟は但馬城崎郡の岡氏の末子で、天造と申しました。

斯くて、夫婦の間に一男二女が生れましたが、聟は放蕩懶惰にて、養父との折合悪しく、遂に離婚となりましたのが、彼女が二十五歳の時でありました。固より離婚は、彼女の志ではありませんでしたが、父が折合はぬから、致方がなかつたのでありませう。而してその年、天造こと、改名直市は病死しました。爾來彼女は、二十五歳の若後家となりましたが、天性の美貌のために、種々の誘惑が、彼女の周邊に迫つて來たことはいふまでもありません。

彼女は、誓つて再緣せぬ決心でありましたが、父は愈ゝ年老い、その家も斷絶する危險がありましたので、遂に父の望に任せ、文政二年に、彦根の家中石川氏の三男、重二郎を迎ふることになりました。時に父六十四歳、誠子は二十九歳でありました。然るに、この養子は、養父との折合もよく、誠子との間も睦じく、やがて一女子生れ、文政三年九月には、愈ゝ重二郎が家督を相續することになり、一家には春風が吹いてをりましたが、好事魔多しで、重二郎は文政六年の春から、面白からぬ咳に惱み、六月二十九日終に長逝いたしました。誠子は良人の病革まりし六月二十八日に、自ら黑髮を剪り落しました。

父と共に剃髪して眞葛庵に別居

彼女は、再婚の際に父に向ひ、『若しこの後、再び夫を失ふことがあれば、もはやこの世に望がないゆゑ、尼となる。』といふ決心を告げ、その承諾を得て再婚したのでありま す。今や愈〻その決心を實行したのであります。當時誠子は三十三歳であつて、その時の歌に、

常ならぬ世は憂きものとみつぐりの
　一人殘りて物をこそ思へ

とあります。

斯くて亡き良人を葬つて間もなく、父と共に智恩院大僧正について髪を剃りました。而して父には西心、彼女には蓮月の法名が授けられました。大田垣家には、亡夫重二郎と同藩、風見平馬の義弟を貰ひ、これを養つて相續いたさせました。斯くて彼女は父西心と共に智恩院山內眞葛庵に別居いたしました。その時の歌に、

色も香も思ひ捨てたる墨染の
　　袖だに染むる今日のもみぢ葉

とありますが、これは彼女が尼になりたる初秋の歌であります。

彼女と、先夫との間に二女一男がありましたが、何れも一歳、三歳、四歳にて亡り、また最後の夫との間に出來た一女も、文政八年四月、七歳にて沒しました。そこで彼女は、たゞその養父と、眞葛庵に在つて、ひたすら孝養しました。眞葛庵に移つた時には、父西心六十九歳、彼女は三十三歳、その娘は五歳でありましたが、前にも申す通り、その子は翌々年、七歳にて逝き、彼等父子は全く親子二人で、ひたすら淨土教を信仰し、念佛看經し、或は風月を友として吟詠に耽つてをりました。

然るに父西心は、天保三年八月、七十八歳にて往生を遂げました。時に彼女は四十二歳でありました。當時の歌に、

たらちねの親の戀しきあまりには
　　墓にねをのみ泣き暮しつゝ

とあります。

これから彼女が、明治八年、八十五歳までの、四十餘年の生涯は、全く天上天下彼女一人の生活でありました。

蓮月燒なる陶器を製し始む

彼女は如何なる職業も、欲するまゝに選ぶことができたのでありませう。一時は碁會所を創めようかとも思ひました。父が碁好きであり、父の在世中は彼女の家に屢〻碁の會合がありました。しかしそれも男相手で面白くないとて止めました。また和歌の師匠ともなりましたが、それもやがて止めまして、愈〻粟田口にある懇意な老婆の勸めにまかせ、埴細工をすることになりました。これが今日まで傳はる蓮月燒の源であります。

彼女の陶器は、江州信樂式、土は京都の神樂岡のを用ひました。しかしその窯元は、三條帶山、五條清水六兵衞、下河原の黑田等でありました。彼女は諸藝の中で一番下手なのが陶器で、また一番好きなのも陶器だとのことであります。陶器は他人相手でなく、己一

人で作る仕事なれば、彼女にとつては、煩しくなかつたのでありませう。

彼女は美貌のために、隨分困つたことがありました。そのために、重き秤を前齒にかけて、それを引き拔いたといふ話さへあります。近藤芳樹の書きたる文にも、『今は昔おのれ都にて逢ひし頃は、墨染の衣あらゝかなる姿ながら、猶眉のあたりうちけぶりて……そのかみのいぶかしきまで美しき顏なりしを。』と言ひ、また野村望東尼の手紙にも、『早や齡七十五なるよしながら、いまだ五十ばかりとも見え侍る。いと〳〵美しき尼ぞかし。昔はいかに花咲きし人ならんと、忍びやられ侍る。』とありますれば、その三十代から五十代頃までの、彼女の尼生涯には、如何に誘惑が多かつたかゞ思ひやられるのであります。

されば彼女が、その職業に於ても、人を相手にせず、物を相手とする製陶を選んだのは、眞によき思ひつきといはねばなりませぬ。彼女の謂ゆる蓮月燒は、やがて評判ものとなりました。而して何時の間にか、模造家も五六軒出來ました。彼等は玄人の製陶家であるゆゑ、模造の方が原作より立派でありましたが、歌を書くことだけは、むづかしくありまし

た。そこで彼等は圖々しくも尼の許に至り、『歌だけお書きくださらんか。』と註文を申込みましたが、彼女は笑つてその求めに應じたのみならず、『たまには眞物も必要だらう。』とて自作一箇づゝをくれてやつたとのことであります。

匠氣なく俗臭なき彼女の和歌

しかし、何といつても彼女の本色は歌であります。妙齡の頃には上田秋成に就いて學んだといひますが、それは確ではありませぬ。たゞ故人としては小澤蘆庵に私淑し、當時の人としては、六人部是香に添削を乞ひました。しかし彼女の本色は、彼女自身にあつて、決して他から受けたものではありませぬ。彼女は、その後屡〻家を移しました。世間では彼女を『屋越し家の蓮月』と申したほどでありました。東山一帶、下河原、大佛、岡崎、聖護院の諸所方々に移り住みました。最後に西賀茂に行き、そこが彼女の終焉の地となりました。

彼女の四十餘年の尼としての生活の中には、世の中に、いろ〳〵の變遷がありました。

この間に於て、彼女は種々の人と交りました。學者もあり、有志家もあり、歌人もあり、僧侶もあり、神官もあり、婦女もあり、いろ〳〵の者がありました。而してその有志家との交際のために、彼女も幾分か幕府の役人から睨まれたものらしくあります。彼女が丸太町河端東入ル植吉の家の裏にゐて、終にそこから西賀茂村神光院に移りましたのも、丁度その頃でありませう。

私は彼女を歌人として見ても、立派なる一人であると思ひます。彼女の歌については與謝野晶子女史が、

『尼は天資もとより聰慧なる上に、平安朝文學の敎養深く、實際の人生に直面して艱難の路を過ぎ給ひ、常の世を捨て〻一段高きもの〻外の世に生き給へり。人として既にその心高く、己がゆくべき所にゆきて玲瓏たりしかば、與に觸れて遺し給へる詞藻、はた淸らかに優しく、世の匠氣と俗臭とに染む所なかりき。げに蓮月といふ名は、尼の一生を自ら能く表し給へり。』云々と評せられたる通りであります。

一言にしていへばその歌は、小細工を用ひず、作り飾りなく、如何にもすら〳〵と我が

思ひ通りを言ひ表してをりますが、その思ふところが、自ら彼女の個性をよく表してをるのであります。その歌を讀んで、その人を知ることのできるのは、世の中に比があまり多くありませぬ。しかし彼女にとつては、殆ど皆なそれであります。

歌が、彼女であり、彼女が、歌でありました。彼女は、故に世間離れをしたる仙人でもなく、故に難行苦行を誇る聖者でもなく、故に自ら義として、他を卑しむものでもなく、たゞ自然の約束で、彼女の生活が成り立つたかの如く考へ、誇らず、悲しまず、尤めず、羨まず、到るところに安んじ、到るところに樂しむの心地は、まことに尊きものであります。

敵味方に一視同仁平等の愛を注ぐ

殊に如何なる賢明なる女性でも、女性には愛憎の念が多くありますが、彼女に限つて愛はありますが、憎といふものはありません。彼は如何にも心が寛くありました。彼の攘夷熱の熾んな時さへ、彼女は決して外國を敵と思ひませんでした。それは彼女に、

降りくとも春のあめりかのどかにて
世のうるほひとならむとすらむ

といふ歌があるので判ります。アメリカの來るのを雨に喩へて、春雨の如く、却て世の潤ひとなるなどゝは、その時の人の頭で合點のゆくことではありませぬ。これを見ても、彼女が、如何に物事に拘泥しなかつたかゞ判ります。また維新の際に彼女が詠んだ歌に、

打つ人も打たるゝ人も心せよ
同じみくにのみ民ならずや
あだ味方勝つも負くるも哀れなり
同じみくにの人と思へば

といふのがあります。彼女は、實に斯くの如き心を以て、戊辰の戰爭を觀てをりました。當時官軍といひ、賊軍といひ、互に鎬を削り、甚だしきは、その肉を啗はんとまで相疾視したる時に、斯くの如き心を以て、爭を眺めた彼女の心は、如何に廣大であつたでせうか。

西郷でも、大久保でも、勝でも、山岡でも、朝廷方、幕府方、英雄豪傑は雲の如くありましたが、彼等も蓮月のこの平等、無差別、一視同仁の歌には、低頭平身したのでありませう。彼女の歌で最も有名なものを擧げてみませう。

山里は松の聲のみ聞きなれて
　　風吹かぬ日は淋しかりけり

如何にも彼女が自然と同化したる心が知られます。また、

宿かさぬ人のつらさを情にて
　　おぼろ月夜の花の下伏し

これが即ち愛敵の心といひませう。また、

聞くまゝに袖こそぬるゝみちのべに
　　さらすかばねはたが子なるらむ

などは、官軍もなく賊軍もなく、たゞ屍を曝すものを憐れんだ、彼女の心が判ります。また述懐の歌に、

日かげまつ草葉の露の消えやらで
　あやふく世をも過しつるかな

とありますが、これは如何にも戰々兢々として薄氷を履む如しといつた、古人の心がけがよく判ります。また山家の風に、

吹きわたる松の嵐に春秋を
　聞きわくるばかりなる〻山里

とあります。人は目にて春秋を分つことができますが、耳にて春秋を分つことは、たゞ蓮月尼に於てこれを知ります。

彼女は時として左の如き考も起つたらしく、

弓矢とり刀さげはきてこむ世には
　君に仕ふる身と生れてむ

といふのがあります。彼女の歌を一つ〳〵吟味すれば、一つとして面白からぬものがありませぬ。如何にもさつぱりしてゐますが、その中に何ともいへぬ味があります。例へば若

菜の歌に、

ことたらぬすみやなれども七草の
　　数はあまれる春の色かな

など、足るを知るものは富むといふ意味が、これでよく判ります。

一生を佛と人とに奉仕して終る

彼女は決して陶器製造家のみでなく、また歌人のみでもありませんでした。彼女は實によく人を惠み、一生奉仕的生活をしてをりました。或は丸太町の橋を架けたり、或は西賀茂の子供達に着物をやつたり、物あれば施さずにはをらなかつたのであります。

それゆゑ彼女のために引き立てられた人が少くありませぬ。その中でも富岡鐵齋翁の如きは、重なる一人であります。

斯くて彼女は明治八年十二月十日、八十五歳にて西賀茂の神光院で逝きました。彼女は七十時代に、白木綿にて一反風呂敷をし、製富岡鐵齋に月と蓮を描かしめておきました。

然るに彼女が往生を遂げて、遺骸を湯灌し、彼の風呂敷を出して見ると、月と蓮との間に自筆で、

願はくばのちの蓮の花の上
　曇らぬ月を見るよしもがな

と書いてありました。これは、豫め辭世の歌を書いておいたものでありました。

第八　小野寺十内の妻丹女

赤穗義士復讐の起れる時代の風氣

元祿時代は、德川氏治世二百六十年間に於て、恰も分水嶺ともいふべき時代であつて、德川時代、文化の絕頂ともいふべく、從つてまた、社會墮落の極度ともいふべく、當時の男女の風俗は、西鶴の描き出した一代男や、一代女を見れば、如何に彼等が、生活を享樂するのみならず、享樂そのものを、生活の目的となしつゝあつたかゞ、雄辯に物語られてをります。

固より西鶴の描きたるものは、極端の例であつて、すべての男が、悉く一代男の主人公であり、すべての女が、また一代女の主女であると思ふのは、間違ひであります。しかしながら世の中の風儀そのものが、一般に驕奢放恣に流れ、從つて男女の貞操などは、殆ど問題にもならない有樣でありましたことは、固より疑を容れませぬ。

尤も、その時代に於ても、男子には、『武士訓』などゝいふ書物があり、女子には、『女大學』などゝいふ書物があり、何れも、その當時に於て、相當の節度、相當の制裁が、必ずしもなかつたのではありませぬ。しかし恐くは、それが悉く空言ではなかつたとしても、十の八九までは、敎訓は敎訓、實際は實際で、自ら別になつてゐたものかも、知れませぬ。

その時代に於て、世の中に最も著明なる出來事は、赤穗義士のことであります。赤穗義士に就いては、世間は勿論知りすぎるほど知つてをられるでありませうから、私は今こゝに詳しく申しませぬ。兎に角、京都から江戸へ下つた勅使接待に就いて、淺野内匠頭が、吉良上野介に辱められたのを遺恨に思ひ、殿中に於て、彼を打ち果さんとしましたが、その目的を達せず、こゝに於て淺野は切腹を命ぜられ、その知行をも取上げられ、その家も斷絶されましたが、相手の吉良は何等のお咎めも蒙らず、喧嘩兩成敗とは、德川家康以來の掟にも拘らず、時の將軍綱吉の仕打が、あまりに片手落のために、淺野家臣下の面々は、それ〴〵運動をなし、せめて小くとも内匠頭の弟大學を、相續者として家

を守立てんとしましたが、それさへもできなかつたから、もはや致方なしとして、愈〻直接行動に訴へ、四十六人の同志のものが、本所なる吉良邸に打入り、積る恨を晴らし、斯くして彼等はまた、時の幕府のために、それ〴〵切腹を申し附けられた、といふことであります。

夫唱へ婦和する理想的の家庭

初めは同志の士も澤山ありましたが、事が進むに從つて、ボツ〳〵脱退者を生じ、結局四十六人となつたのであります。世間では四十七士と申しますが、愈〻打入る間際になつて、寺坂吉右衞門が吉良の門前から逃亡したのであります。彼はそれに就いて、大石内藏助から、特別の使命を授かつたなど〻、事後には申譯してをりますが、何等左樣のことなく、全く逃亡したことは間違ひありませぬ。

さて私がお話するのは、四十六士の中の小野寺十内及びその家内の丹女のことであります。小野寺十内は元來出羽の名族、小野寺遠江守の裔で、祖父十太夫の時から、赤穗

の淺野家に仕へました。高祿ではなく、百五十石でありましたが、しかし主家が漸く五萬石餘の小大名であつてみれば、百五十石は、先づ中士と申しても、差支がありますまい。彼は京都お留守居であつて、そのために京都堀河に住したる當時の大儒、伊藤仁齋、東涯父子の門に出入してゐました。

彼の妻丹女は、同藩の士灰方藤兵衛の女であつて、彼等夫婦は單に尋常一樣の夫婦であるのみでなく、その氣分も、その趣味も、しつくり合つたる、眞に夫唱へ婦和するの理想的家庭でありました。小野寺は伊藤父子の門人であり、自分も相當の學問あり、和歌に堪能でありました。今日では五十九歲と申せば、全く働き盛りでありますが、當時に於ては、四十歲から初老と申すほどで、五十九歲は、もはや老人であります。彼が老後述懷の歌に、

老いぬればよそになされて古を
　　語るをだにも聞く人のなき

と、詠みました通り、彼自身も、もはや當時は老人と、自覺してゐたのでありませう。

ところが、彼は、當に隱居すべき時に於て、主家の大變に遇ひ、直に鎧一領、槍一筋、

着替の帷子一枚を支度して、赤穂へと出掛けました。彼は勿論、赤穂城に籠城の覺悟で、母にも妻にも、何等語るところなく出掛けたのであります。

十内妻を信じて決死の志を告ぐ

しかし彼が赤穂から、その從弟にして、京都町奉行の組與力たる小野寺十兵衛に與へたる書中には、『女子でもさのみ騷ぐまじく、覺え有之候間』云々、また『一家の名を下すやうのことは有之間敷候間、お心安かるべく候。』などゝ申してをります。彼は、母や妻に告げずに出掛けても、彼女等は、豫ての覺悟があるゆゑ、この事を聞きたりとて、何等騷ぐことはないといふことが書いてあります。卽ち斯くまでに十内は、その妻を信用してゐたのであります。彼は固より、城を枕に打死を覺悟したのであります。

また赤穂から妻に答へたる手紙の中にも、『今の内匠殿に、格別の御情には預らず候へども、代々の御主人くるめて百年の報恩、また身不肖にても小野寺氏の嫡孫にて候。かやうのときにうろつきては、家の疵、一門の面汚しも面目なく候ゆゑ、節に至らば、いさ

ぎよく死ぬべしと、たしかに思ひ極め申し候。老母を忘れ、妻子を思はぬにてはなけれども、武士の義理に命を捨つる道、是非に及ばぬところと合點して、深く嘆き給ふべからず。』云々と書いてあります。

然るに籠城の評定は一變して、愈〻赤穗退散となり、十内は再び京都に還り、京都東洞院西へ入ルところに卜居し、種々の畫策に從事し、その翌年元祿十五年十月、愈〻江戸へ下ることになりました。彼等には子供なく、そのために同藩の同志者大高源吾の弟幸右衞門を養子としたのであります。

十内は、六十歳にして、主君の仇を報ゆべく、京都から江戸へ下つたのでありますが、途中の和歌は、一つとして家を思ひ、妻を思はぬものはありませぬ。

（家を出づるときに）

思出は音羽の山の秋毎の
　色を別れし袖ぞとも見よ

（加茂川を渡りて）

おき別れ今朝うち渡る加茂川の
　水の煙は胸に立ちそふ

（大津志賀の浦にて）

故里にかくてや人の住みぬらむ
　ひとり寒けき志賀の浦松

如何にもその妻の孤棲を思ふの情が、言外に溢れてをります。

復讎に就て夫妻の精神的一致

また十内が箱根にさしかゝつた時、偶ゝ江戸から京都へ上る知人に出會し、茶店に憩ひて一首を認め、これを託送するとて、

限りありて歸らむと思ふ旅にだに
　なほ九重は戀しきものを

況や限りなき永遠の離別たるに於てをやであります。そも〳〵丹女が和歌に堪能なりしこ

とは、『春の風』の題にて、

咲き初むる外山の櫻匂ひ來て
人驚かす春のあさ風

といふ歌があるのでも知られます。彼女の兄灰方藤兵衞も、最初は同志の一人でありましたが、中途から變心して脫退しました。これがために、小野寺十内は彼と交を絕ちましたが、丹女もまた夫に從ひ、苦痛を忍んで兄と交を絕つたのでありました。

元祿十五年九月には、夫婦で孝養を盡した、九十餘歲の老母は逝きました。その後丹女は、『亡き人の墓に詣でゝ』と題して、

昨日まで問へば答へし言の葉に
聞きこそかふれ松の下風

と詠みました。乃ち老母を葬りし後、十内は、心安く復讐の目的を達すべく、江戶へ下つたのであります。

さて彼等夫妻が如何に親しくあつたかは、元祿十五年十一月三日附にて、十内が江戶か

ら京都なる丹女に與へたる書簡が、よくこれを說明してをります。『此方の歌とりわき逢坂の歌あはれのよし、能くきゝ給ふと存じ候。その元の歌さて〳〵感じ入り參らせ候。涙せきあへず、人の見る目も思ひつゝ、度々ぎんじ申候。おくの歌、まさり申すべく候。これにつけても必ず歌をばすてなくて、たえずよみ申さるべく候。』と言ひ、また他の一節には、『雁をこの頃より合ひて料理いたし候とて、自ら鳥屋へかひに參り候。あまり見事にてやすく候ゆゑ、一羽買ひ申候。其元へ送り申すべきためにて候。味噌鹽して送り申候。珍しく賞翫めさるべく候。あとは、幸右衞門(養子)方へやり申候。さてこの料理早くめさるべく候。あま鹽にて候まゝ、久しく鹽を出し申さず、さつと水に入れて、大根いてふをつまにして、うす味噌にて、汁にめさるべく候。』とあり、十內は更に同年十二月十二日附にて、左の如く申し送つてをります。

『こゝもとのこと、やう〳〵時至り申候。この上は如何なる大變のあらんは格別、變りたることなければ、もはや今日より三日は過ぐまじく候。今まで一年の內、我人ともに幾許の心盡し身を碎き申候甲斐ありて、今この時節に至り候こと、まづ〳〵これまで

をも本望と悅びいさましく、先にもさぞ心有るべければ、勝負は互の天運次第にて候。兼ても申す如くに、公儀より如何樣の御咎め有之りて、たとへかばねをさらされ申候とても、少しも恨みとも物うしとも思ふまじく候。忠義に死したる體を、天下のものゝふに見せて、人の心を動さんこと、却て本望にて候。かくの如くの志にて候まゝ、ゆめ〳〵氣遣ひめさるまじく候。』

而して十内は、十二月十三日附にては、『もはや言ふべき節もなく、たゞ〳〵そこもとのこと思ひやる計にて候。』と、言ひ大石主稅に短册を書かせて送りました。而して更に打入の當日、十四日附の文には、『歌どもさて〳〵感じ入り淚を濕し申候。その外取込みの節ゆゑ、何事も詳しく申入れず候。思ひあきらめ給へかし。』とあります。これは當日丹女よりの文が到着したから、その返事であります。これによつても彼等夫妻が、實に精神的に一體であつたことを、羨望せずにはをられませぬ。

義士打入當夜の情景

小野寺十内が首尾よくその目的を達し、芝白銀の細川邸に御預となるや、十内夫妻の通信は、また取交されました。當時丹女は、

筆のあとみるに涙のしぐれ來て
いひ返すべき言の葉もなし

との一首を酬いました。而してその歌は、細川邸内の評判となつたほどでありました。

十内が、元祿十六年二月三日、即ち彼等が切腹の前日附で丹女に與へた書簡を見ますれば、最期の心持は固より、打入の顚末から、細川家に於ける待遇等に至るまで、如何にも詳しく書いてあります。その一、二節を揭げてみませう。

『我等お仕置に逢ひて死ぬるなれば、兼て申含め候如くに、そもじ安穩にてもあるまじきか。左候はゞ、兼ての覺悟のこと、驚き給ふこともあるまじく、取り亂し給ふまじきと、心易く覺え候。もし何事なき身となりて、都の傍にも住み給はゞ、貞立樣を呼び迎へて、ともに憂をも語り慰みて、久しからぬ御一期をみとゞけまゐらするべければ、これも思ひおくこともなく候。いか計思ひ殘しても甲斐もなきにて候。ともかうもして、

一生をかすかにもおくるを樂みと、あきらめ心を忘れ給ふまじ。』

如何に彼等夫婦が双心相許したかは、これを見ても判ります。更に打入の顚末を左の如く語つてをります。

『十四日(元祿十五年十二月)の日暮れに、内藏殿(大石)と二人、かごに乘りて、宿を立出で、堀部彌兵衛方へ行きて、九つ(夜の零時)頃迄、ものくひ、酒のみ語り、それより、林町堀部安兵衛方へ行き、こゝにて勢揃ひして、七つ過ぎに打立ちて、かたきのかたへ推寄せ候。あかつきの霜おき、氷りて足もともよく、火のあかり世間を憚りて、提灯も松明も、ともさねども、有明の月さえて、道まがふべくもなくて、かたきの屋敷の辻まで押つめ、こゝより東西へ二十三人づゝ、二手に分れて取かけ、東表は、長屋にはしごをかけて、屋根より乘込み申候。親子一方へは向はぬことにて、我等は西へかゝり、幸右衛門は東へ向ひ候。源吾、幸右衛門その外二三人、かれこれ四五人一度に屋根を一番に乘り、屋根の上より飛びおりざまに、高聲に名乘りて、直ぐに玄關へかゝり、戸を蹴破りおしこみ、番人三人廣間に寐てゐたるが、おきて立向ふ。一人を幸右衛門高股を切つて落し、切

伏せ、直ぐに奥に切つて入候。その床に弓たて並べてあるを、幸右衞門奥へ切入りざまに、その弦をばら〳〵と切り拂ひて通り申候よし。これは兼て敵の方に弓はやり、習ふ者多きと聞え候故、定めて内そとより弓にてふせぎ申可く候まゝ、その心得すべしと、各内々言ひ合せたるゆゑなり。敵いづかたよりか、起き出て、後より射らるべきと心附きて、弦を切りはなして、通りたるらんと、よく心づきたりとて、かるき事ながら、その砌り人々感じ申候。これほどの間を合はせ候事、親心の嬉しさ、そもじも共に悦び申さるべく候。』

如何にも當時の模様が、眼前に髣髴します。打入の文字では、これが、第一等でありませう。

十内の働きとその最期

流石に思慮のある大石等は、現場に於て功を爭ふことを、豫め心配して、その働きに於ては、上野介を討取るのも、くゞり戸を守るのも、決して甲乙の差別はないことを申

し合せました。

『さて若き者、年寄り、爭ふ事にあらず。若き者を指圖して、老人はたゞ守りをよくすべし。かたきの内へおし入る人數、一人も生きて出づべからねば、皆同じ志なり。打そひも、ましおとりもなしに、打立つまへに、互に神文をかき申候ほどの中ゆゑ、西の手へは大石主稅を伴ひ、介添に忠左衞門(吉田)と我等參り候。その勢ひ、如何なる天魔波旬も、面を向くべからずと思はれ候。おし入りて門の右の長屋の前にて、二人出合ひたる男、先へ出候を、我等一槍に突伏せ申候。喜兵衞(間)は門を守り、我等は北の方、うら口へ參り、隣の土屋主稅殿は裏垣越に屋敷を守りて居り申され候。こなたより言葉を使ひ、その方を守り、出であふもの、二所にて二人突伏せ申候。一人は片岡源五右衞門見てゐて、十内殿あそばしたりと賞め申候。一人は大石瀨左衞門見てゐて、その男の倒れざまに、念佛申たるまで聞申候。三人ながら證據のある事にて候。老人の罪作りとや申すべき。皆やりての事なれば、刀には手もかけ申さず候。』これは十内が自分の働きを、その愛妻に告げ知らせた一節であります。また、

『日永にて、するわざもなくて、心の儘に寐つ起きつ、好きの寐酒も晝酒もたべて、十七人の同志、夜晝こしかたを語り、馳走人衆も心易く挨拶して淋しくもなく、今日まで五十日暮し申候。例の歌よみてきかすれば（筆のあとみるに涙の云々の丹女の歌）人々袖をしぼり感じ入り候。いかいこと詠じちらし申候。何とぞなるべくば、あとより一筆おくりていひやるべく候。幸右衛門事も、心易く思給ふべし。我が歌にて、あきらめられ給へかし。

　　迷はじな子と共にゆく後の世は
　　　　心の暗も春の夜の月

死ぬべき際なれば、故里も忘れたるらんと、思ひもめさるべく候が、この歌この頃思ひつき候まゝ申入候。膳部にいろ／＼の春の野菜出されたるをみて、

　　むさし野の雪間も見えつ故里の
　　　　妹が垣根の草も萠ゆらむ』

これが十内の絶筆で、「元祿十六年二月三日附の手紙でありました。恐くは、この書を

認めるまでは、近い内とは思ひながらも、明日が切腹の日とは、十内も確かに知らなかつたでありませう。

實に十内の如きは、百五十石の小祿でありながら、文あり、武ある、見事な武士でありました。

丹女の殉死とハインドマン夫人

丹女は、この最後の手紙を受取り、愈ゝ心に決するところあり、後事を經紀し、その夫十内、その養子幸右衛門、その親類大高源吾、岡野金右衛門等の菩提を弔ひ、今は心にかかることもなしと、斷食して、同年六月十八日に、その夫に殉じて逝きました。

　　つまや子の待つらむものを急がまし
　　　　なにかこの世に思ひおくべき

これが辭世の句でありました。彼女は實に元祿時代に於ける、士流婦女の、最も典型的な一人でありました。

彼女の墓は、今尚ほ京都本國寺の塔頭了覺院に在ります。法名梅心院妙薫日性信女、元祿十六癸未六月十八日と刻られた石塔が建つてをります。

私は丹女の殉死について、他に想ひ出すことがあります。英國にハインドマンといふ社會黨の首領株がありました。ハインドマンは、社會主義者でありますけれども、相當の財産家で決して昔ではありません。彼は大戰の後まで生きてをりましたから、そのことは決してあり、また少からざる著書があります。彼の夫人は年齢でいへば、親子以上の相違があるかも知れませぬ。しかしながら、頭は寧ろ、夫人の方がよかつたといふ說もあるほどで、なか〳〵聰明なる才媛でありました。

殊に身分も立派な人であつて、たゞ主義が一致したゝめに、老人と結婚したのでありませう。ところが老人が逝き、その傳記を夫人が著述し、愈〻最後の校正の最終の頁を終るや、かねて覺悟してゐたものとみえまして、彼女は我事終るといはんばかりに、藥を呑んで逝いたのでありました。私は、このことが、模範とすべきことか、否かといふことは、論じませぬ。たゞ英國の新聞で、これを讀んだ時に、何んとなく、小野寺十内の妻な

る丹女の殉死を、想ひ出さずにはをられなかつたのであります。彼女は、別に薬を呑むでもなく、また自殺の特別手段を採るでもなく、斷食して遂に逝きました。元祿時代に於て、斯の如き女性の存在したることは、宛も暗の世に、一つの星を見出したる心持がいたすのであります。

第九　矢島楫子

無特色の特色者、偉大なる平凡人

明治の時代になつては、女性の中にも種々の人物が輩出いたしました。或は教育の上、或は文學の上、或は技藝の上、或は美術の上、或は宗教の上、或は社會事業の上に、その他あらゆる方面に多くの人物が出で來りました。必ずしも男子に對抗するほどゝ申すのではありませぬが、それにしても、また決して乏しかつたとも申されませぬ。その中に於て、最も特色ある一人は、矢島楫子女史であります。その仲間では、何れも彼女を、矢島先生と申してをります。彼女は舞臺の後にあつて、政治のからくりに與つたと申す如き、政治的婦人ではありませぬ。また大いなる作物を世に殘すほどの、文學的婦人でもありませぬ。または、偉大なる感化を周圍に與へ、己より以上の多くの英才を養成したる、一大教育家と申すでもありませぬ。しかし、何等彼女に、斯くの如き特色はありませぬが、そ

のなきところに、却て彼女の特色を見出すことができます。彼女は實に偉大なる平凡人であり、また平凡人の偉大なるものでありました。

矢島女史は大いなる富の家に生れ出でたるものでもなく、また大いなる門閥の家に生れ出でたものでもありませぬ。しかし彼女はまた、水呑百姓や、貧乏者の子でもなかつたのであります。父は矢島忠左衞門直明と申して、熊本藩に於ける鄕士でありました。母は三村氏つる子と申しまして、當時に於ては稀なる賢夫人でありました。父直明は地方の總庄屋となり、到るところに治績を顯しました。總庄屋と申すと、村長の上、郡長の次と申すくらゐのもので、しかも、その治める地方の收税から、土木、治安及び警察、裁判のことまで、一手で支配するものであつて、かなり權力のあるものでした。

矢島家には八人の子女がありまして、中一人は男子で、直方と申しました。これは維新以前に於て、開國論を眞先に唱へたる、横井小楠先生の門人で、その七人の女姉妹は、概して何れも多少、他よりも挺んでたる或る物を持つてをりました。中にも竹崎順子、德富久子、矢島楫子の如きは、その尤なるものと思はれます。

竹崎順子は、竹崎律次郎(後には茶堂)と申す者の妻で、茶堂は熊本に於ける教育家であり、社會事業家でありました。順子の最後は熊本女學校の長として終りました。この人は渾身總て維れ奉仕的精神、渾身總て維れ慈愛の塊でありました。

女史の結婚受難、夫は酒狂

德富久子は德富淇水の妻であり、德富の家は、矢島の家と社會的位置に於ても同格であり、また學問の上からも、德富淇水は、横井小楠の門人であり、また公人としては、淇水の父義信は矢島直明と同僚でありました。露骨に申しますれば、久子は私の母であります。順子の妹が久子で、久子の妹が楫子であります。楫子は、姉妹中では田舍娘として、恐らくは美人に近かつたでありませう。楫子の姉横井津世子は、横井小楠の妻で、評判の美人でありました。而して私共の眼には、津世子と楫子とは、その容貌は瓜二つといふほどに見えました。

しかし津世子は、幼きより、柔順、温和、誰人にも愛好せられましたが、楫子は、生

立ちの時より、皮厚く、骨硬く、容易ならぬ膽魂を持つてゐたかの如くに思はれます。彼女の幼き時には、その姉なる久子は、彼女に、『澁柹』の尊號を與へたさうでありますが、その永眠する九十二歳の時までも、彼女のこの澁味は、全く脱けきらなかつたのであります。

彼女は生涯の第一歩に於て、運命の神に弄されたのであります。彼女は、その生家の隣村なる林家の婦となりました。その夫は良好なる紳士でありましたが、彼は横井小楠の酒飲み仲間で、小楠は酒を飲んでも、他に、より大きい幾多の取柄がありましたけれども、林は全く醉狂人で、一度酒を飲めば本性を失つたのであります。矢島女史が一生を禁酒事業に擲つたのも、畢竟、彼女が少壯の時、苦い經驗を嘗めて、しみ〴〵と酒の害を痛感したからでありませう。

遂に彼女は、一人の女子、一人の男子を林家に殘し、乳呑兒なる一人の女子を懷にして、實家に歸ることになりました。これから、彼女の新生涯が開けたのであります。若し彼女が竹崎順子であつたならば、恐らくは猶ほ、林家に踏み止まつたでありませう。而し

て、遂に或は、その酒に亂れたる夫を、感化したかも知れませぬ。彼女は自ら『私は家庭の失敗者』と申しましたが、婦人ながらも骨があり、見識があり、强き我を持つ彼女は、餘計なる辛抱をするよりも、寧ろ一人で、苦痛を嘗むる方がましであると考へて、思ひ切つたのでありませう。

教育家としての新生涯へ首途

斯くて彼女は、東京に於ける兄直方の、病を看護せんために、明治五年四十歳にして、上京しました。これは必ずしも、兄の病氣を看護するのみの目的ではありませんでした。兎に角東京に出でゝ、新たなる運命を開拓せんと欲したのでありませう。婦人が四十歳といへば、明治初期に於ては、もはや初老の考へをなすべき時節であります。普通から申せば、或は老人と再緣して、老人のお守役となつて一生を終るか、若しくば、自分一人で手習の師匠でもして、靜かに世を渡るか、或は親類の家に寄食して、殘世を過すかでなければなりませぬ。

然るに彼女は四十歳にして、九州の田舍から、はる〴〵東京に出掛けました。これまで彼女の名は勝子でありましたが、上京の途中、長崎にて、船が港に並んでゐるのを見、勝子を楫子と改めたのであります。如何なる大きい船でも、楫がなければ船を行れません。楫は船にとつては第一に大切なものであります。その意味で、彼女も、その名を改めたのであります。

明治五年、上京後間もなく、彼女は、東京府の教員傳習所に入り、小學校の教員となりました。要するに、今日の言葉で言へば、速成の師範學校に入り、代用教員となつたのであります。その後明治十二年十一月、築地新榮教會で、洗禮を受けました。明治十三年から、築地新榮女學校の教師となりました。その時分から、米國婦人ツルウ女史と提携することになつたのであります。それからやがて、櫻井女學校を引受け、それが發展して女子學院となり、明治二十二年から、女子學院長になり、大正二年に至りました。大正二年から大正十四年六月永眠するまでは、豫て盡力しつゝあつた婦人矯風會のことに、專ら從ひました。

教育家としての女史の歴史も隨分長いものであります。ざつと申しますれば、四十年であります。而して後半の二十年は、最も有力にして、有效の時期であります。彼女は米國のミッションや、同國の人達と交渉もし、相談もし、遂にはそのために、何等の破綻をも生じませんでした。世の中に、外國人と協同の仕事をするは、隨分骨の折れることであります。新島先生なども、これには氣根を腐らしました。然るに女史は、平氣でやつてのけました。

教育家として、人を感化する點に於ては、その姉の竹崎順子に及ばなかつたが、しかも行政的手腕、外交的手腕に至つては、侮るべからざるものがありました。それは何れかと申しますれば、彼女は仕事の上については、よく忍びました。殊に土俵際になつて、踏みこたへる力は、すさまじいものでありました。

矯風會々頭たること三十五年

彼女は、常に愛を語りましたが、私の觀るところによれば、愛の人としてよりも、寧

ろ力の人として、尊敬すべきものと思はれます。それよりも彼女に於て雄々しとするのは、日本に於ける矯風事業に於ける、若しその事業の創立者と言ふことができぬならば、その事業の大成者である點であります。

彼女が同志と共に婦人矯風會を創めたのは、明治十九年でありました。それから會頭たることが三十五年間續きました。その間に於て禁酒、廢娼、若くは法制上に於ける一夫一婦の建白、その他婦人の地位を社會的に、經濟的に、道德的に向上させることにつき、あらゆる方便、あらゆる努力をしました。而して彼女を好む者も、好まざる者も、餘儀なく彼女に頼らねばなりませんでした。勿論今日、我が帝國の矯風事業は、まだ前途遼遠であります。然し矯風事業を、初めから今日に至らしめた、その殊勳者は、先づ指を女史に屈せねばなりますまい。

およそ、女性界に於ける仕事ほど、面倒なるものはなく、うるさきものはありません。私共には判りませぬが、女性達は、二人までは、兎も角仲良くすることができるやうでありますが、三人となれば、大概――必ずとは申しませぬが――問題が、起るやうであり

ます。

ノースクリフ卿の如きも、一生の機智を搾り、婦人の讀むべきものは婦人のみの手にて作るべしとの考へにて、そのデーリー・ミラーを創刊するや、婦人の主筆、婦人の編輯局長、婦人の部長、婦人の通信員、婦人の探訪員等、婦人一色で組織しましたが、忽ち社内が沸騰し、毎日の大組さへ間に合はなくなり、流石のノースクリフ卿も閉口し、遂にこれを全く改め、寫眞挿畫入り專門の新聞となし、婦人の手から男子の手に移して、遂に大繁昌を見るに至りました。これは一例でありますが、これにて婦人のみの共同事業といふのは、なか〳〵容易の業でないことが證據立てられます。

然るにこの平凡なる老婦人は、とにもかくにも三十五年間、婦人矯風會の會頭として、名に於ても、實に於ても、その中心勢力、中心人物でありました。時としては會員から辭職勸告に會つたやうでありますが、彼女はびくともせず、平氣で押通したのであります。その執着力の强いことは、とても氣の弱い男子の、夢にも企て及ぶところではありませんでした。

他を恃まず隨處に主と作る

而して彼女は何等外國語を解せざるに拘らず、七十四歳の折に、ボストン市に於ける、第七回婦人矯風會萬國大會に臨みました。また八十八歳の折に、ロンドンに於ける第十回萬國大會に臨みました。而してその翌年、卽ち八十九歳から九十歳にかけて、米國のワシントン會議に、自ら押して出掛けました。ワシントン會議は御承知の如く、世界平和のために、英吉利、亞米利加、日本、佛蘭西、伊太利等が會同して、海軍力の制限をなすための會議で、これは別段矯風會には、緣故がありません。然るに八十九や九十のお婆さんが、わざ〳〵出掛けて、そこに顏を出したなどゝいふことは、常識からしても、いさゝか驚かざるを得んのでありますが、彼女は、若い時から、横井小楠の『大義を天下に布かん』と言つた、世界平和思想の中に養はれた一人で、最後の花を、この旅行によつて咲かせようと決心したのであります。これから少しく、彼女の內的生活について、申上げてみたいと思ひます。

彼女は四十歳の後に、漸く小學教師たる教育を受けたのであつて、外國語を學ぶ機會がありませんでした。五十年間も外國人と親しくし、外國人と同じ仕事をなしつゝ、外國語を解せなかつたといふことは、不思議でありましたが、しかし彼女は平氣でやり通しました。のみならず、前にも申しました通り、三囘も外國へ赴きました。言葉の不自由などゝいふことは、彼女に於ては平氣でありました。

彼女は人を相手として世に立たず、己を相手として立ちました。それで自分の不便は自分で辛抱さへすれば差支ない、自分の貧乏は自分で辛抱さへすれば差支ないといふ考へでした。謂ゆる古人の、『隨處に主と作る』といふ考へだつたのであります。この點に於て彼女は、普通の女性と多く異つてをります。

如何に才情煥發せる女性でも、十中の八九までは、人に依るといふことを忘れませぬ。されど矢島女史は、人をして、己に依らしむることはあつても、己、人に依るなどゝいふことはなかつたのであります。從つて、彼女の生活は、極めて簡易、極めて質素、極めて儉約に、時間もかゝらず、勞力もかゝらず、金錢もかゝらず、煩悶もなく、心配もなく、

やつていつたのであります。言はゞ、ロンドンの街の眞中で行倒れても、ワシントンの下宿屋の隅で死んでも、一向頓着せぬといふ了簡があつたから、平氣で出掛けたのでありませう。

彼女は、神だけは恐れたのでありませうが、その他に、殊に恐れたものがあつたかどうか、恐らくはなかつたものと思はれます。彼女は實にすさまじい勇氣を持つてゐたのであります。それに彼女は非常に理性の勝つた人で、一時の感情や何かで動く人ではなかつたのであります。人から賞められたとて嬉しくもなく、惡口されたからとて腹が立つでもなく、一旦考へ込んだことは、如何なる困難があつても、長い月日の努力で、これをやり通すといふ執着力と、徹底力とを持つてをりました。飽きつぽいとか、忘れつぽいといふことは、藥にしたくもありませんでした。

戰闘的精神と鞏固なる意志の持主

何れかといへば、彼女は、最も戰闘的精神に富み、反對があれば、あるほど、愈〻強く

ありました。もとより意思の鞏固といふことは、男子のみの特有物のやうに考へてゐるものもあるやうでありますが、普通の場合はその通りとしても、少き場合に於ては、最も大いなる鞏固な意志の持主は、男性よりも、女性に多く見受けるやうであります。即ちナポレオン三世のユーゼニー皇后、ヴィクトリア女皇の如き、或は平政子、明智秀林院、北政所、春日局などゝいふ人々は、何れもその通りで、矢島女史なども、恐らくは、その仲間に入り得る一人であらうと思はれます。

私が知り得る限りに於て、矢島女史ほど人を喰つた人はなかつたやうであります。如何なる偉い人でも、彼女は物の數とも思ひませんでした。しかし彼女は、全く愛情を解せぬ人ではなかつたのであります。人の愛をも受入れる力もあり、人の好意をも了解する力もあり、また人の眞實と僞善とを見分ける力は最も多くありました。

而して、晩年には澁柹の澁味も、よほど脫けて、いゝほどに甘くなつてをりました。彼女は金錢を儉約する如く、時間を儉約し、時間を儉約するほど、己の精力を儉約し、何物でも決して無用に費ひませんでした。一錢一厘でも無駄に費はなかつた如く、一擧手一投

足も無駄には動かしませんでした。

彼女ほど努力して、しかも九十二歳までも長らへたのは、畢竟その精力を儉約し、勉强を調節したからでありませう。彼女は雄辯家ではありませんでしたが、座談は決して下手ではありませんでした。たゞその皮肉があまり辛辣で、彼女の方は不用意であり、平氣であつたかも知れませぬが、聽手にとつては、痛手を負ひ、閉口をもせざるを得なかつたのであります。

彼女は名筆といふのではありませんが、能筆で、手紙も善く書きました。しかし文學者としての素質は、あまり多くなかつたやうであります。これは寧ろ姉の德富久子の方が、立勝つてゐたやうであります。彼女はまた實行家でありましたが、大いなる經綸家といふのではありませんでした。この方もまた、恐らくは、德富久子の方が勝つてゐたかも知れませぬ。私の觀ますところによれば、彼女の晩年の仕事は、その一半は、姉たる德富久子の、背後の援助が與つて大いに力ありと思はれます。久子は、その愛する妹のために、何物をも惜みませんでした。

明治時代に於ける一の大なる女性

彼女は、よく愛を語りました。彼女を深く知らないものには、何だか鬼の空念佛の如く思はれたかも知れませぬが、彼女は、實にその安心立命を、キリスト教によつて得たことは、疑ひありません。彼女にも人に知られぬいろ〳〵の惱みがありました。しかしそれ等のことは、人間を相手とせず、神を相手として、一切その決算をつけたものらしく思はれます。

私は種々彼女を解剖して見て、何等特別に、こゝと申すところがありませんが、とにかく明治時代に於ける一つの大なる女性であるといふことを、識認せざるを得ませぬ。男子にもせよ、女子にもせよ、己自ら中心人物となつて、他人に依らず、自ら天職と信ずるところに向つて、不斷精進し、一生の中に、生存の意義あるだけの效果を殘すといふことは、實に貴き生涯と言はねばなりませぬ。而して彼女の如きは、正しくその一人であります。

第十　阿部景器の妻イキ子

神風黨と林藤次先生の感化

今日の若き方々は、恐らくは、その事さへも、御存知ないであらうと思ひますが、明治九年十月下旬、肥後の熊本に、大いなる騷動がありました。神風黨と申す一個の團體があつて、その數、僅かに百七十餘名にて、熊本鎭臺――今日にては第六師團といふ――營に突入し、これを燒き拂ひ、當時の司令長官種田政明、また當時の熊本地方長官安岡良亮、その他、重なる武官、文官を、或は殺し、或は傷け、大いなる波紋を時代に描き出しました。これは明治十年、西郷先生が打つて出でたる、十年の役の先驅と申して、差支ありませぬ。

しかしながら、その運動者、及び運動に關係した人々の心事については、西郷先生及びその下について働いた人々と、自ら趣が異つてをります。

熊本に林藤次といふ先生がありました。この人は、和漢、古今の學に達し、或は和蘭學などにも手を染めたといふほどであつて、誠に博識の大家でありましたが、その志は專ら、敬神、尊皇、攘夷の三つに存したのであります。敬神と申しましても一通りのことでなく、或は斷食をなし、或は齋戒をなし、或は長く久しく神前に立籠り、その一事を爲し、一件を定むるにも、悉く神慮を伺はないことはないといふほどの人で、維新以來、王政復古と言ひつゝ、却て外國の模倣のみを事とするのを、心外千萬のことゝ思ひ、しきりに神に向つて、我が迷へる國民の正しきに還らんことを求め、また獨り自ら斯く信じ、斯く行ふのみならず、苟も門下に來つて教を乞ふものあれば、悉く皆、敬神、尊皇、攘夷の三綱領を以て教へ導きました。

先生は容貌あがらず、甚だみすぼらしき人でありましたが、人に對する感化力は極めて偉大なものでありました。それは先生が、單に學者といふばかりでなく、自ら一種の豫言者ともいふべき素質を具へ、その言ふところのものは悉く皆な躬行實踐したから、それでその門人は、先生を單に尋常一樣の師と仰ぐのみでなく、殆ど、己と神との間の紹介

者であるかの如く、尊信しました。

神風黨の一員阿部景器

私が幼少の時には、よく彼の神風黨なるものと、途中で出會いたしました。彼等は、その風采から、容貌から、一見忽ち『彼は神風黨の一人である。』といふことを知ることができるほどの、特殊のいでたちをしてをりました。第一結髪であり、第二帯刀であり、而してその帯刀も普通でなく、長い刀を前に長く突き出して佩してゐました。

彼等は、毎日同志と相ひ集り、武を練り、文を講じ、たゞその時節の到來を待つのでありました。時節到來といつても、彼等自ら、その時節を定めるのではありません。一も神慮、二も神慮であり、それによつて、その一命を、擲つべき時を、定めんとするものでありました。

林先生は明治の三年に逝いたのであります。しかしながら、その門下には太田黒伴雄、加屋霽堅等といふ先輩連があり、しきりに同志の中心となり、林先生の志を奉じて、

これを實行せんとしつゝあつたのであります。その神風黨の中に、阿部景器といふ人があり、その妻にイキ子といふのがありました。今回の主題は、即ちこの阿部イキ子のことであります。

イキ子のことを語るには、先づ阿部景器のことから語らねばなりませぬ。阿部景器は、熊本藩士であつて、林先生の門人であります。明治元年戊辰の役には、官軍に從ひ、奥羽に赴き、戰功がありまして、凱旋の後には位地も祿も、共に進め加へられました。明治四年、久留米に於て騒動の起つた時に、その仲間の一人、鏡山紀伊が逃れ來つて、彼の家に隱れました。そのために彼は獄に投ぜられましたが、幾くもなく許されて家に歸り、明治七年には、熊本縣阿蘇郡野尻郷と申すところの戸長――今日の村長――を勤め、大いに村民のために愛慕されました。

明治九年四月、政府が廢刀の令を下してから、慨然として、その職を擲つて熊本に歸り、同志と共に爲すあらんとして、或は秋月、或は萩などに赴き、明治政府に反對の面々と、それ〴〵申合せをしたのであります。

式だけで歸つたイキ子の最初の結婚

さて彼の妻イキ子は鳥居喜新太の長女であつて、兄は直樹と申し、後には大阪控訴院の判事となりましたが、兄もまた嘗て神風黨の一人で、イキ子は稚きよりその敎を聽いてゐたのであります。イキ子に二人の妹がありましたが、その妹の一人は、同志の士に嫁ぎました。

初めイキ子は十六歲のときに、餘儀ない事情があつて、本庄――今は熊本市の一部――なる某に嫁ぐことになつたのであります。イキ子は、もとよりこれを好まず、またイキ子の母も同樣でありましたが、その媒妁人が鳥居家にとつて種々の世話をしてくれた人であるために、母も無碍に斷り兼ねて、遂に餘儀なく、その緣談を承知することになつたのであります。

イキ子は、固より進まぬ緣談でありましたが、きつと心に決し、兎も角も結婚の儀式だけ濟まし、それで媒妁者の顏を立て、その上にて、とまれかくまれ、爲すことを爲さんと

思ひ定め、さて愈々その家に至つて見ますれば、その夫たるべき人は、聞きしに違はぬ凡庸男子だつたので、結婚の初夜、彼女は寢室に端坐して、衣帶も解かず、夜の明くるのを待ち兼ねて、一家の人々が猶ほ眠より覺めない曉に乘じて、我が家に馳せ歸つたのであります。

母も首尾如何と心配しつゝ、結婚の席から歸つて、まだ一睡だもしなかつた時でありました。彼女は母の前に手をつき、『只今歸りました。』と申しますと、母も彼女の志に感激し、『もはや義理も立ち、顏も立つた。この上は御身の望に任せよう。』とて、早速離緣を申込んだのであります。

當時鳥居の家は、兄は東京に官遊し、イキ子は母を助け、妹等をいたはり、母と共に一家の經營を引き受け、それ〳〵日を送つてゐましたが、良緣があつて、遂に阿部景器の妻となつたのであります。

イキ子は、その理想的の夫を、阿部景器に得、これから、身も魂も、その夫のために捧げ盡したのであります。

兄との會見を遮つて夫の主義を護る

されば前に申しました如く、夫が久留米の鏡山紀伊を、その家に隱したといふことで、獄に投ぜらるゝや、時は夏の眞中でありましたが、イキ子は朝には食を斷つて、夫の出獄を祈り、夕には蚊帳を斥けて、板の間に帶をも解かずに寐てゐたのであります。姑はこれを見て、何とかして蚊帳の中に入れ、自分の傍に臥させようとしましたが、イキ子は夫のことを思ひやり、なか〱それには應じませんでした。そこで姑も、覺えず蚊帳の中から手を合せて、嫁の殊勝なる心掛に感激して、これを拜みました。

斯る次第であるのみでなく、彼女はまた、婦人には珍しき機智に富み、種々の方便にて同志の人々が、阿部を獄から出すについては、彼女もまたその中の一人として、なか〱うまく働きました。

或る日阿部が出獄の後、家に歸り、獨言を申すには、『欲しきものだが金がない。』と。イキ子はそれを傍より聞いて、『そはまた何事にや。』と訊ねました。阿部が申しますには、

『實は本日市中を散歩したるに、或る店に恰好の腹卷がある。如何にも欲しきものだつたが、存外の高價にて、とても手に入りさうもない。實は斯る武具を得たらば、いざといふ場合に、役にも立つべしと思ふが、貧乏の身では、致方がない。』といふことを、具に語りました。

幾くもなくイキ子は、我が衣類を典賣して資金を調へ、直に阿部をして、これを購はしめました。これはほんの一事でありますが、如何に彼女が、その夫のために盡したかといふことが、これにて判りませう。

當時、彼女の兄鳥居直樹は、明治政府に官して、その意見も純粹なる神風黨とは、やゝ趣を異にして來ました。彼は如何やうにもして、阿部を引き出さんと企て、種々手段をめぐらしましたが、イキ子はこれを知り、彼女の兄がそのために、わざ〳〵熊本に歸つて來た時にでも、遂にこれを遮つて、景器と會見させませんでした。これは、一度會見すれば、或は夫の志が變ずるかも知れないのを慮つて、斯くしたのであります。それが一度ならぬことでありましたので、兄の鳥居も、もはや詮方なしと諦めました。

神風黨の旗擧とその結果

さて愈〻神慮を仰ぎ、明治九年十月二十四日、(舊暦九月八日)同志百七十餘名の人々は、事を擧ぐることになりました。その前後から、阿部の家は、宛も同志の參謀本部の如き姿でありました。その出陣の時には、同志の面々がイキ子の家に集り、イキ子は、それ〴〵その手傳をなし、兼て用意しておいた酒饌を取り出し、その首途を祝つて、彼等を總集會所たるところに送り出したのであります。

その夜の働きは、何れも、珍しい成功でありましたが、衆寡敵せず、或は打死し、或は切腹し、或は逃れ、或は隱れ、それ〴〵各自の思ひ通りにやつたのであります。阿部は仲間と共に、熊本鎭臺の大砲營——今の砲兵聯隊——に打入り、それより步兵營に進み、苦戰しましたが、遂に事志と違ひ、同志何れも四散したので、彼は同志の一人石原と共に、二十八日の夜、まだ明けきらぬに、その家に歸つたのであります。イキ子は二十四日の夜、火の手が五ケ所に揚つたのを見て、夫等の武運の幸を祈つてゐましたが、その後の

模樣を人傳に聞き、自ら一死を決して、たゞその夫の行方を確め、然る後爲すことあらんとしてゐましたので、爾來一夜もまどろむことさへなく、たゞその樣子如何と心配してゐたのであります。

然るに前にも申す通り、十月二十八日の曉、緣の雨戸の端近に、『開けよ、開けよ。』と呼ぶ聲は、正しく我夫のそれと悟り、急に戸を推し開けますれば、阿部はそのまゝ家に入り、『一度は島原に渡らんとしたが、潮干のために船出でず、その後屢〻渡航を企てたが、官のために船止めせられて果し難く、そこで、神慮を伺ひ、再擧を計らんため、石原と伴ひ、只今歸り來つた。』と申しました。こゝに於てイキ子は、ともかくも夫の血に染りたる衣服を脱がしめ、これを直に屋後の竹林の中に埋め、夫をして床下に隱れさせました。

さてこれから、イキ子はいろ〳〵の方便をもつて、夫等の志を成さしめんと、盡力しましたが、なか〳〵思ふやうに、まゐらなかつたのであります。斯くて石原も、また阿部の家に至り、兩人にてかれこれ相談をなし、到底島原に渡るを得ずば、今一度三池越して、佐賀方面に出で、再擧を計つては如何となり、その方面の偵察もしましたが、當時熊

本の周圍は、道といふ道に、それ〴〵張番が出來て、蟻一匹すら脱けられぬ有樣であり、その中に官軍の捕手は、愈〻石原の家にまで搜索に來たことを知り、もはやこの上は、切腹の他なしといふことゝなり、そこで阿部、石原の兩人は、終にその覺悟をしました。

夫及び同志の一人と共に自殺す

イキ子は、石原の妻ヤス子が、我が家に偵察隊の來たことを急報したのを、阿部、石原に取次ぎ、兩人はこゝに於て阿部の家の床の正面にかけられた、皇太神宮の軸面に恭しく最後の禮拜を捧げ、各〻神前の御酒を取り下し、イキ子が捧げたる、白木の三方に載せた三組の土器にて、互にこれを汲み交し、石原は西に向つて、床の前に坐し、阿部はまたその次に坐しましたが、イキ子もまた隱し持ちたる懷劍を取り出して、阿部の傍に端坐しました。

阿部は、これを見て驚き、『御身が死んでは、母上を如何にせん。』と言ひましたが、イキ子は、『不孝の罪は申譯もありませぬが、ぜひにお後を追はせて頂きます。』と申して、その

懐剣を抜き放ちました。斯くて兩人は、双肌脱いで腹かき切り、我と我が咽喉を突き、イキ子は、また懐剣もて、その咽喉を突き、斯くて三人の死骸は、見事に、そこに横はりました。

これは明治九年十月三十日、阿部三十七歳、石原三十五歳、而してイキ子は二十六歳でありました。イキ子は豫め死を覺悟してゐました。それは彼女が殘した遺書によつて判ります。遺書は左の通りであります。

一筆殘しまゐらせ候。皆樣、御機嫌よくお暮し遊ばされ、目出度く存じあげまゐらせ候。こゝ元にて、景器、堅藏、その外大野(太田黑のこと)加屋、富永はじめ、事大いに仕損じ、皆々百六十九人、打死、切腹、私、女ながら夫の供仕り候。皆樣御嘆き下さるまじく候事。

一、姑上及登幾、並に千代喜事、宜敷宜敷兄上樣へ御願下さるべく候。御祖父樣の御法事は上げ物ばかり致申候。舊暦の九月八日騷動にて、頓着出來申さず候。何も何も申し殘し度事、山々に御座候へ共、私三日前から斷食いたし申候間、あやけのや

うにて筆とり出來申さず、先はこれまであらあら申上まゐらせ候。かしく。

世の中はいかにはかなき武士の
　弓矢とる身のならひと思へば

九月十二日　　　　　　以幾

　卿方御母上様

末ながら皆々様によろしく、御病氣なきやう御用心、第一に願上げまゐらせ候。またかしく。

此歌は兄上様へ御遣し可被下候。夫と一緒に自害いたしまゐらせ候。

我が夫の亡魂まてよ二世かけて
　ともにわたらむ三つの河波

まてしばし我れも大和の女郎花
　などなき國の粟をはむべき

同じく十四日

主義に殉じ夫に殉じたる烈婦

こゝに十二日とあるのは、舊暦の九月十二日にて、新暦十月二十八日であります。されば彼女は、夫が事破れて歸宅の日から、もはや一死を覺悟したのでありませう。男でも女でも、死するといふことは、珍しくもなく、難しくもなく、また必ずしも賞むべきことでもありませぬ。

しかし、イキ子の如き、自ら信じたるところのために、また自ら愛する夫のために、即ち主義に殉じ、夫に殉じたのは、如何にも古の烈婦と申しても、これ以上のものはあるまいと思はれます。

凡そ人の死するといふことは、さほど難しいことではありませぬ。新聞の三面雜報を見ましても、その例は澤山あります。しかしながら、それはほんの一事の發作的であり、言はゞ發狂的の死であります。されどイキ子の如きは、その主義が果して正しきか、否かは、姑く別問題といたしまするも、その主義のために殉じたることは、決して間違ひありませ

ぬ。彼女は生れながら神風黨の主義に養育せられました。彼女は單にその夫を夫として尊んだばかりでなく、同主義者として尊んだのであります。彼女の一生は單に獻身的と申すばかりでなく、主義のために、即ち詳に言へば、敬神、尊皇、攘夷のために盡したのであります。これを思へば、私共は、彼女の死に對し、否彼女に對して、格段の同情を傾けねばなりませぬ。

第十一　乃木大將夫人靜子

人間味多分の乃木大將の一生

京都の桃山御陵の下には、乃木大將夫婦を神樣として、祀つてあります。桃山御陵に參拜する人々は、概ね乃木大將夫婦の神靈に對して、それ〴〵敬意を表します。申してみますれば、乃木大將は畏れながら、明治天皇によつて尊く、靜子夫人は、乃木大將によつて尊いと申しても、差支へなからうと思ひます。私もよく乃木大將を知つてをります。世間ではあまりに大將を理想化して、初めから神のやうな人に申しますけれども、決して左樣ではありませぬ。

大將は人間であり、また終りまで人間でありました。もとより初めから、その氣立は高く、その意志は強く、その忠孝の心は篤くありましたが、しかし若い時には、箒にも棒にもかゝらぬほどの、脫線的行動を逞しくした人でありました。人並といふよりも、寧ろ人

並はづれての道樂者であつたと申しても、差支へありませぬ。それがだん／＼年と共に淨化して、彼が如き立派なる人となられたのであります。

初めから立派なる乃木大將であつたならば、靜子夫人の心配も、さほどではなかつたのでありませうが、それはなか／＼手に負へない始末でありました。

靜子夫人は、薩摩の人であります。その實家たる湯地家と申すのは、本來立派な家柄であつたさうでありますが、夫人の父、定之氏の時に、藩主の怒に觸れたことがあつて、中途から醫者となり、隨分微祿したのであります。夫人の兄には、定基、定監等と申して、兄弟共に勅選貴族院議員になつた人があるほどで、何れも立派な人々でありますが、靜子夫人は、その家の末子であつて、七番目に生れたので、その名をお七と申しました。

その生れたところは、今日でも殘つてをりますが、屋敷が三十坪で、誠にいぶせき家に產れたのであります。時は安政六年十一月二十七日。

靜子夫人の教養とその學藝

夫人は、生れながらにして、なか〳〵の勝氣の女であつて、常に男の兄弟達の爲ることを、見眞似、見倣つてをりまして、しきりに學問したいといふことを、その父母に願ひました。

而して、明治元年十歳の時に、植木といふ老人の許に入門し、手習ひとか、女大學とかいふものを學んだのであります。それから明治三年、十二歳の時には、鹿兒島にも變則の女學校が出來たので、そこに轉じました。その後明治五年、十四歳の時に、長兄定基氏が米國より歸朝して、役人となつたので、湯地家も家を擧げて東京に轉居し、赤坂區榎坂町にその居を構へました。

そして、明治七年、十六歳の時に、麴町女學校に入學して、正式の初等教育を受けることになつたのであります。夫人は鹿兒島で勉强した甲斐があつて、何一つ人に負けることはありませんでしたが、如何にせん、鹿兒島言葉にて、それだけには、よほど困つたさうであります。『鹿兒島で勉强した甲斐があつて、何も皆さんに負けるやうなことはございませぬが、唯だ困りましたのは言葉で、先生のおつしやることも判れば、皆さんの言ふこ

とも、よく解し得られますが、質問を受けた時、用事のある時に、こちらから言はねばならぬ場合に、思ふことを充分に申しても、私の言ふことが、皆さんに通じないことがあるらしいので、そのために心苦しく思ふことが度々でございました。』と、よく申されたさうであります。

夫人は普通、婦人の教養たる生花とか、禮式とかの外に、繪畫をも學び、また琴なども學んださうでありますが、しかし私の觀たところでは、乃木夫人は、別に學問上、殊更に取得のある才媛であつたとは、思はれませぬ。先づ並の上であり、或は並くらゐであつたかも知れませぬ。

然るに明治十一年八月、良縁あつて、陸軍中佐乃木希典氏と結婚することになりました。乃木氏は當時三十歳にて、歩兵第一聯隊長でありました。今日では三十歳の聯隊長などは、どこを探しても見當りませぬ。三十歳では中隊長が關の山でありませうが、當時は若い者が繁昌した時代でありまして、しかも乃木氏の如きは、明治四年に二十三歳で、既に陸軍少佐に任ぜられてをりました。

結婚式に花婿は營所より歸らず

この結婚については、種々の事情があつたらしく考へられます。乃木大將の母堂は、謂ゆるしつかり者であつて、乃木大將の家が、微祿して長府にある時には、米を碾き、それにて鹽煎餅を造り、それを家の小者に馬關まで持ち運ばしめて賣り、家計の足としたといふほどの人にて、大將は、この母堂の前には、子供同樣でありました。從つて大將の先妻も、そのために居着かなかつたさうであります。

そこで大將もひそかに思ふところあり、結婚を勸められても『長州の女は嫌ひである。薩摩の女ならば、嫁にせんこともない。』などゝ、でたらめを言つたさうであります。大將の母堂はそのために、内々手を廻し、薩摩の方面を探索しましたが、當時大將の副官伊瀬地大尉が、薩摩の人であり、その親類に湯地家の女があり、遂に伊瀬地氏が仲立となつたのであります。

そこで大將も今更斷るにも斷り切れず、結婚することになつたさうであります。當時大

將は家を外に飲み廻つてゐたので、母堂もそれを心配し、せめて嫁でも迎へたならば、その素行も直らんとして、斯く取計つたのであります。そも〳〵乃木大將が、斯く放埒したことは、單に若氣の至りといふのみではありませんでした。大將は明治十年の役には、小倉から聯隊を率ゐて、熊本城を救ひに出掛けましたが、途中の激戰にて、聯隊旗を敵に奪はれ、そのことを非常に口惜しく思つて、終に明治天皇のお伴をする時、遺言書の劈頭に、そのことを書いてをりますほどであります。されば、明治十一年の當時は、記憶も新たで、胸中悶々の情に堪へず、強ひてそれを酒盃遊興の間に排し去らんとしたものだと思はれます。

さて、愈ゝ結婚となり、副官の伊瀬地氏を始め、双方の親類も集り、花嫁も乘り込んで來ましたが、待てど暮せど花婿はやつて來ません。使を營所に立てれば、『今日は急用があるゆゑ、片附き次第に歸宅する。』といふことで、待ちも待つた、定刻より遲るゝ五時間。しかも再三使者を立てゝ、漸く花婿が歸つて來たといふことでありますが、花婿は花嫁には目もくれず、血氣熾んの同僚と汲み交し、遂に杯盤狼藉の間に、前後も知らず、高鼾で

寐てしまつたといふことであります。

これまで湯地家の末子で、一家の中に、最も愛せられてゐた乃木夫人は、全く違つた世界に入つたのであります。當時薩摩と長州といへば、藩閥の兩頭で、しかも今日とは違ひ、睨み合ひの姿でありました。薩摩の女が、長州の男に緣附くといふことも、一風變つてをりますが、その中でも乃木家は最も變つてをります。

姑本位の乃木家、一年有餘の夫婦別居

乃木家は、姑萬能の家庭で、嫁などには誰も目をくれるものがありませんでした。男女別ありと申しますが、それも程度問題で、親孝行の將軍は、出入りに母堂にこそ手をついて挨拶されるが、夫人などは、全く眼中になかつた模樣であります。そして夫人が、如何に戰々兢々としてをつたかは、嘗て、その姉馬場サダ子夫人に向つて、『お姉樣、何と申してよろしうございませう。私くらゐ、うつかりしてゐた者もございますまいよ。私は嫁いで、三年目までといふものは、良人が跛であることも、それから片眼であることも知

らず、それに少しも氣が附かないのでございました。』と、申されたほどでありました。
なるほど乃木大將は、西南戰爭に負傷して、一方の足が少し跛であり、また片眼は生れながらで、母堂壽子も同じやうに、また將軍の二男保典氏も同樣見えなかつたとのことであります。しかし、將軍は入れ眼をしてをられたので、斯く申す私なども、屢〻相見て、その片眼であつたことに、別に氣附きませんでした。

何れにしても、この通りであつて、この間に前の湯地家のお七、今の乃木靜子夫人の心配といふものは、一通りではありませんでした。乃木夫人は初めから、女大學をもつて、身上とした人であります。しかしながら本來の勝氣ではあるし、殊に結婚以來幾年經つても、夫の愛を感じるではなし、しかもその姑は、がみ〳〵として、なか〳〵のむづかしやであり、殊に子が生れても、そのために乃木將軍は眉の毛一本も動かすといふことなく、內心はともかく、外面殆ど無頓着の姿であつたから、自然靜子夫人も、その反抗心といふほどでもないが、姑に向つて、偶〻一言二言の口答へなどをしたかも知れませぬ。
元來、乃木大將の素行の悛まらんことを希つて迎へた嫁でありますが、結婚以來、

更に悛むるところもなかつたので、母堂はこれは畢竟、靜子夫人が、夫に對する仕打が宜しくないからだ、また夫が靜子を好まぬからだといふやうに考へ僻み、明治十五年の初めには、母堂は愈〻、靜子と同居を好まぬと、公然申出になりました。何事も母堂本位である乃木大將は、一議にも及ばず、別居せしむることになり、乃木夫人は明治十五年六月頃、勝典、保典の二幼兒を伴つて、別居しましたが、十六年十一月になつて、漸くまた本邸に歸ることになつたのであります。

母堂は、この別居を機會に、靜子夫人を離別し、別に大將の氣に入る女を迎へんと心掛けましたが、大將は命にかけても離別せぬと公言したので、遂にこのことは止んだのであります。

獨逸留學を一轉機として將軍の素行一變

さて歸邸した後にも、嫁姑の間は、必ずしも良好ではありませんでした。母堂はいつも三度の食事毎に、多少の酒を飲み、また少しく不滿あればその量を增し、少しも酒を飲ま

ぬ夫人に、强ひて盃を與へ、それを飲まねば更に毒舌を吐くといふことで、いぢめぬかれましたが、夫人は豫て覺悟してゐたので、必ずそれに辛抱しました。然るに明治十八年五月、陸軍少將に任じ、歩兵第十一師團長に補せられたる乃木將軍は、十九年十一月には獨逸留學を命ぜられ、斯くて明治二十一年六月十日に歸朝しましたが、大將の生活は全くこの獨逸留學を一轉機として、殆ど別人となりました。卽ち歸朝以後の乃木將軍が、今日世人が崇敬する、乃木將軍であります。將軍が如何にして斯くその生活を一變したか、將軍の飲み朋輩は、將軍が歸朝したからとて、歡迎會を開きましたが、將軍は感ずるところありと申して、茶屋や酒樓に行くことを謝絶しました。何れも一時のことで、撚がもとに還ると待ち設けてゐた人々は、月に將み、年に就り、愈々益々道心堅固の乃木聖人が出で來つたので、齊しく驚いたのであります。

しかし、その後の乃木將軍の生涯も、決して平坦無事ではありませんでした。將軍はその義にあらざれば進まず、その道にあらざれば居らず、これがために屢々衝突しました。そのために後の烏は先となり、將軍の後進は、だん〳〵將軍を追ひ越してゆくのでありま

した。二十一年、將軍は四十歳にして、歸朝いたしましたが、二十五年二月には休職となり、また三十一年二月には臺灣總督を免ぜられ、同時に休職となり、十月再び十一師團長に補せられましたが、三十四年五月にはまた休職となり、爾來多く夫婦共那須石林の別莊に住み、愈ゝ那須野の百姓となりました。ところが明治三十七年日露戰役に際して、五月第三軍司令官に補せられ、爾來四十年一月には學習院長になり、斯くて大正元年九月十三日午後八時、乃木大將は六十四歳にて明治天皇に殉じ、夫人は五十四歳にて、夫に殉じたのであります。母堂は、乃木大將が臺灣總督中に、臺灣に於て沒しましたが、晩年の夫婦は、誠に淸き生涯、謂ゆる枯淡生涯でありました。靜子夫人も『忍べる者は幸なり』で、誠によく忍び通したのであります。

女大學の教訓を守つた夫人

靜子夫人が、その姪某夫人に與へた書中には、

『何卒申すも疎に候へ共、女大學をよく〳〵御覽相成度、もし御手許に御座なく候はゞ、

茲許に持合せ候ゆゑ、何時にても御用立可申候。私共は二十年間も姑に仕へ候けいけんも御座候に付き、よくよく御噺し申度候。その内よく御分別の程、肝要に存じ參らせ候。』云々とあります。

女大學なるものが、今日に於ては、時候おくれのものであることは、誰もよく知つてゐることで、私は誰に向つても、女大學を推薦いたしませぬ。たゞ如何に靜子夫人が女大學の教訓を、その文字通りに守りたるかを知るに足る例として、これを擧げておくのであります。

古き道德にしろ、新しき道德にしろ、よくこれを行ふものは幸なりで、如何に新しき道德でも、これを行はぬものは不幸であります。何人も己が信ずるところを行つてゆくのが、人間の幸福であります。幸福とは人から貰ふものでもなく、人に與へるものでなく、我自らの心に滿足することであります。私の知るところでは、乃木大將は餘りに人間味が多すぎるほどの人であつたと思ひます。それで情に負けぬために、故にその反對へ、反對へと進んで行つたので、それで時には、餘りに矯め過ぎたといふ結果が生じ來つたの

かも知れませぬ。
乃木大將は決して生れながらの乃木大將ではなく、造物主の作つた乃木を、自分の意志で、できるだけ作り變へんとしたのであります。しかし如何にこれを矯めても、直しても、隱しても、飾つても、本來の面目は不用意の中に現れてをります。夫婦の間に、そのことがいつ頃了解し得たか、その同棲生活は、殆ど三十四五年になりますが、少くとも後の十四五年には、立派に双方の了解ができたのでありませう。
而して、夫人も或る程度に於いては、將軍の感化を受けて、第二の乃木さんとなつたのでありませう。元來鹿兒島といふところは、賢妻、良母の生產地といつて差支ありませぬ。悉くとは申しませぬが、鹿兒島婦人は、なかなか身嗜みがあり、辛抱強くあります。それに乃木夫人は、乃木將軍の如き、立派な教師の下に訓練されたから、自然立派な婦人となられたのでありませう。

二兒の戰死と將軍夫妻の覺悟

その乃木將軍夫婦が、何物にも代へがたき勝典、保典の二子を失つたるが如きは、大將にしろ、夫人にしろ、如何にこれがために苦しかつたでありませう。大將が勝典の死んだときに、『勝典名譽の戰死喜べ。』といふ電報を夫人に發した如き、如何にも將軍の面目が活描せられてゐます。次いで、『勝典の葬式出すに及ばず、予と保典との柩と共に――親子三人の葬儀を同時に執行ふことにすべし。』と申し送つた如き、如何にも將軍の面目が活躍してゐます。勝典の死後、その次男保典を安全な方面に轉勤せしめんと計つた者がありました。しかし將軍は固くこれを辭したのでありました。然るに果して保典も、また名譽の戰死を遂げたのであります。

乃木家の晩節は誠に光つてをりますが、しかし、將軍夫婦にとつては、隨分淋しかつたでありませう。この寂寞の極といふわけではありませぬが、將軍は愈〻覺悟を決め、それぞれ遺言書を書いてをります。その遺言書の中には、靜子夫人は後に殘るものとして、夫人に對する、それぞれのことが掲げてあります。しかし、いかで夫人がそのまゝ生き殘り申すべき。そこで愈〻大正元年九月十三日午後八時、夫婦相對して、共に先帝の御後を追

ふことになつたのであります。私は、今更その自殺の次第を、詳しく語ることはいたしませぬ。

かつて大正元年八月二三日頃、將軍は夫人と話してをられたが、夫人は將軍に對して、

『陛下におかせられても、萬一のことはございますから――宅の跡目のことなども、しつかりしておいて頂かなくては――』と言はれたのに、將軍は、もはや當時死を決してをられたので、

『何も心配することはない。しかし、心配になるやうなことがあつたら、御身も己と共にあの世に旅立つてはどうか。』と冗談交りに言はれました。夫人は笑つて、

『いやでございます。これから芝居も觀、食べたいものもどつさり食べたいと考へてゐるのですから。』と言はれたさうでありますが、それは一時の冗談で、遂に夫人も一緒に逝くことになりました。

夫人が、いつ頃からその覺悟をされたのか、判りませぬが、大將の覺悟されたのを感知した時には、夫人もその決心をされたのでありませう。決して大將の方から勸めたのでな

く、夫人自ら進んで斯くせられたことは間違ひありませぬ。

夫人は橡色麻の小袿を着け、柑子色の袴を穿ち、白色の麻衣、白木綿襦袢二枚を着し、白縮緬の帶を結び、白足袋を穿ちて、小机の北方に、斜に大將と對して端坐し、懷劍(月山作)を以て、胸部心窩を小袿の上より貫き、白鞘を左側に置き、頭部を正しく大將の方に向けて、俯伏絕息し、些の紊れたるところがなかつたとのことであります。而して、その傍に殘した夫人の辭世は、

いでましてかへりますの日のなしときく
今日のみ幸に逢ふぞ悲しき

といふ一首でありました。

第十二　靜寛院和宮樣

竹の園生に生れまして忍苦の御一生

本年（昭和二年）は、和宮樣の五十年忌とて、靜寛院宮奉讃會等も出來、それ〴〵宮樣についての、記念會等の催しもあるさうであります。斯くの如く、世間で宮樣のことを、かれこれと尊崇し申上ぐるやうになりましたのは、誠に喜ばしきことであります。

私が、宮樣の御事蹟につきまして書いたのは、大正五年の春、『大正の青年と帝國の前途』と申す論文中でありまして、その第三十一節に、『日本女性の典型』と題して、宮樣が實に、我が大和民族の女性を代表し、その手本として、崇め尊ぶべき御方で在すことを、陳述したのであります。必ずしも、それが動機となつたといふのではありますまいが、その後十數年間に、世間でも追々と、斯くの如き立派なる女性が、我々の眼前に在したことに氣がついたのは、誠に宮樣の御爲と申すばかりでなく、我が國民の風敎の上に

も、喜ばしき次第であります。

宮樣の御一代は、如何なる巧妙の小說家も、恐らくは書くことのできないほど、人生の謂ゆる悲劇なるものを含んでをります。含んでと申さんよりも、寧ろ、悲劇そのものであります。

身は竹の園生の中にお生れ遊ばし、仁孝天皇を御父君に持たせられ、孝明天皇を御兄上に持ち、明治天皇を御姪に持ち給ひ、およそ尊きといへば、人間としては、これほど尊き御方はないのであります。然るに、その御方が、普通我々平民さへも、享け得るところの家庭の樂しみも、女性としての平安なる生活をも、享け給ふことができず、殆ど長くもなき三十二年を、憂ひ、哀しみ、惱み、苦しみの間に送り給うたことは、如何ばかり御同情申上げてよきか、私は宮樣のことを想ひ出す每に、先立つものは先づ淚であります。

然るに斯くの如き悲劇の中にあつて、よく女性の本分たる貞節を完うし、また尊き御位置に相應したるだけの、大なる責任をば、よく御辨へ遊ばし、皇室のため、國家のため、または、御降嫁遊ばしたる德川氏のため、御自身を除いた、あらゆる他のために、獻身的

生活を過し給ひ、犧牲的一生を送り給ひたる、その雄々しき御心は、何と申上げてよろしきか、私には殆どその言葉が、見出されないほどであります。

公武合體論と皇妹降嫁の奏請

そもそも宮樣は、弘化三年閏五月十日、仁孝天皇の第八皇女として、その母方橋本邸にて降誕遊ばされました。御母は、權大納言橋本實久の息女で、經子と申し、後には觀行院と稱して、宮樣に從つて東に下りたる方であります。

斯くて、宮樣は六歲の時に、有栖川宮に入門遊ばされ、てにをはを學ばせ給ひ、同時に幟仁親王の御子、熾仁親王と御婚約を結ばれました。

當時の時世は、改めて申すまでもなく、維新大改革の序幕で、尊王攘夷論の、最も流行したる時節でありました。こゝに於て幕府側も、朝廷側も、ともかく日本のこの國家を維持して行くには、朝廷と幕府とが、合體遊ばさるゝより他はないといふ意見で、こゝに公武合體論なるものは出で來りました。

さて、公武合體するについては、兎に角、朝廷と幕府との間を親密にせねばならず、それについては、將軍家に、朝廷より皇女の御降嫁を願ふ他はないといふことになり、盛んにその運動が始まつたのであります。それについては、京都方では、後には討幕論の急先鋒となられた、岩倉具視公等が、最も熱心に畫策し、奔走せられたのであります。

斯くて萬延元年、和宮樣十五歲の時に、京都所司代の酒井忠義は、江戸老中からの奉書を奉つて、御降嫁を奏請いたしました。然るに孝明天皇は、御許可あらせられなかつたのであります。元來、幕府の方から京都に入內したのは、二代將軍秀忠の女和子、卽ち後水尾天皇の中宮東福門院の外はありませぬ。また朝廷の方からは、七代將軍家繼に、靈元天皇の皇女、八十宮御降嫁のことが、仰せ出だされたれども、家繼の早世によつて、その事は行はれませんでした。

板挾みとなりたる孝明天皇の御苦境

されば、愈〻皇女を關東に降嫁遊ばさるゝといふことは、德川幕府始まつて以來のこと

であり、否遡つて言へば、鎌倉幕府開設以來のことであります。主上が容易にこれを許し給はなかつたのも、無理はないことであります。然るに所司代の酒井忠義は、更に關白九條尚忠について、重ねて御降嫁の勅許を請願しました。陛下は更に宸翰を、九條關白に降し、幕府の願を斥け給ひましたが、幕府は更に、陛下の思召に從ひ、攘夷を實行するといふ條件まで持ち出して、御降嫁を切願いたしました。

　これほどまでにも幕府が、至誠を披瀝して、勅許を願つたので、孝明天皇も、今は致方なしと思召し給ひ、和宮の御生母に當らせ給ふ橋本觀行院の兄弟、橋本實麗をして、宮に御降嫁を勸め給ひましたが、宮は固より、世界の違つたる江戸などに、下らせ給ふことを喜び給ふわけはなく、たゞ一途に、『さて〳〵驚き入りまゐらせ候。この儀は恐れ入り候へ共、幾重にも御斷り申上げ度願ひ參らせ候。』との御上書をもて、御斷り申上げられました。

　こゝに於て、孝明天皇には、御妹たる宮からは、不承知を述べ給はせられ、江戸からは、如何なる朝廷の御命令にも服從し奉るから、是非ともと請願され、全く板挾みの姿

に立ち給ひ、今は詮方なしとて、和宮様に代ふるに、皇女壽萬宮を以てせんとの聖慮を、内示し給ふに至りました。壽萬宮は孝明天皇の皇女にして、安政六年三月の御誕生であれば、漸く十七八ヶ月くらゐの御齢であります。まだ襁褓の中に在す姫君を、將軍に御降嫁とは、よく／＼御困却の末に、思召立たせられたことであります。

かほどまでにも、孝明天皇が思ひ込ませ給ひたるについては、和宮様にも、もはや致方なき場合に迫つたのであります。しかも、孝明天皇は、九條關白への宸翰には、若し和宮の御降嫁もできず、壽萬宮をもて、これに代ふることも行はれざるに於ては、『關東に對し、信義を失ひ候譯柄、斷りのために譲位も致すまでにも一決候。』との御言葉にて、實に陛下は、非常なる苦境に陥り給ひました。

和宮命を奉じて遂に關東へ御下向

こゝに於てか、和宮様にも、もはやこの際は致方はないと、思召し給うて、愈々御降嫁の命を奉ずる旨を奉答せられました。これが宮様の御歳十五、萬延元年八月十五日であ

ります。それから有栖川宮家より、以前の婚約辭退の出願となつて、こゝに愈〻公に皇妹降嫁の勅許が出たのが、同年十月十八日であります。斯くて宮樣は、文久元年十月二十日、京都御發輿、中仙道を經て、十一月十五日江戸御着、淸水邸に御入りあり、十二月十一日には、江戸城に御入輿あり、文久二年二月十一日、愈〻御婚儀を擧げさせられました。時に宮は御歲十七、而して十四代將軍家茂もまた十七歲でありました。宮は前に記したる如く、弘化三年閏五月十日の御出生でありますが、將軍は同じく閏五月二十四日の出生であります。

十七歲の若夫婦の方々は、如何なる緣にや、誠に伉儷睦まじくありました。しかしながら宮樣は、その夫とし給ふ將軍と、同棲遊ばされた期間は、甚だ少かつたのであります。文久三年三月には將軍は上洛して、六月に江戸に歸りました。翌元治元年には、正月に上洛して、五月に歸りました。而して、慶應元年五月より、將軍は、長州征伐のため、江戸を發して、上方に滯在し、翌慶應二年七月二十日、二十一歲にて、遂に大阪城中に逝きました。

されば短き結婚の生涯に、より短き家庭の樂しみを得、しかも二十一歳にして寡婦になられた宮樣は、その年十二月十九日に御髪を薙り、靜寛院宮と稱せられました。斯くて十二月二十五日には、杖とも柱とも賴み給ひし、孝明天皇は崩御遊ばされました。斯る次第でありますれば、如何に宮は、世をあぢきなく思ひ給うたことでありませう。

その翌、慶應三年には、將軍慶喜の大政返上となり、その翌、明治元年には、伏見、鳥羽の變が起り、錦の御旗は堂々と關東を指し、官軍は、東海道、中仙道から攻め下つて來ました。

宮樣もまた東京に對する恩人

この時に於て、宮樣は如何にせられたのでありませう。若し宮樣が、尋常一樣の婦人であつたら、何の造作もなく、京都にお歸り遊ばされたのでありませう。しかしながら、自分は既に先帝の勅命によつて、德川家の婦となりたれば、どこまでも、一身の安危を外にして、德川家のために盡さねばならぬといふ御誠心をもて、宮樣は凡ることに、御骨折

り遊ばされました。

世間では、江戸城の攻撃中止は、勝、西郷の會見によつて、定つたものと申してをります。眞にそれに相違ありませぬが、しかも宮様が、如何にこの間に御働き遊ばされたかといふことは、宮様の御直筆の日記が殘つてをりまするから、それを讀めば、自らその事が明かに解るのであります。斯る大いなる事が、二十三歳ばかりの宮様によつて行はれたといふことは、不思議のやうでありますが、しかも宮様が、一心一向、國のため、家のために、誠心をもて盡し給ひたることが、自然に斯る結果を惹き起したのであります。

若し、東京市民が、西郷南州、勝海舟等を恩人と思ふならば、私は、和宮様もまた、東京の恩人と思はねばならぬと信じます。のみならず、朝廷が幕府に對して、手厚く遊ばし、維新の歷史に、誠に有難き光明を添へたのも、悉皆とは申さぬが、半は宮様の嘆願、宮様の御取成しが、與つて力あるといふことを、否定できぬのであります。

大なる事を成すのは、必ずしも大なる策士とか、政治家とかいふ人ばかりではありませぬ。苟も、誠心あるものが、その位置にあり、自然、誠心に從つて行ひたることは、彼

にも、我にも、普遍平等に、幸福の結果をもたらすものであります。宮樣のことも、卽ちその通りであります。

斯くて、宮樣の御骨折によつて、德川家も駿河にて、七十萬石を賜り、德川龜之助――公爵家達――の相續もでき、總ての事が、宮樣の願ひ通りに落着したから、明治二年正月、宮樣は東京を發し、京都にお歸り遊ばされましたが、明治七年、二十九歲の御時、また東京に御移轉になり、麻布の邸に御住居遊ばされました。而して明治十年八月、脚氣の御氣味にて箱根塔ノ澤に轉地遊ばされ、九月二日終に薨去遊ばされました。御年三十二歲。御遺言によつて、增上寺の昭德院廟所、卽ち家茂の廟所に葬り奉りました。

感慨無量なる宮樣の御歌の數々

如何に宮の御生涯が短くあり、而して悲しくあつたかといふことは、極めて乾燥無味なる、私がこれまでお話したことでも、尙ほ察するに足るものがあると信じます。

宮樣のことについては、御日記があり、また消息文もありますが、最も宮樣の御心を伺

ふに足るものは、御詠歌であります。御歌は、一生御嗜みあつたものとみえて、御秀歌も少くないやうでありますが、その中でも御述懐の歌などには、何ともいへないものがあります。例へば、

　　惜まじな君と民とのためならば
　　　　身は武藏野の露と消ゆとも

　再びはえこそ歸らねゆく水の
　　　　淸き流は汲みて知りてよ

等、これが二十歳未滿の宮樣の御歌であらうとは、誰も思ひ及ばないでありませう。
また御降嫁のみぎり、美濃國呂久川御渡りの節、一枝の紅葉を御覽あらせられて、御詠み遊ばした歌に、

　落ちてゆく身と知り乍らもみぢ葉の
　　　　人なつかしくこがれこそすれ

といふのがあります。

而して、將軍家茂の薨去を悲しませ給うた御歌の中には、今尚ほ讀んで斷腸の思ひ、胸に迫り來るものがあります。

三つせ川世に柵のなかりせば
　君もろともに渡らましものを
空蟬のから織り衣なにかせむ
　錦も綾も君ありてこそ
世の中の憂てふ憂を身一つに
　とりあつめたる心地こそすれ

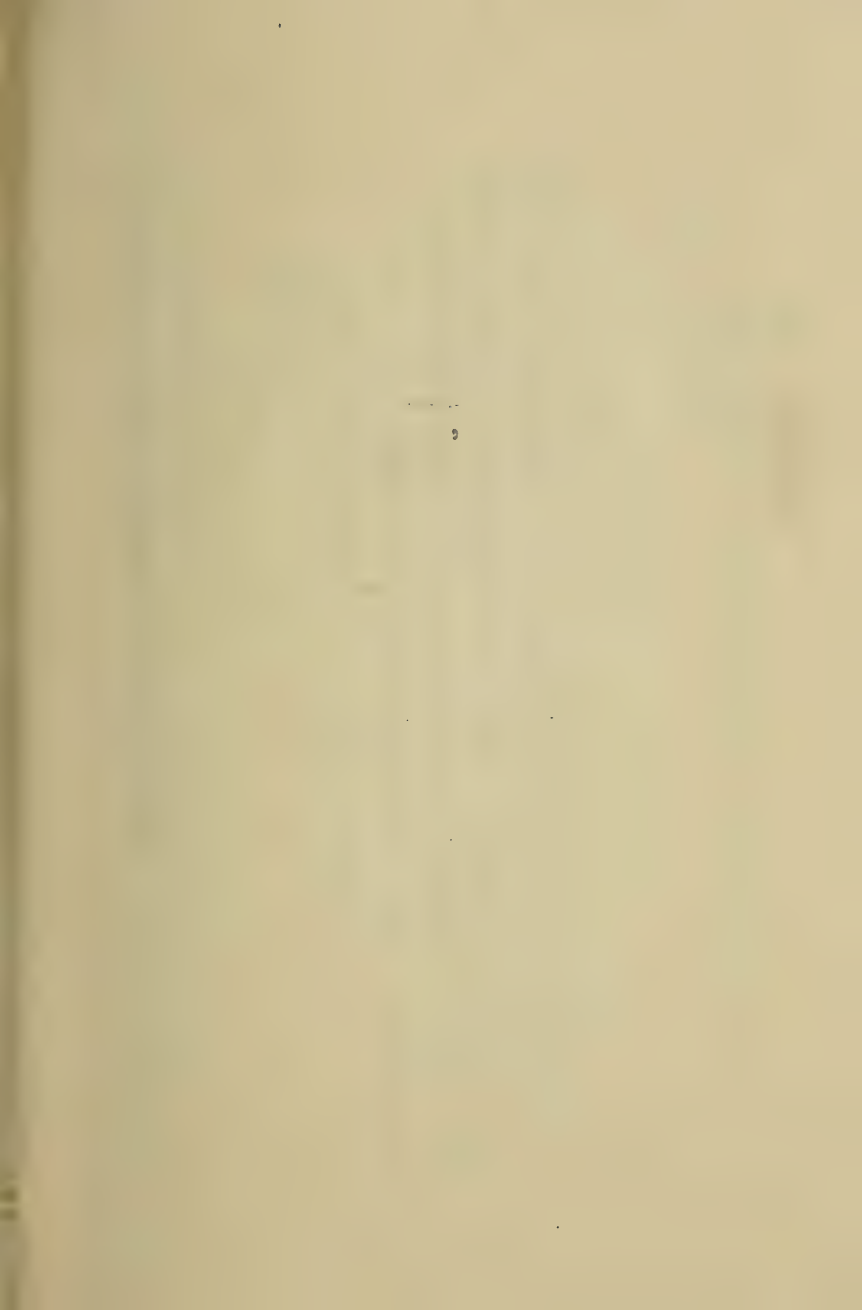
またその御述懷の御詠に、

數ならぬ身こそ辛けれかゝる世も
　君が力になるよしもなき
今更に人をも世をも恨みまじ
　數ならぬ身をひとりかこたむ

といふのがあります。而して懷舊の御題にて詠ませられた御詠に、

老いゆかばさぞ思出の多からむ
　いまより早も昔しのべば

といふ御歌があります。

しかも、宮樣は、遂に老に至り給はぬ、三十二の靑春を以て逝き給ひました。實に宮樣の御一生は、悲劇でありました。而して宮樣は、婦人の大切なる、貞操を完うし、己のために生活せず、他のもの丶ために生活するといふ、奉仕的精神、しかも哀んで傷らず、恨んで怨らず、運命に忍從して、よくその守るところを徹底するに至りては、實に千古を貫き、萬世に亙つて、我が大和民族の典型たる女性と申上ぐべき御方の、お一人であると信ずるのであります。

附錄

昭憲皇太后陛下

眞に女性中の王樣

私は主婦之友社々長石川君の需めに應じて、上述の如く、日本名婦十二傳を書きました。しかしこの十二といふことは、只數の上から定つたもので、十二以外に名婦が無いといふことでもなく、また私が擧げました十二の人々が、眞に代表的であつて、その他には、代表的といふものが無いといふわけではありませぬ。要するに、私の心の中に最も近くあつた十二人の女性を、そのまゝ、その數に推しはめた丈のことであります。

されば、日本國史の上から、眞に十二の代表者を、選定するといふことになれば、或は訂正の必要があるかも知れませぬ。何れにしても、これまで擧げ來つた十二人の女性は、總ての點といはざるまでも、それ〴〵その特長ある點に於ては、我々が尊敬もし、愛慕もし、また後世の人々が模範として、その方々の言行を、踐み行ふべきものであらうと信じ

ます。

しかしながら私は、今こゝに總括的に日本の女性を語るに就いては、その代表的女性の御一人を看過することができませぬ。

それは申すも畏くあれど、卽ち我々が神様として仰ぎ奉る、明治天皇の皇后であらせられた昭憲皇太后の御事であります。若し明治天皇が日本の男子として、凡る乾德を具へ給ふ御方とすれば、昭憲皇太后はまた、日本の女性の凡る坤德を具へ給ふ御方と申すが、相當であらうと信じます。現に昭憲皇太后の御許に、幾十年奉仕したる故香川伯の如きも、『昭憲皇太后様は、何れの方面から見ても、女性中の王様である。』と申した通りで、實にその圓滿具足の御性格は、何とも申上げやうなき御方で在らせられました。

昭憲皇太后様は、一條家の御出でありまして、御父は、有名なる彼の關白忠香卿であります。

昭憲皇太后様が、御幼少の時から、聰明で御座したことは、今も猶口碑に傳つてをります。既に御十歳にして和歌を詠じ給ひ、古今集などは、四五歳の御時から、それ〴〵御諳

記遊ばされたといふことであります。

感激せる元田侍講の手記

昭憲皇太后様は、御幼少の時分には、貫名右近と申す儒者を御相手に學問遊ばされ、やがてまた、若江薫子といふ、岩垣月洲の門人にて、勤王の志厚き婦人を、家庭教師とし、その者について、漢籍なども御勉强あらせられたとのことであります。

しかし陛下の聖德を、大成するに至らしめたものは、また明治天皇の聖德をも大成し奉つた、元田永孚先生の力が、最も大きにをると信じます。元田先生は明治天皇に對しても、また昭憲皇太后に對しても、二人となき大切なる學問上の御相手でありました。

而してこの學問といふのは、單に書を讀むといふのみではなく、正しき意味に於て、且つ廣き意味に於て、そして深き意味に於ての學問であります。畏れながら、兩陛下の御人格を大成し奉るところの學問であります。

今元田先生が、如何に皇太后陛下に就いて、書かれたかを、此處に掲げます。

昭憲皇太后陛下

『十一月十二日(明治十七年)皇后陛下の召に依りて、後苑の菊花を陪觀す。宮殿の階下より副島種臣と共に、皇后陛下の後に隨步し、苑中處々の菊花を拜見し、萩の御茶屋に、御休憩あらせらる。途中に於て、永孚を呼び給ひ、元田脚痛みは無きか、杖も持たせたりと宣ひたるを、女官より永孚に傳へたり。御茶屋に於て、御前に侍し、酒饌を賜ひ、皇后陛下御手酌にて御盃を賜ひ、師匠と御呼びあらせられたり。御寛話縷々として、其特恩に感戴し奉り、薄暮に至りて宮に還らせ給ふ。永孚等亦隨行して局に歸れり。翌十三日參內後宮に出でゝ、昨日の恩賜を謝し奉る。再び典侍の傳令に依りて、後宮に出づ。紅梅典侍より旨を傳へて曰く、此杖は昨日、皇后陛下より元田に賜ふ筈の處、皇上陛下横濱行幸前、其御沙汰あらせらるゝことを、御失念あらせられたるより、今日之を賜ふとの旨にて、栗の木の御杖を賜りたり。永孚感佩謝せんところを知らず。拜持して歸り、一家皆歡欣、皆恩榮を拜戴せり。詩左に錄す。

靈杖新承ニ詔旨溫一。千秋壽色一枝存。德非ニ卓茂一榮何重。學不ニ孔光一名獨尊。夷險隨レ身全ニ晚節一。扶持由レ道報ニ皇恩一。攀レ龍附レ鳳將行健。鶴膝鳩頭未

レ足レ論。

皇后陛下に侍する毎に、衣服の厚薄を問ひ給ひ、退く時に、必ず病むこと勿れ、風を用心せよとの、御沙汰あり。一夜同區に火あり。翌日、皇后陛下親喩して曰く。昨夜は近火なりしや。吾頻に元田が家に近くはなきやと問ひたるに、陛下(明治天皇)之を聽き、何ぞ元田が家のみ思念する此の如くなるやと、御笑ひありたるなり。永孚感拜して奉謝するに言無し。』

以上の所記にて、殆ど私共の解説をも、想像をも待たずに、當時の模樣がよく判るでありませう。元田先生は、明治六年の頃から、皇后陛下の御前に於て、帝鑑圖説を進講し、或は上杉鷹山の女訓を手寫してこれを奉り、或はフランクリンの十二德に自註を加へ、手錄して之を奉り、機に觸れ、時に應じて、皇后陛下の聰明を啓發し奉つたことは、とても外間の窺ひ知り得べきところではありませぬ。

明治天皇の御聖德を翼成

昭憲皇太后陛下

昭憲皇太后陛下は、畏れながら、天性の麗質に在して、女性の最も誇りとする、端麗、秀美なる御方であらせられました。そして御生れつきの御聰明であらせられ、何事にも深き御洞察と、明かなる御理解とがありました。しかしそれよりも尙ほ有難きことは、更に御自身の御爲といふことは露程もなく、たゞ明治天皇陛下の御爲といふことのみを御心となし給ひ、御一生の間、全く天皇陛下に向つての、奉仕的御生活を過させ給ひましたことであります。

彼れ是れ、陛下の御内助の御德などゝいふことを申すのは、却て畏れ多きことであります。何故なれば、始から終りまで、それのみにて終始遊ばしたものなれば、卽ち御一生がそれであると申すの他ありませぬ。

明治天皇は乾德高き御方にて御座し、その剛毅雄邁なる、如何に天地がひつくり返らうとも、一度御決心遊ばしたことは、御變更がないといふほどでありました。然るに昭憲皇太后は、常に天皇陛下の御傍にあり、御後にあり、冥々裡に聖德を緩和遊ばされ、調節遊ばされ、寛猛兼ね濟ひ、剛柔併せ成し、更に遺憾なきに至らしめ給うたことは、たゞ〳〵

感激するの他ありませぬ。

世間では昭憲皇太后が、赤十字社の事に御心を勞し給うたとか、若しくは明治十年、明治二十七八年、明治三十七八年の諸役に於ける傷病兵をいたはり給うたとか、また慈惠院などに常に行啓あらせられ、病める者や、惱める者に御同情遊ばされたとか、それ等をもつて御高德の例といたしますが、それはそれとして、それよりも尙ほ大なることは、今申した通り、陛下が明治天皇の御聖德を、陰になり陽になり、冥々の裡に御翼成遊ばされたことであります。

元老に對する御心盡し

伊藤公が、その遭難地たる哈爾賓へ出立する少し以前、その子の文吉男が外國へ行くに際し、その夫人梅子刀自と共に、文吉男に向つて、種々物語られた中に、昭憲皇太后陛下に對しては、左の如く語つてをります。

『皇后陛下は、實にお偉い方である。學問は勿論、漢學の御素養も充分にあらせられて、

昭憲皇太后陛下

凡そ日本の女性中、陛下ほどに學問の素養ある人は一人もない。然るに陛下は、それを少しも面にお表しにならぬ。また天子樣に御對面遊しても、至極御謙遜の態にて、何事も膝をついて畏りて仰せになる。決して起つてなど一言も仰せられぬ。』

斯くて伊藤公は、哈爾賓にて難に罹られたから、この話は、伊藤公がその子に對する、遺言の一片となつたのであります。斯く申す私も、元老などから、よく昭憲皇太后の御事に就いて承りました。松方公なども、桂公なども、何れも、陛下の御聰明には畏れ入るといふことを、屢ゝ繰返して申されました。

御聰明とて、たゞ御才智が秀でさせ給ふといふのみでなく、その御聽き遊ばすこと、その御語り遊ばすこと、その御答へ遊ばすこと、一々要所々々に中つてゐるのであります。支那の言葉に、『錦を衣て絅を尙ふ』といふ文句がありますが、陛下は全くその通りで、淺果なる女性は、無き智慧までも、有るかの如く、鼻の先に出す癖があるのに、陛下は、有れども無きが如く、常にそれを愼み、深く藏め給ひて、たゞその折々に、それが自ら必要に應じて、出で來つたのであります。故山縣含雪公は、何事にも批評的で、容易に人にも

物にも許さぬ人でありましたが、昭憲皇太后陛下の御事に就いては、心の底から感激してをられたやうであります。公はまた、

『陛下に謁見して、種々御下問に奉答したる後、時たま陛下は、親しく陛下の御菜園に作はせ給ひて、今を盛りに生長したる野菜類等、あれがよからん、これがよからんと、親しくみそなはせ給ひ、それを家に持ち歸るべく賜りたるなど、その御心入れの程、實に有難さ限り無し。』と語られました。

また西園寺家は、元來琵琶の家であるが、その緣故をもつて、陛下の御前にて、雅樂合奏の際、公望公も琵琶の役を勤められましたが、曲終つて公は、『多事に取り紛れて、久しく調べもいたさず、誠に不調法にて恐入る。』旨言上したところが、昭憲皇太后陛下は、それを御聽きありて、『斯くありてこそ卿もお上の御用には立つたのであらう。』との御言葉があつた。それは畢竟西園寺公が、國家の事に奔走して、遊藝に身を委ねる遑のなかつたことを、御賞美遊されたのであつて、却てこれがために西園寺公は、面目を施したわけとなり、記者に向つても、この事を語られたことがあります。

斯ることは、單に一時の御機轉など申すことからではなく、眞に御心の底から出たものと思ひます。

御歌に現れたる御情操

陛下の御手蹟が見事であり、また詠歌に御堪能であつたことは、隱れもない事實でありますされば、明治天皇の御製なども、屢〻皇后陛下が御手づから御寫し遊したものを、元老などにも賜りたる例が少くありませぬ。

陛下の御歌は、明治天皇の御製集と共に、既に宮内省から出版せられてをりますから、今それをこゝに擧ぐる必要はありませぬが、しかし試みに、その一二を例として擧げますれば、明治九年天皇陛下が東北御巡幸の際に、

國の爲いでますみ代の夏にあひて
　青人草もいや茂るらむ

また明治十一年、北陸御巡幸の際には、

大宮の中にありても暑き日に
　　いかなる山を君は越ゆらむ
初雁を待つともなしにこの秋は
　　越路の空の眺めやらるゝ

との御歌がありました。これ等は何れも、天皇陛下に對し、御思慕の情を詠じ給へる御歌で、誠に有難きものであります。

また明治十年、『民を治むる水を治むる如し』との題にて、

淺しとてせけばあふるゝ川水の
　　心や民の心なるらむ

とありますが、立憲政治創始時代の皇后陛下の御詠として、實に千載不磨の秀詠であります。若し露國のニコライ二世の皇后が、斯る考を持たれたなら、露國帝室最期の悲劇も或は避け得られたらうと思ふのであります。尚ほ陛下が明治十七年、岩倉具視公の追悼に、霜後の殘菊をみそなはして、

昭憲皇太后陛下

霜をへてなほこそ香れ大君の
　かざしとなりし白菊の花

と詠ぜられた如き、また明治二十二年二月、伊藤公が朝鮮より歸朝し、參内した際、
　天つ神しろしめすらむまめやかに
　　君に仕ふる臣の心は

と御自筆にて遊ばされたものを賜りました。惟ふに、伊藤公にとつては、これほど感激に堪へないものは、なかつたでありませう。謂ゆる赤心を人の腹中に措くとは、このことでありませう。

欽仰し奉るべき尚絅の御德

斯くの如く陛下は、常に下は萬民のため、上は國家の元老、大臣にまでも、それぞ\御心をかけ給ひ、而して常住座臥、たゞ天皇陛下の御爲に奉仕遊ばされました。

嘗て先帝――大正天皇――の御幼時の、輔導役を勤めたる、曾我子爵の語られたを聞く

に、陛下には、當時明宮殿下と申上げたる御幼時の際とて、侍臣の某は何とか、斯とか、彼れこれ御話しあるを、昭憲皇太后は聽き給ひ、徐ろに申し給ふやう、

『これ等の者共は、何れも追々は御國の御爲に御使用遊ばす人であるからには、決して誰を好きであるとか、誰を嫌ひであるとかいふやうなことを、御沙汰遊ばすものではない。』

と御諭しあらせられたといふことであります。

斯くの如く、大となく小となく、何事にも深く御心のつき遊ばされたことは、誠に到れり盡せりで、しかも最も愼み深く、そして御謙遜であらせられました。

例へば天皇陛下が、御製を案じ給ふ際、字など御忘れあつて、傍なる皇后陛下に御尋ねになる時にも、決してそのまゝ答へ給はず、御手許にある字書を引き給ひて、これを御前に御差出しになつたといふほどであります。

昭憲皇太后樣は、明治九年フランクリンの十二德の中、謙遜の條を御讀みあつて、

高山のかげを映してゆく水の
　低きにつくを心ともがな

昭憲皇太后陛下

と御詠み遊ばされた通り、實にその御注意の深く且つ細かであつたことは、とても淺果なる當世の新しき婦人等の、考へ及ぶことではなかつたのであります。

私が今こゝに申上げたのは、昭憲皇太后様の、ほんの御聖德の一斑であつて、とても悉く申し盡すことはできませぬ。

要するに、我々が、明治の御代に、斯る崇高なる女性を、我々の皇后陛下と戴いたことは、我々にとつて、如何に幸福であつたか、また斯る御方の在したことを、我々が今後に於て、頌へ奉ることは、如何に幸運であつたかといふことを、自覺せずにはをられぬのであります。

日本名婦傳（終り）

主婦之友

卷頭から最後の一頁まで一氣に讀んでしまへる雜誌は『主婦之友』を措いて他にありますまい。發行部數において東洋第一の『主婦之友』はその充實せる內容に於いても、到底他の追從を許さぬものがあります。

試みに最近號を、一冊だけなりと御覽ください。事實は千鈞の重みをもつて、之を證明いたします。一冊定價五十錢、半年分參圓廿錢、一年分六圓廿錢、外國行一年分八圓です。(但し特別號の割增並に送料を含む)御購讀のお申込は、最寄の雜誌店か、或は直接、東京・駿河臺主婦之友社(振替東京一八〇)宛お申越を願ひます。

日本名婦傳

昭和三年三月二十八日印刷
昭和三年三月三十日發行

〔定價壹圓五拾錢〕

著作者 德富猪一郎

發行者 東京市神田區駿河臺南甲賀町十四番地 石川武美

印刷者 東京市牛込區榎町七番地 竹內喜太郎

發行所 東京・神田・駿河臺 株式會社主婦之友社 (振替東京一八〇番)

日清印刷株式會社印刷

國民新聞社長 德富蘇峰先生著

婦人の新教養

（定價壹圓八拾錢 送料八錢）

婦人の味方として第一に推さるゝ先生が、政治、文學、歷史のあらゆる方面より婦人の進むべき道を傳へたもの。書中の一篇、露國皇室の末路の如き、何人も淚なくして讀む能はざる雄篇であります。

和歌山縣小學校長 野田樟男先生著

誕生より學齡まで

（定價九十五錢 送料六錢）

家庭敎育に關する著書の數多き中に、本書の如く産聲を擧げたその日より、初めて小學校の門をくゞるまでの我が子の觀察を、かくも詳細に、また忠實に傳へたものはありません。是非御一讀を乞ふ。

主婦之友社長 石川武美氏著

不運より幸運へ

（定價七十錢 送料四錢）

たれか幸運を望まぬものがありませうか。本書は著者自身の體驗を錄した、生きたる修養書であります。自らの不運を嘆く人、逆境にある人に眞の力を與へ、光を與へ慰めを與へるものは本書です。

主婦之友社長 石川武美氏著

信念の上に立つ 主婦之友社の經營

（定價壹圓 送料四錢）

僅か十年の歲月の間に、一躍出版界の重鎭となつた主婦之友社の眞精神を傳へたもの。實業によつて立たんとする方、また現在事業の經營にあたりつゝある方にとり、眞に生きたる案内書として好評。

發行所 東京駿河臺 主婦之友社 （振替東京壹八〇番）

東洋大學教授 下澤瑞世先生著

新胎教

（定價壹圓八拾錢 送料八錢）

人の一生は母體に宿る十ケ月間の胎教に依て良くもなり、惡しくもなるといひます。此大切な胎教を心理學と歷史上の事實に基き、平明に傳へたのは本書です。母たらんとする方の御一讀を勸めます。

心相學館長 船井梅南先生著

運命の自己判斷法

（定價壹圓 送料六錢）

五十名家の肖像に實例をとり、何人にも出來る運命の自己判斷法を說いたもの。開運の喜びも、悲運の嘆きも、本書を讀んでおけば、豫め解つて自由自在に身を處することが出來ます。御一讀を乞ふ。

諧謔文學大家 佐々木邦先生作

諧謔小說 のらくら倶樂部

（定價貳圓五十錢 送料十二錢）

自ら微笑の類を傳うてくるやうな小說、誰の前でも讀めるやうな面白い小說とはこのことです。諧謔のない生活ほど殺風景なものはありませぬ。まづ本書を讀んで、その妙境を御開拓くださいませ。

主婦之友無線記者 今井紀氏著

素人に手頃な遠距離無線受信機の作方

（定價貳圓七拾錢 送料十四錢）

近くの放送は勿論のこと、遠方の放送までも手に取ることく聽くことの出來る受信機の作り方を、何人にも解るやうに說明したもの。これさへあれば、上海、浦鹽、南米の諸放送も聽取できるので有名。

發行所 東京駿河臺 主婦之友社 （振替東京壹八〇番）

醫學博士 原榮先生著

肺病患者は如何に生すべきか

（定價貳圓八拾錢　送料拾錢）

肺病患者は醫者を選ぶ前に、看護者は療養器をとる前に先づこの書を御覧ください。本書の示す方法により、不治とされた肺病の全治した實驗例は如何に多いことでせうか。御一讀をお勸めいたします。

醫學博士 原榮先生編

肺病全治者の療養實驗談

（定價壹圓八拾錢　送料八錢）

肺病は必ず治るといふ原博士の主張を、事實に於て證明した實驗錄ともいふべきものであります。療養の途上にある方は勿論のこと、[illegible]た方も、必ず一讀すべき好著として到るところ好評です。

海軍々醫少佐 江口有先生著

肺病の無錢療法

（定價九拾錢　送料六錢）

肺病は不治のものとも、また金力を以てのみ全治を得られる病氣ともいはれます。この迷妄を破つて、如何なる人にも適用できる療養法を公開したのが、即ちこの書であります。是非御一讀を願ひます。

醫學博士 竹野芳次郎先生著

子供を丈夫にする

新育兒法

（定價貳圓七拾錢　送料拾錢）

母親に正しい育兒の知識がなかつたため、空しく愛兒を鬼籍に上せた例は如何に多いことでせう。本書は博士の永年の研究と經驗を傾倒して成つたもの。母たらんとする方、また育兒の失敗者の必讀書

發行所　東京駿河臺　主婦之友社　（振替東京一〇八番）

前宮内省御用掛 岩崎直子女史著

安産のしるべ

（定價貳圓卅錢 送料八錢）

本書はその名の如く、姙婦が必ず安産し得る道を、平明に傳へたものであります・凡そ婦人にして安産を希はぬ方はありますまい。難産の不安を一掃して、眞に安産の喜びを與へるものは本書です。

前宮内省御用掛 岩崎直子女史著

初産婦に必要なる

姙娠十ケ月の心得

（定價壹圓五拾錢 送料八錢）

何人にとつても、姙娠十ケ月ほど不安の多きものはありませぬ。同時にこの期間ほど警戒を要するものもありませぬ・この書はこの期間の心得一切を網羅したもの。「安産のしるべ」の姉妹篇として好評。

慶大醫局長 長谷川茂治先生著

姙娠と分娩の新知識

（定價壹圓九拾錢 送料拾錢）

家庭でも、學校でも敎へぬ性的知識を、一切發表したのはこの書です・性的知識のなきために一生不幸に泣き、または破鏡の歎を見たる婦人の如何に多きことでありませうか。ぜひ御一讀を願ひます。

醫學博士 石崎仲三郎先生著

姙娠に伴ひ易い病氣と手當

（定價貳圓卅錢 送料八錢）

姙娠に伴ふ病氣ほど恐ろしきものはありませぬ。子癇、産褥熱皆なそれであります・本書は、多くの實驗例によつて、その豫防法を詳述したもの。姙婦は先づ本書を讀んで安心をお求めくださいませ。

發行所 東京駿河臺 主婦之友社 （振替東京壹八〇番）

手藝大家 藤井達吉先生著

家庭で出來る

手藝品製作法全集

（定價貳圓 送料拾錢）

出來るだけ平明に、また實際的に、新しき手藝一切の製作法を傳へたもの、日を逐うて、手藝熱の高まりつゝある時に際し、ぜひ本書を御一讀くださいませ。新手藝の教科書として激賞されつゝあります。

手藝大家 藤井達吉先生著

素人のための

手藝圖案の描き方

（定價參圓 送料十二錢）

どんな立派な技術を備へてゐても圖案の惡い手藝品は、一顧の價値なきものとなつてしまひます。この大切な圖案の描き方を懇切に傳へたものはこの書です。手藝愛好家の好參考書として好評です。

東京女子割烹學校長 指原乙子女史著

家庭パンの作り方

（定價四拾錢 送料二錢）

手輕な家庭パンの作り方を傳へたもの。自分の手で、丹念に作つたパンほど美味しいものはありませぬ。何卒これによつて、思ひ通りのパンを作りくださいませ。どんな種類のものも一切收めました。

理學士 田邊尚雄先生著

誰にもわかる

樂譜の知識

（定價壹圓 送料六錢）

樂譜の讀み方を、この書ほど解りよく書いたものはないといはるゝ名著です。一度樂器を手にしたほどの人は、本書を讀まねば恥とされたほどのもの。各女學校に於ては絕好の參考書として好評です。

發行所 東京駿河臺 主婦之友社 （振替東京壹〇八番）